
聖竜の姫巫女?

ルシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖竜の姫巫女？

【Nコード】

N3073BA

【作者名】

ルシア

【あらすじ】

大神官エルヤサフの口より、第四の巫女であったミュシアが姫巫女として生きていると聞かされ、彼女の存在に一縷の希望を見出す神官のルーク。一方、そのルークの名を騙りつつ、王都カーディルへ辿り着いたミュシアは、セルルやシンクノアとともに王立図書館へ向かう。セルルはカルディナル王国のプリンク、エリメレクとともに禁術許可の許しを<円卓の魔導士>から得るなど、姫巫女であるミュシアのために影で動くが、<聖竜の盾>の継承者が横槍を入れてきたことにより、彼の計画には若干の狂いが生じてしまう…

⋮
○

第1章 大神官エルヤサフ

光の女神ルシアと、聖竜ルシアスを祀った神殿の敷地は、それぞれ縦の長さが4・4エリオン（1エリオンは約1km）、横の長さもまた4・4エリオンあり、ちよつとした町か村がひとつおさまるくらいの広さがあつたと言えるだろう。

ルシア神殿の裏手には、巫女や女神官たちの住まう建物が並び、ルシアス神殿の後ろには神官たちの住居と牛や羊などを飼う放牧地がなだらかに広がっていた。そこには野生の鹿なども住まっていたが、この＜聖地＞では当然のことながら狩りは禁止されている。

そしてルシア神殿とルシアス神殿のちよつと中央あたりに、将来巫女や神官となることを希望する子女の集う「聖契学院」があるのだが、この学院の院長は代々、ルシアス神殿最高位の地位にある大神官が務める慣わしとなっていた。

第六十一代聖契学院の学院長にして、大神官であるエルヤサフ卿は、第十三の月に神殿前に捨てられていた孤児であり、学院時代は成績のあまりパツとしない、実に目立たぬ聖徒であつた。そんな彼がいわゆる神の御意志　神意により、一神官にすぎぬ身から大神官へと権力の最高位にのぼりつめたことは、ただ運命の悪戯としか呼びよふのないことだつたかもしれない。

ルシアス神殿の神官の位は、大神官（大僧正）、司教、司祭、僧正、僧侶、神官、神官見習いの六段階である。聖契学院を卒業し、神官見習いとなつた者がまず就く仕事は、十二州に分かれているルシアス王国をそれぞれ治める、十二大公が毎月献上する神殿税を規律正しく区分するというものであつた。

すなわち、第一の月であるハゼルには、ルクセリア州の大公が牛や羊や山羊、その他革製品や布製品や染料といった細かく規定された奉献物の他に、その州の人口に従つて納めなければならぬ神殿税を上納するために、大公自身が長い家臣の行列を率いて聖都までの

ぼって来るのである。そして第二の月のアゼルには、同じように今度はルクシエント州の大公が、第三の月のマゼルには、ルムナディール州の大公が、第四の月のカゼルには、ルキンエネム州の大公が、第五の月のニガルには、ルネルヴァ州の大公が……といった具合に、必ず月のはじめに、ルシアス神殿にはたくさんの家畜や物品や金貨などが納められ、それを記録・保管するのが神官や神官見習いの主な仕事ということになっていた。

エルヤサフは聖契学院の聖徒であった頃から、あまり信仰熱心なほうではなく、自分はたまたま「神意により」第十三の月に神殿前に捨てられていたから、いわば成りゆきのようなもので神官職に就いているにすぎないと考えていた。出世といったものにもまるで興味はなく、自分は一生このまま、毎月牛や羊や山羊の数を数え、家畜の世話をして終わるのだろうと思っていた……そんな彼の人生が変わったのは、先代の大神官に夜な夜な可愛がられるようになったからに他ならない。

エルヤサフは紅顔の美少年で、大神官は他のどの少年よりも彼をもっとも臍屛にし、愛していた。以来、彼は僧侶、僧正、司祭、司教へと、特にこれといった功績もなしに出世の階段を順調に上つていき。最後には、彼に性的虐待を長きに渡って施した男の指名により、大神官の位を継ぐということになったのであった。

エルヤサフは六十五歳という年齢に達した今、自分の人生を振り返ってみて（まったく奇妙なことだ）と感じている。彼は先代の大神官のシャドミエルが、自分のことを屈服させた夜以来、もともと中途半端にしか持っていなかった信仰を完全に捨てていた。そしてどこまでも神に挑戦するという道を選び取ったのであるが、自分の計略がうまくいけばいくほど、彼は神に対する深い畏敬の念を感じずにはおれなかったからである。

聖都ルシアスが陥落した夜、王城から竜が火を吹くあり様を眺めながら、エルヤサフは（燃えろ、燃えろ、もつと燃えろ！！こんな腐った土壌に建つ都など、灰になってしまえ！！）と、一種の狂気

じみた歓喜とともに心の中で叫んでいた。

彼がいたのは王城にある、南に面した塔の一室で、そこにはレグナ大公とユージェニー女王とが、エルヤサフが見ているのと同じ光景を、彼とは違い、恐怖を持って見つめているところであった。

「わたしは、こんなことは聞いていないっ！奴らく地の崖ての民とやらは、姫巫女の御身のみをさらい、都には手出しはせぬと誓約していたのだぞっ！！」

「まあ、これはこれでよいわ」

ユージェニー女王は、姫巫女の非業の死がよほど嬉しかったのであろうか、目の前で自分の治める国の民草が逃げ惑おうと家をなくそうと、あるいは命を落とそうとも 眉ひとつ動かさぬ素振りであった。

「もしあのまま、ルシア神殿とルシアス神殿がそのまま残っておいたらば、民たちが姫巫女の再臨を是非にとわらわに望んでおつたろうからの。じゃがまあ、姫巫女は死に、十二人いる巫女も、レイヴァン、そなたの娘サフィをのぞいて命を絶つか神官どもに殺されるかしたろう。これぞ、わらわが多年に渡って望んでいたことじゃ。

あの目障りな巫女どもさえいなくなれば……ルシアス王国はこれからもっと栄えることであろうぞ」

「したが、ジニー」

女王の従姉弟であるレイヴァン卿は、彼女のことをそう愛称で呼んだ。

「ルシア神殿とルシアス神殿は、これから形式上は必要であるのだぞ。我が娘サフィを姫巫女の位に就け、その後も我々にとって都合のいい巫女を選定していく必要がある。それから、神殿税の横流しについては」

ここで、レイヴァン卿は狐に似たずる賢い目つきで、エルヤサフのほうにちらと視線を送った。

エルヤサフは、竜どもの吐く息にはいくつ種類があることに気づき、その赤や紫といった炎の色に魅入られたような眼差しを注い

でいたのだが、レグナ大公の視線に気づくと、瞳から狂気の色を消し、彼のほうを振り向いた。

室内には精緻な模様の描かれた絨毯が敷かれ、部屋の中央にある螺鈿細工の施されたテーブルには、最上級のワインとグラスが並んでいる。女王は、窓の外の竜の炎から目を離し、象牙の暖炉に燃える赤い炎のほうに視線を転じると、その上に描かれた若き日の自分の肖像画と、白いユニコーンの紋章旗をしばしの間眺めやった。白のユニコーンこそは、ルシアス王国を象徴する紋章だったからである。

「お約束どおり、神殿税については、うまく女王陛下に上納いたしますこと、このエルヤサフ、心からの忠誠にかけて誓いますぞ」

エルヤサフは自分でも、心にもないことを言っているとわかっていた。それは、神殿税を横流しする気がさらさらないということではなく、単に彼は人間としてユージェニー女王のことも、レグナ大公のことも好きではないのだった。

何かの運命の間違いにより、今自分は大神官などという地位に就いているが、もともと彼はただの孤児であり、それも第十三月という忌み月に生まれた子なのだ……そんな汚らわしい平民以下の人間と、本来ならば彼らは口を聞くことすら厭ったに違いない。しかしながら、こと金というものが絡むと、そのような些事は、貴族にとつてさえあまり心を煩わす原因とならないようだった。

「そうよのう。汝ら、神官たちというのは、毎月毎月十二大公の神殿税の処理に押し潰されて、吐き気を催さんばかりだろうからの」
ユージェニー女王はその日、灰色がかかったラベンダー色のドレスを着ていた。まだ五十代ながら、その髪には白髪が混ざっていたが、その黒と白の髪のコントラストに、ラベンダー・グレイのドレスは実に映えていたと言わねばなるまい。若き頃の美しさは去り、その目許や口許には小じわが目立ったが、それでも彼女が「その気」になりさえすれば、女王は今も、うら若き男どもが何かを勘違いしてしまうほど、妖艶な笑みを浮かべることが出来た。

「さようでございます、女王陛下」

エルヤサフは恭しくお辞儀をしてから、ユージェニー女王の斜め前の椅子に座った。隣のレグナ大公がワインを注いでくれると、エルヤサフは酒類を禁じられている聖職者であるにも関わらず、良心が痛むでもなく、大公と祝杯を上げていた。

「あのく神殿税」というのはまこと、意味なきものでございますよ。それに、十二大公はおのおの、自分たちの捧げ物こそ全十二州きつて最上のものとすべく、毎年凌ぎを削っているようなところがありますからな。かわりに彼らは姫巫女から託宣を受け、州を維持していくに当たつての神の言葉を受けたりするわけですが……レグナ大公、あなたには毎年、さしたるお言葉もないのでしたな？」

エルヤサフにそう指摘され、レイヴァン卿は暫しの間不機嫌そうに押し黙った。そして内心エルヤサフは、（この茶色い髪狐めが！）と彼のことを蔑んでいたのであった。

レイヴァンレグナは、ワインの名産地を抱えるルクシエント州の貴腐ワインの芳香を楽しみながら、それを一口味わうと、再びワイングラスを落着かなげにくゆらせはじめた。

「わたしは毎年、あの姫巫女殿に同じことを言われ続けて来たのですよ。『私はあなたには何も言うことはない。自分の道を進んでいられるが良いだろう』とね。ですが姫巫女は、ルクセリア州やルネルヴァ州の大公には、流石は姫巫女さまというような、素晴らしい御言葉を多く授けているのです。そんなことまでは神でもなければわからぬだろう、といったような言葉をね。お陰でわたしは彼女の託宣通り、己が道を進んでここまでやって来てしまったというわけだ」

（ふん！何を言うか。このこそ泥の小心者の狐めが。姫巫女の託宣が貴様になんらの益ももたらさなかったのは、貴様の性根がそれだけ腐っているからよ。言っても無駄なもの、意味のないものには、神の恩恵など与えるだけ無駄というもの。その点はユージェニー女王も同じこと……本当はただの女のくせに、自分は女王だ、聖竜の

未裔だなどと、その地位の上であぐらをかいているから　そのよ
うなものは結局、神から何も得られはせんのだ)

そこまで考えて、エルヤサフはふと、自嘲の笑みを顔に浮かべた。
自分もまた、こやつらと同じ穴のムジナ、地獄へ落とされるべき罪
人であることを思いだし、もはや取り返しのつかぬ道に大きな一歩
を踏みだしたことを、あらためて感じたからである。だが彼は、炎
に包まれた聖都を眺めやっけていてさえ、そのことを微塵も後悔して
はいなかった。

その後三人は、今後のこと　こうなつた以上は、ルクシンドラ
になるべく早く遷都すべきであるという計画を、どうやって速やかに
押し進めていくかを綿密に話し合った。ルシアス王国第三の都と
言われるルクシンドラには、もともとルシア神殿・ルシアス神殿の
本殿に次ぐと言われるほどの大神殿があり、ここでは生臭な神官と
墮落した巫女たちとがうまい具合に神殿運営に当たっているのだ。
つた。

エルヤサフは、ルクシンドラ神殿の大神官の地位にあるシエルミ
エルと懇意にしていたし、彼もまた自分と同じ男色家であることも
知っていた……だが、これらすべてのことを通してもエルヤサフは、
(これぞ、神などこの世に存在せぬ証拠よ) などと考えてはいない。
といよりも彼は、<滅び>そのものをずっと待ち望み続けていたの
だ。どのくらい悪というものが積み上がれば、神とやらはその重い
腰を上げて人間世界へ介入してくるのか　彼はそのことを試して
みたいと不遜にも考えていたのである。

盗つ人や篡奪者のような罪人と、心清らかなる会合を終えた後、
エルヤサフは妙に清々しい気持ちで王城内にある自分の寝室へ戻る
ことにした。神殿内の様子を探らせていた側近のひとり呼び寄せ、
彼から聖竜の槍がく地の崖て人>に奪われたこと、また聖なる槍を
守ろうとして、その過程で何人も神官が討ち死にしたこと、また
竜騎兵が三十数名もの神官たちを捕虜として捕えていったという報
告を受けた。

「して、ルークはどうした」

聖竜の槍は、出来れば奪われなくなかったというのが、エルヤサフの本音ではある……そして彼は、ルークか、あるいは師範のひとりであるラミアスあたりが、聖竜の槍を手にとって敵を撃退せしめるのではないかと期待していたのだ。

「それが、あと今一步というところで敵に追いつめられてまして、最後は相手に情けをかけられるという形で、彼自身は傷を負いながらもまだ生きております。ただし、ラミアスさまは、銀の髪に紫色の瞳をした男に討ち取られ、落命されました」

「そうか……」

（あのふたりの力をもってしても、無理であったか）　そう思い、エルヤサフは顎の白い髭を何度もしごいた。ルークというのは、実は彼が肉欲的なことを抜きにして、もっとも目をかけている僧侶の青年であった。

彼には誠の信仰心なるものがあり、自分の手にかけることで、その信仰心を墮落させてやろうとエルヤサフは邪心を抱いたこともあったが、今はそれよりもさらに良い計画が彼の脳裏に閃いていた。これからのち、おそらく自分はルクシンドラにある神殿で大神官の摂政的地位に就くということになるだろう……そして、次代の大神官には必ずルークのことを指名しようとエルヤサフは考えていたのである。

（あやつの操りにくい潔癖さを、レグナ大公はどうされるかな。そしてルークもまた、穢れきった神殿を肅清するのに、気が狂いそうなほどの思いをすることだろう。だが、もし本当に神がいるのなら、新しい時代といったものは必ず開けていくに違いない……）

エルヤサフはとりあえず、ルークが生きていたと聞いて満足した。彼の〈棒術演舞〉はまことに見事で洗練されており、あれが二度と見られぬと思っただけでも、エルヤサフには痛恨の極みであった。師のラミアスを失い、今ごろ悲嘆か復讐心に暮れているであろう彼の純粋な心を想像してみただけで　エルヤサフは手の内が汗ばむ

ほどの興奮を覚えたものである。

(さて、と。とりあえずこれからもわしは、ルークが軽蔑するような汚れきった豚のような生涯へと邁進してゆこう。そしてわしがすべての穢れを引き受けて天寿をまっとうした時　神はわしをどうするであろうな。「底知れぬところへゆけ」と命じられるであろうとは思われるが、この世に<悪>といったものは、かような形でも必要なものなのだ)

エルヤサフは当然、自分が詭弁を弄するただの老人であることをよく自覚していた。ただ、彼自身は己の過去を振り返ってみて、こゝも思うのだ……「一体自分に、他にどんな生き方があったのだ？」と。自分が神殿に生まれたも同然な身ながら、中途半端な信仰心しか持ちえていなかったがゆえに、シャドミエルのような男に犯されることになったのか？それを神は見て、知っていながら、何十年も放置し続けたというのか？そもそも、自分のことを両親が捨てなければ、大神官になることもなく、その場合自分は一体どんな人生を送っていたのか　今よりもずっと若い頃は、エルヤサフもこうしたことを繰り返し自問したものであった。

だが、彼はその答えを求めるのが意味のないことであると、とうの昔に知っていた。それに、裏切りの齒車はすでに動きはじめてしまったのだから、その最後がどうなるのかを命ある限り見届けたいというのが、エルヤサフが今もつとも望んでいることであつた。その後、己の罪ゆえに地獄へ落ちるのであるとか、そこで永遠に消えぬ業火で焼かれるといった情景は、彼の心になんの感銘ももたらすこととはない。

地獄で火の池に溺れながらも、神の實在に感謝することは可能かどうか、そのような観念論によつてしか、エルヤサフは聖書で言われる天国や地獄といったものを想像することが出来ない……そして彼のその想像によれば、火の池で焼け爛れ、針の山で串刺しになっている罪人を尻目に、天国で安らぐことの出来る人間などはみな、所詮偽善者でしかなかった。

天国へいけた者が、そこへ行けなかった者のために執り成しの祈りを祈ってこそ、すべての人間が救われるのではないか？　神がもしそのような存在だというのなら、自分もまた涙にかき暮れながら心から懺悔できるものと、エルヤサフはそう感じるのであった。

なんにしてもこの夜、エルヤサフは王城の贅沢なしつらえの寝室で、大いびきをかいてぐっすり眠った。ユージェニー女王やレグナ大公が怯えていたように、彼は竜がもし王城をも襲ってきたら……などとは、露ほども想像しはしなかった。何故ならそれで自分が死ぬことになったとしても、エルヤサフは少しも後悔などしなかったろうからである。

ただし、その場合は出来ることなら、ユージェニー女王とレグナ大公の胴体が竜の牙に引きちぎられるところを見てから死にたいものだとは、思っていたにせよ。

聖ルシアス歴、1189年の第十二の月　聖都では、奇跡が起きたと人々の間で噂されていた。

通常であれば三月頃、春の先触れを知らせるように咲くユニファの白い花が、ルシア神殿・ルシアス神殿が元あった場所に、一夜にして満開の花びらを咲き誇らせていたからである。

ユニファというのは、アーモンドの花によく似た、芳香性のある白い花で、長い冬が終わったあと真っ先に咲くことから、ルシアス王国では国花とされており、また姫巫女の純潔を象徴する花としても人々から愛されていた。

僧侶のルークは今、噂の真偽を確かめるために、かつて自分が寝起きしていた神殿跡地に立ち、竜の炎で焼かれた黒い土地がすべてユニファの白い花弁によって埋め尽くされているのを眺め、自然、涙が頬を伝っていくのを止めることが出来ないほどだった。

（姫巫女リリアさま！！ラミアス師匠……！！）

その他、ともに槍術と神学を学んだ同窓の死んだ友のことを思い、ルークは一夜にして生えたという薄茶色の樹木の間を、夢見るような心地で通り抜けていった。

ふとした瞬間に、失った友が木陰から姿を現すのではないかとすらルークには思われたが、心の激動が去り、涙が一通り流れ落ちると、彼は再びいつもの深い物思いの中へ捕われていった。

（大神官エルヤサフさまは何故、遷都に賛成なさったのだらう。確かに、竜の放った炎の力により、聖都ルシアスの大地は灰燼と帰した……この黒と灰色の土地の上に再び建物を建てたとて、姫巫女さま亡き今、かつての栄光と繁栄が再び戻ってくるわけではないということも、一応理屈としてわからぬではない。だが、我ら神官がここを離れてどうするのだろうか！むしろ我々こそがここに残り、再び大地を再興させ、民の範となる姿勢を示すことでこそ、もう一度多くの民草が故郷へ戻って来ようというものではないのか？）

ルークは、ユニファの花が狂気の如き白さで咲き誇る樹間を、幻の中を歩く人のように、ぼんやり歩いていった。そして、花芯にほんのりとさす薄桃色の筋に目を留めると、枝のひとつに口付けした。ルークの目撃した限りにおいて、竜は数種類の炎を操れるらしく、その中でもっとも高温である紫色の炎。それが石造りの建造物の上に吐かれると、見る間に黒焦げとなっていたおぞましい情景を思いだした。聖都ルシアスには、木造作りの建築物は少なく、ほとんどが耐火性のある石造りである。にも関わらず、竜の炎はそんなことにはお構いなしに、ほんの一瞬にして千年もの歴史ある建物郡を次から次へと破壊していったのである。そして石が崩れずに残ったものに関しては、竜の鋭い爪や荒々しい尾がものを言った。その上、竜の吐く火炎にさらされた大地というのは、土地が幾層にも深く犯され、そこにこれから何か植えたとしても、あと七年は取り入れが不可能であるように思えるほど。毒されて、消し炭のようになってしまうのである。

ルークは竜が神殿の外で暴れまわっている間、ルシアス神殿の地

下最下層にある＜聖竜の槍＞を守るため、師であるラムミアスや他の神官たちとともに、普段手にしている使いこんだ棒ではなしに、先端に鋼の刃の着いた本物の槍を持つということになった。

神官たちが常時体を鍛え、棒術に打ちこんでいるのは当然、神殿にこころした危険が訪れた時、姫巫女をはじめとした巫女たちや女神官、またさらには＜聖竜の槍＞を守るためではあつたのだが、あまりに長く平和が続いたためであろう、神官の中には敵とはいえ、人を殺すという行為にためらいを持つものが続出、地下の第一階層、第二階層もすぐ突破され、早くも第三階層の扉を残すのみとなつてしまつたのである。

その石造りの堅牢な扉の前で、じりじりと後退しつつも、ルークは何人かの竜騎兵を打ちしとめた。打ちしとめた、などといっても、殺したということではなく、うまく隙を窺つて、鎧で補強されていない頸部などを槍の柄で殴打したということだつた。

「手ぬるいな」

蒼の胄から白銀の髪を流し、紫の深い色の瞳をした男は、自分の脇に部下がひとり倒れたのを見て、そう呟いた。

通路は狭く、常に一対一でしか渡りあえないよう工夫して設計がされている。もし外敵が侵入して来た場合は、棒術師範たちが＜聖竜の槍＞を守るべく、ここで敵とうまく渡りあつて倒せるようにという意図があるのだろう。

「どうやら彼には、並大抵の者では拉致があかないようだ。このままではただ徒に時間を浪費するだけ……一応先に忠告しておくが、俺には峰打ちなどという甘い技は通じないものと思つて、本気でかかってきたほうがいい。それが、部下たちの命を奪わなかつたことに対する、俺のせめてもの氣遣いだ」

そう言つと男は、蒼い胄をとつてさえ寄りこした。廊下にかかる松明の光に、銀の髪に縁取られた若い男の顔が浮かび上がる。

(……………出来る!……)

ルークは相手の槍の力量を瞬時にして押し量り、少しでも自分の

側が隙を見せれば、打ち取られるものと覚悟した。しかも、竜騎兵たちの持つ槍はみなそうなのだが、彼が持つ青緑に光る槍もまた、神官たちの使うものより柄がかなり長いのだ。

おそらく彼ら竜騎兵は、竜に乗って槍で獲物を仕留めるせいもあって、そのような長槍を使っているのだろうとルークは推測していたが、自分も数十名もの竜騎兵と渡りあうことで、切っ先に鋼の刃のついた槍の感触に、今では大分慣れてきつつあった。

（聖竜ルシアスよ！我に加護を与えたまえ！！）

ルークが心の中でそう呟き、槍を真っ直ぐに立て、そこに右手を十字にするよう交差した時のことだった（これが神官たちの、試合開始前の作法なのである）。ルークと交互に敵と渡りあってきたラミアスが、ぐいと弟子の肩を後ろへ引いて寄りこしたのである。

「ルークよ、彼のことはわたしに任せろ」

ラミアスは四十年代半ばの、司教の地位にある神官であり、神学に通じているのは当然のことながら、その温厚な性格とは似合わぬ、神業とさえいわれる槍の使い手であった。

「ですが、ラミアスさま。あなたがもしお倒れになったとあっては、もはや後がありません」

「ははは。言うてくれるな、ルークよ。まるでわたしが最初から負けるものと決めてかかっておるようではないか。わたしは、もしかしたら待っていたのかもしれない……彼のように強い槍の使い手が、自分の前に現れる瞬間をな。もし、わたしがこの男に敗れたとしても、こやつを恨むでないぞ、ルーク。これはわたし自身の望んだ、わたし自身の戦いなのだ」

「師匠……」

普段は開いているのかいないのかわからぬ、ラミアスの細い目から闘気のような凄まじい力が放たれているのを感じると、ルークは彼の後ろに身を引くしかなかった。

もちろんルークは自分の尊敬する槍術の師の勝利を疑ってはいなかった。ただ、敵が数において勝っていることを考えれば、自分

がひとりでも多くの竜騎兵を倒すのが望ましいであろうと、そのように計算していたのである。

銀髪に紫の瞳の男と、ラミアスの打ち合いは熾烈を極めた。おそらく、ほんの数分間に、両者は五十数戦は槍の柄や穂を打ち戦わせたことだろう。

今では、後ろのほうにいた竜騎兵たちも、このふたりの打ち合いを何かに魅入られでもしたかのように、息を殺して見守っていた……さらに二十数分が過ぎ、ふたりが一旦距離を取って、呼吸を整えた次の瞬間に　すべては決まった。

ラミアスの鋼の穂が、銀髪の男の胸当てに届いたのである。だが、無常にもその瞬間、ラミアスの槍の切っ先は砕け散っていた。

「なんだと!？」

驚愕に目を見開いたまま、ラミアスは絶命した。紫の瞳の男の槍が、彼の腹部を刺し貫いたからである。

「ラミアスさまっ!!」

自分の師匠が勝ったとばかり思っていただけに、ルークの絶望はより深いものとなった。ラミアスの体を抱え起こした時、ルークの白の神官服は赤く血で汚れた……彼はラミアスが生前好んでいた聖句のひとつを呟くと、頬の涙をぬぐい、闘神の如き眼差しによつて、銀髪の男のほうを睨みつけた。

「卑怯者めっ!! 貴様の胸にラミアスさまの槍が届いた時点で勝負はついていたとは思わぬのか!？ それを、それを、よくもこんな……っ!!」

「すまなかつた、とは思っ」

紫の不思議な色の瞳をした男は、甲斐の言葉でも述べるように、静かに言った。

「だが俺も、卑怯者とならずにすむよう、これでも一応気は遣ったのだ。このことを俺はとも恥かしく思っし、自分の勝利であるとも決して思わない。一対一の同条件の勝負であったなら、もう一度手合わせしても俺は負けることになっただろう。ルークとやら、貴

公の師匠は本当に素晴らしい槍の使い手だった。それをむざむざ殺すことになり、俺も残念に思うが……これが戦争というものだと思いい、諦めてもらおう他はない」

「なんだとっ！？よくも貴様、そんなことが言えたものだなっ！！戦士の風上にもおけぬ、卑怯者のくせにっ！！」

ビュツと風を切つて、ルークの槍が唸った。そしてその次の瞬間何故この銀の髪の男が、「気を遣った」と言ったのか、その言葉の意味がルークにもわかったのである。何故とって、ほんの数戦槍の柄を打ち戦わせただけなのに、鉄の槍がなんの前触れもなしに真っ二つに折れたからだ。

「なに！？」

「だから、すまないと言っただ」

紫の瞳の男は、相も変わらず落ち着き払った顔の表情と声音で続けた。

「俺たちの使っている鎧冑は、竜の皮膚を何層にも厚くして作ったものだし、この槍は鉄や鋼よりも強い鉱物によって出来ている。俺も噂として伝え聞くだけだが、このジルコンドという名の青緑石は中央世界のどこでも取れぬらしいな。俺も無用な殺生はこれ以上避けたい……神官のルークよ、どうか黙って我々に目の前を通り過ぎさせ、聖竜の槍を戴かせてほしい」

「……………っ！！」

（無用な殺生は避けたいと言いながら、何故ラミアスさまのことは殺したっ！！）

そう叫びたい衝動にかられ、ルークは下唇を血が滲みそうなくらい、ギリと噛みしめた。そしてそのままの姿勢で後ろへ下がり、重い石の扉を後ろ手に開ける。

聖竜の槍は、持つ者を選ぶと言われていた。ゆえにこの時モルークは、憎しみに心を燃え立たせている今の自分が、その槍の使い手に選ばれるとは露ほども思いはしなかった。ただ、この目の前にいる銀の髪に紫の瞳をした男と、ほんの少しの間でいいから、同等の

力が欲しいと願ったのだ。勝負がつくまでの間だけでいい。涼しげな顔の表情の男に手傷を負わせることさえ出来れば、次の瞬間槍が重くなり、持ち上げられなくなっても構わないと思っていた。

「やはり、そう来るか」

壁にかかる松明の光の下、透明な水晶のケースに収められている槍を、ルークが手にする姿をファルークは見守った。浄めの水晶によって守られた聖竜の槍は、聖職にある者以外が触れようとすると死の呪いがかかるという話であった。

ゆえに、このこともファルークの中ではある意味、計算の内にあつたことなのである……師匠のラミアスを殺されれば、その怒りと復讐心から、ルークが聖竜の槍に手をだすであろう、ということは。聖竜の怒り、今こそ思い知れ!!この蛮族どもめっ!!」

ルークが聖竜の槍を両手に握りしめると、その黒い柄の部分に銀の神聖文字が一瞬浮かび上がった。

(これが、聖竜の槍……!!)

石室の中でふたりきりになると、ルークが容赦なく槍を振るってファルークに猛然と襲いかかってきた。先ほどとは比べものにならない、手に痺れるような衝撃が走り、ファルークは思わず、ジルコンドで出来た槍を取り落としそうになつたほどである。

「うおおおッ!!」

獣のような唸り声を上げて飛びかかってくる神官の前に、ファルークはらしくもなく気圧された。というより、肝心の聖竜の槍と呼ばれる槍自体から 何か禍々しい力にも似たオーラが発散されており、ルークはまるで槍の持つ邪悪な力に操られてでもいるかのようだったのだ。

そのような相手に流石のファルークも長くは持ちこたええず、二十数戦打ち合った末、今度は聖竜の黒い槍によって、ジルコンドの槍を真つ二つに折られていた。

「ファルーク、加勢するぞっ!!」

その時、仲間の竜騎兵であるアレクとラウル、それにカイルとシ

グマが助けに入ってくれなかったとしたら、おそらく自分は心臓が胸、あるいは頸部か頭部を刺し貫かれて死んでいたろうとファルークは思った。

だが、彼らから再びジルコンドで出来た槍を受けると、手強い相手ながらもなんとかルークの手から聖竜の槍を引き離すことが出来たのである。

「やめろ、殺すなっ!!」

後の禍いを絶つためとわかっていたが、ルークの頸部にアレクが槍の穂を立てようとするのを、ファルークはすんでのところでやめさせた。

「彼はまだ幼い……おそらく、十六か七といったところだろう。それでいて我々とここまで渡りあつたのだ。そのことと彼の聖竜の槍を守りたいという想いに敬意を表し、この宝物倉では血を流すべきではないと、俺は思う」

普段、あまり感情を表にださないファルークが、声を荒げてそう叫んだためであろう、アレクは「おまえがそう言うのなら」と言って、ルークの体から静かに手を離れた。

ファルークは床に転がる聖竜の槍を拾いあげ、意外にも軽いことに驚いていた。アシユランスから聞いた話によれば、相応しくない者が触れると、十トンもの鉛でもあるかのように、到底持ち上げられない代物だと聞いていたのだが……。

そう思いつつ、ファルークが何気なくシグマに聖竜の槍を手渡すと、彼はその途端に床へ倒れ伏していた。

「ファルーク、悪ふざけはよせよっ!!」

「ああ、すまん」

怒ったように赤い顔をしたシグマにあやまり、ファルークは再び聖竜の槍を手中に収めた。

(そうか。槍が自分の主に足ると認められた人間でなければ、おそらくこの槍は持ち上げることすら叶わんということか)

石室を出る時、ファルークは神官の少年が蹲って涙を流し、体を

震わせている姿を最後に見た。冷たい石の床に両膝をつき、彼はまるで神に対して懺悔するように、何度も壁に額を打ちつけていた。

「ラミアスさま、許してくださいっ！！僕ではなく、最初からあなたが聖竜の槍の使い手になっていれば……っ！！」

その痛ましいすすり泣きと叫び声は、いつまでもファルークの胸の内にしこりのように残り続けた。神官などといっても、心正しい者ばかりというわけではないと、彼はそのようにアシュランスから聞いていたが、中にはルークのようなく本物の神官もおり、そのような神聖な者から宝とされるものを奪ったということが、ファルークの中では許されぬ罪のように思え、魂に消えない烙印を押されたようにさえ感じられていたのである。

ファルークと槍の打ち合いで負かされて以来、ルークはより一層槍の鍛錬に励むようになっていたが、ラミアスをはじめとする、自分より強い槍の師範がいない今……こんなことをして何になるろうという虚しい思いが、彼のことを包みはじめていた。

自分よりもより強い相手と手合わせ出来なければ、あのファルークという男には絶対に勝てない。そう思うと、腸が煮えくり返るほどの悔しい気持ちがある。ルークの身を焦がした。そのような相手を求めるために、正式な手続きを取って諸国行脚の旅に出るといふ許可が欲しいと思いましたが、何分自分はまだ十七歳であり、旅僧となるためにはあと一年待たねばならぬ身でもあった。

もつとも、聖都のルシアス神殿が崩壊した今、そのようなことに拘る必要はもしかしたらないのかもしれない、とルークは思いもした。そう遠くない日、ルシアス神殿の本殿はルクシンドラへ移ることになるのだ……あの都では、姫巫女のいないルシア神殿と、聖竜の槍が眠っていないルシアス神殿とが、ただ形式ばかりの、魂のこもらない儀式を続けていくのだらう。そのくらいならいっそのこと、神官という職から身を辞し、ただの平民として生きていってもいい

のではないかとさえ、ルークは時々思うのだった。

そうして復讐の鬼と化し、あのファルークという男を、それこそ地の崖で、までも追いかけ、討ちとってやるうと……だが、そのように憎しみが己の心の内で増す時、ルークの心の中にはいつも、師匠ラミアスの優しげな微笑が思いだされるのであった。

『わたしは、もしかしたら待つていたのかもしれない……彼のよう
に強い槍の使い手が自分の前に現れる瞬間を。もし、わたしがこの
男に敗れたとしても、こやつを恨むでないぞ、ルーク。これはわた
し自身の望んだ、わたし自身の戦いなのだ』

だが、自分の故郷を汚されただけでなく、恩師や友が何人も死んだことを思うと、ルークはやはり、憎しみというものが持つ強い力に負けそうになることがしばしばだった。

そして、思う。自分はあるファルークという男を仮に討ち果たせたとして、それだけで気が済むだろうか、と。おそらくは、その次にはアシュランスというく地の崖で国への王の首が自分は欲しくなるだろう……それから、聖竜の槍が眠る石室で、自分のことを追いつめたアレクやラウルやカイル、シグマといった男たちも、全員打ち殺してやりたい……。

ルークは、そのように自分が神官らしくない思いに満たされている時間が長いことに、愕然としていた。彼は僧侶として告解室の当番に当たると、平民たちが神殿の告解室へやって来て、色々な罪を懺悔する言葉を多く聞いていた。たとえば、今週自分は心の中で姦淫の罪を犯したであるとか、誰その財布から少しばかりお金を盗んだとか、嫁や姑を憎む気持ちはどうしても心から離れないであるとか……ルークはそれらの悩みに対し、ある部分超然として事に当たっていたと自覚している。

何故なら彼には、卑しい動機で乙女のことを盗み見たことなどなかったし、金銭的な欠乏を経験したこともなければ、誰かを憎しみの限りを尽くして憎むといった感情も、一度として経験したことはなかったからだ。

けれど今、人々が何故そんなにも浮世の<罪>といったものから逃れられぬのかを、ルークはよくよく思い知っていた。聖都が焼け落ちてのち、州境にあるいくつかの町には難民のための集会所が設けられていたが、そこに集まった人々は実に肩身の狭い思いをしなくてはならなかったからである。それは生き逃れた神官たちも例外ではなく、「何故命を賭けても姫巫女さまや巫女さまたちを守らなかつた」と声を限りに叫ばれ、天幕に石を投げられるということもしばしばであった。

そんな中、自分たちも極貧の最中にあるというのに、神官たちの食糧をまず真つ先に確保しようとする、美しい心根の婦人たちが何人もいて……聖職にある身ながら、神官たちの幾人かが彼女たちに心惹かれているのを、ルークは知っていた。そしてそのことを<罪>とするのが果たして正しいことなのかどうかすら、今の彼にはわからなくなっていたのである。

彼自身に関していえば、若い娘が自分に意味ありげな眼差しを投げてきても、今のところ心が動くということは特にない。ただし、これまでの有り余る食糧や物品に囲まれた生活から、一転して貧しさの底を知ってみて初めて 窮乏のために一片のパンを盗む罪人の気持ちというのは、痛いほどわかる気がしていた。それに、この世に存在する誰かのことを、憎しみの限りを尽くして憎むという気持ちのことも……。

ルークの心は今、迷いの最中にあつた。自分はそうした難民となつた聖都の生き残つた人々とともに、再び聖都を復興することを夢見ているが、大神官のエルヤサフさまより直接お声がかかり、ルクシンドラで司祭の職につくよう言われてしまったからである。

もしそれを断つたらどうなるのか、ルークにはわからなかつた。しかも、大神官であるエルヤサフより直々に、「ルクシンドラにある神殿の土台と屋台骨は腐っているが、そこをおまえのように真の信仰を持つ僧侶に変えてほしいのだよ」とまで言われてしまった……ルークはいわゆる出世といったことにはまるで興味がなかつた

が、ただ、人々の信仰をただすためだというのなら 辺境の国々へ奉公に出されたとしても、黙って従うくらいの気持ちがあつたらである。

ルークはユニファの花の甘い香りと、夢のような白い花びらに囲まれながら、この時、ただひとりの少女のことだけを想っていた。七歳になるまでよく一緒に遊び、彼女にヒナギクの冠を被せて、忠誠を誓った日のことをルークは今もよく覚えている。

(まさか、それがいつか本当に実現するとはな)

ルークはエルヤサフの口から、姫巫女がご存命中であると聞き、魂を貫かれるほどの喜びに打ち震えた。神官たちの間でも噂にはなっていたが、それが絶対に本当であるという確信が、ルークにははつきりと持てないままだったのである。

「これはここだけの話として聞くのだぞ、ルーク」

エルヤサフは、王城の自分の居室で、小さな囁くような声で言った。

「どうやら第四の巫女であつたミュシアが、姫巫女リリアより聖杯を受け継いだらしいのじゃ。もしも伝説が本当であるならば、姫巫女は再びこの地に立たれよう。じゃが、我らはその間ただ手をこまねいて待つているのではなく、再び姫巫女がこの地に降り立った時のため、その聖なる下地とも言つべきものを形作っておかねばならぬ。わしの言つてゐることの意味、当然わかつておるうの、ルークよ？」

ミュシアが生きているだけでなく、その上姫巫女として聖杯まで継承したと聞き……魂が喜びに溢れ返るあまり、エルヤサフがその後自分に何を言ったのかを、ルークはあまり覚えていないほどであった。

(ミュシアが生きている！！しかも、我々が守るべき聖杯とともに……！！)

今ではそのことが、ルークの生きる糧であり希望であり、喜びのすべてであつた。彼は敬虔な神官であつたから、聖書に書かれてい

ることとそこに記された伝説について、一言一句違わずすべて信じていた。そして何より、ルークにとってもっとも重要だったのが、ミュシアのことを想えば、憎しみを退けることの出来る自分がいることに、気づいたという点であったかもしれない。

(憎しみに身を焦がす者が、姫巫女の御身を守るのは相応しくない) もちろん、そう思いはしても、ファルークという名の、銀髪に紫の瞳をした男に対する憎しみは消えなかったし、もし偶然にでももう一度出会えば、彼に槍の穂先を向けることにためらいを感じる理由はまるでない……だが、それと同時に憎しみの暗い沼のような場所でもがいていた自分に、ミュシアは何より一筋の光を与えてくれたのだ。

ルークはこの時、ユニファの甘い芳香に包まれながら、白い花咲く枝々の間に、宵の明星が瞬いているのを見た。そして、そこに何かの神からの啓示を見るような思いがしたものである。

(あれこそは、僕にとって唯一の希望の星。ミュシア、君が姫巫女としてこの地に戻ってくるその日まで、僕はその間一体何があるうとも、どんな恥辱をこの身に受けようとも、神官として生きること、を今ここに誓おう)

そして、本当にくその日くがやって来るまで、ルークは幾多もの苦しみや悩みを受け、魂を極限まですり減らすような辛酸をなめることになるのであったが、そんな彼の苦勞もまた、最後には報われることになるのである。

第2章 カーディル王立図書館

『おお、姫巫女よ！我は御身に神官としてこの身のすべてを捧げ奉る！！』

そう言つて幼き日のルークが自分にヒナギク（デイジー）の白い花冠を授けてくれた時、不意にすぐ横で風が唸りを上げた。

この時本当は風などなく、空もとても良く晴れていたはずなのに何故か突然、嵐がきそうな空模様となり、どこかで雷の鳴る音まで聴こえてきた。

『あつ、雨だ！！ミュシア、学院の裏庭にある木のうろにでも隠れてようよー！』

『うん、そうね』

ミュシアはせっかくの白い花冠が雨に打たれて痛むのが嫌だったので、それを両手に大切に隠し持つようにして野原を駆けていった。

『ほら、ミュシア、早くはやく！！』

『ルーク、待つてつたら。わたしそんなに早く走れないもの！！』
不思議なことに、ルークは遠くにいけばいくほど、その背丈は大きくなり、やがて小さな子供ではなく少年の姿になっていった。そしてミュシアもまた、白いヒナギクの花をいつの間にもやら取り落とし、ひとりの少女になっていたのである。

ふたりは、聖契学院の裏庭にある大きな樹の下までいくと、互いの首に手をかけあつて、そつと不器用な抱擁をかわした。けれども雨はやむことなく降り続き、やがて何かの不気味な気配があたりを包みこみはじめていた。

そしてミュシアが、不意に枝々の間に目をやると　そこには、ひとつの大きな眼のようなものが、じつとこちらに視線を注いでいたのである……。

ミュシアはベッドからがばりと身を起すと、「はあっ、はあっ」と荒い息をついた。

「今のは、夢……？」

軟らかい羽毛の詰まった枕や布団に手を伸ばしたあと、ミュシアはぶるつと体に震えを感じ、自分の両肩を抱くように腕を交差させた。

何故かはわからないけれど、最近、よくルークの夢を見る。それは彼の名前を騙っていることに対する罪悪感からかもしれないと、最初ミュシアは思っていた。けれど、夢を見たあとの感触があまりに生々しいことが多いので、最近ではもしかしたら彼が助けを求めているのではないかと、そんなふうに感じるのが時々あった。

（あのあと、ルークはどうしたかしら。神官たちの多くは、州境の町で難民たちと貧しさをともにしていると、噂に伝え聞くけれど……彼も生きていたらきっと、そうした生活を選ぶはずだもの。もし彼に会いたいと思ったら、そうした難民たちの天幕を訪れるといいのかもしれない）

そしてミュシアは、絹の敷布の上に手をすべらせて、胸に罪悪感の釘を打ちこまれるような感覚を覚えていた。

（昔は、清潔なシーツやあたたかな布団の中で眠れることが、当たり前だと思っていたけれど、今は違う……わたしは本当はもっと……）

ミュシアが寝起きに色々なことを考えはじめていた時、不意にコンコンと寝室のドアがノックされた。

「ミュウシアちゃん！朝ごはんの用意が出来ましたけど、そろそろ起きて来られませんか？」

「は、はいっ。今いきますっ！！」

シンクノアのどこかおどけたような声にそう答え、ミュシアはひとつくしゃみをしてから、服を着替えはじめた。流石に第十三月ともなると、寒さが身に沁みてくる。ミュシアは鳥肌を立てながら急

いで寝間着からチュニツクに着替え、暖かい隣の部屋へ足を踏み入れた。

例の薄い桃色のドレスは、実をいうとミュシアはあれからあまり着ていない……シンクノアとセルルの心遣いを無駄にするようで、心苦しくもあつたが、今自分は性別を偽って神官となっている身なのだ。そう思うと、男物のチュニツクでも着て町の平民を装うくらいがちょうどいいのではないかと、ミュシアにはそう思えてならなかった。

「おはよう、ございます」

ペこりとお辞儀をして隣のセルルに挨拶し、ミュシアは絹張りのソファにそつと腰かけた。いつものとおりセルルからはなんの返事もなく、かわりにシンクノアが「おっはー！！」と、白い歯を光らせて手を振ってくれる。

「セルル先生つたら、朝はいつも不機嫌つスよねえ。たぶん起きてから何か腹に入れてからでないと、重い口が動かないっていうタイプなんじゃないスか？ほら、そんなあなたには、こんなこんがり焼きたてベーコンー！！」

そう言つてシンクノアは、暖炉の上の金網で焼いた、ベーコンののつたパンを陶磁器の上へ置いた。次に彼はフライパンの上でうまい具合に目玉焼きを作り、それをミュシアの白い皿の上へのせてくれる。

「いつもありがとうございます、シンクノア」

ミュシアが礼儀正しくペこりとお辞儀をすると、シンクは少し得意そうに笑い、ジャムの瓶をごろごろとテーブルの端から端へ移動させた。

「さて、いちごジャムにブルーベリージャムにマーマレード。どれでも好きなのをパンにつけて食べてくださいな、お嬢さん」

「はい。どうもありがとうございます」

シンクノアは旅慣れているせいかどうか、女の自分よりも料理をするのが上手いとミュシアは常々感じていた。パンや肉などを軽く

炙ってパリツとしたものを毎朝食べさせてくれるし、ポテトパイやミートパイを作ったりするのも上手かった。

「まあ、金さえあつてなんでも食材が手に入りさえすりゃあ、うまいものなんかいくらでも作れるぜ、オ・レ」というのは、ミュシアが彼の料理を褒めるたびに言う、決めゼリフのようなものである。

そんな感じでミュシアは、この日の朝も、神さまに食前の祈りを捧げてから、パンとベーコンつきの目玉焼き、それに紅茶という朝食を終えた。そして彼女が「ごちそうさまでした」と言って、食器類の後片付けをしようとした時、不意にセンルが、ミュシアの腕をぐいと引き寄せて、その唇の端にあるものを拭った。

「あ、あの……センルさ……」

「ジャムがついてる。もちろん、これから顔を洗うつもりではあつたんだろぅがな。陶器の洗面器には、やかんのお湯を入れるといい。おまえはいつも、水瓶の中の水しか使わないようだから」

「はい……」

ミュシアは部屋の片隅にいくと、陶器の洗面器に水瓶の水を入れ、そこに暖炉にかけてあつたやかんのお湯を足してぬるめにした。それから顔を洗って、乾いた布で拭くと、使ったぬるま湯をバケツの中へ捨てた。こうした一度使った水は、ある程度溜まったところで、下の水捨て場まで捨てにいくのである（センルはそんなことはメイドを呼んでやらせると言ったが、ミュシアはこうした生活にまつわる全般に関して、なるべく自分の手でするようにしていた）。

「じゃあわたし、食器を一度下まで下げてきますね」

これもまた、センルに言わせれば「メイドにやらせるべき仕事」ということになるらしいのだが、ミュシアは下にあるホテルの調理場まで、一度使った食器を毎回下げることにしている。もっとも彼女はそうすることで、<ロダールの間>に泊まっている客はチップをケチっていると、使用人たちが噂しているのを知らなかつたけれど。

「あゝあ。あんたさあ、あの子に対してどーいうつもりで接してる

わけ？」

シンクノアは、暖炉の脇にある薪箱から、薪をひとつ取りだして火にくべると、若干呆れたような顔つきで、目の前にいる蒼の魔導士のことを見返した。

「どついつつもりというのは、どついつ意味だ？」

「すつとぼけてんじゃねーよ！」と、シンクノアは小指を立てて紅茶を飲みながら言った。「まあ、あの子の口にジャムがついてて、それをぬぐったところまでは許す。けどさあ、なんでそれをあんたが何気にぺろつとなめる必要があるのかって俺は聞いてんの！変態じゃあるまいし、ミュシアのことを自分の所有物みたいに扱うのもやめろよ。見てるこっちのほうが恥かしいから！」

「私のどこが変態で、また何ゆえにおまえが恥かしがる必要がある？」

センルが居直っているというわけでもなく、あくまでケロリとそう言つてのけるのを聞き、シンクはソファの背もたれに手をまわすと、天を仰いだ。

（やだねえ、まったく。こいつもまさか、無自覚の無意識ってやつかよ）

「俺が言いたいののはさ、あんたの態度はあの子に誤解を与えるってこと。センルがもし、あの子のことを巫女じゃなくさせて自分のものにする気持ちがあるっていうんなら、俺も何も言う気はない。けどさ、あんたはそうじゃないだろ？まあ、俺にもセンルの気持ちはわかんなくもないよ。娘とか孫とか妹とか、なんの利害も関係なく、ただ可愛い可愛いって愛せる対象がいるとしたら、俺も似たよーなことするかもしれない。けど、ここで一言はつきり言っておくぞ。あの子は自分で気づいてないながらも、センルのことが好きなわけ。そういう相手がいちいち色んな細かいことまで気づいて優しくしてくれたら、果てはどついつことになるか、あんたもちったあわかるだろ？それじゃなくてももう、三百年も生きてるおじいちゃんなんだし！」

「私がジジイなのは余計な世話といったところだが……シンクノア、おまえの言いたいことは大体わかった。以後、留意することにする。それでいいか？」

「あ、ああ……」

あまりにもあっさり自分の言い分が通ったことで、シンクノアは少し拍子抜けした。てつきりセンルがいつものとおり、理屈っぽい持論のようものを展開しはじめるだろうと思っていたのだ。

だが、センルがまるで「今はそれどころではない」というように、沈黙考しはじめるのを見て、シンクノアはむしろ自分が余計なことを言ったように感じはじめていた。別の意味では、自分などより彼のほうがよほど、ミュシアのことを考えて行動していることが、シンクにはよくわかっていたから。

「よし、ミュシアが戻ってきたら、今日は三人で王立図書館へいこうぞ。私がエリメレク殿と会っている間、おまえはミュシアと図書館の一階にいる。彼との話が終わったら、他の階にもおまえたちを入れてもいいかどうか、エリメレク殿に聞いておくことにするから」「マジっすか！？ やっりー」と、シンクノアはあまり深い意味もなく喜んだ。

もちろん彼もまた、幼馴染みのアイリがさらわれた飛空艇の足跡について、王立図書館で何か掴めればという期待と目的があったのだが、そちらのほうは実はすでに解決済みであった。センルからカールディナル王国のプリンクである、エリメレクとどんなことを話したのかを聞いて、シンクノアにはすでに、調べることなどほとんどなくなっていたとさえ言えるかもしれない。

そのようなわけで、ミュシアが部屋へ戻ってくると、三人は貸し馬車屋で馬を借り、王立図書館へ急ぐことにした。時刻は第十の刻ルゼと第十一の刻ハザルの間くらいの場合であった。

センルは、糸杉に挟まれた小径をディアトレドという名の白い馬

に乗っていき、その後ろをシンクノアとミュシアの騎乗した鹿毛が追うような形で道を進んでいった。

「ミュシアのことは、おまえが乗せる。私は少し、考えることがあるのでな」

貸し馬車屋で証文にサインしながら、セシルが何気なく言った言葉に対し、ミュシアが若干傷ついたような顔をしたことに、シンクは気づかないわけにはいかなかった。

もっとも彼女が、自分と一緒に騎乗するのが嫌だとか、セシルと同じ白馬に乗りたいと内心思っているのだとは、シンクノアも感じない。ただ、この時のセシルにはどこか　ミュシアに対して突き放すような距離感があったのである。

ある時は、口の端にジヤムがついていると言って指でぬぐってくれ、かつそれをペロりとなめるにも関わらず、ある瞬間には冷たく自分本位に突き放してくる男……（あゝあ。もしかして俺、逆効果なことをセシルに言っちゃったのかもしれないなあ）と、シンクノアは溜息とともに後悔した。

セシルにしても、考えごとがあるというのはおそらく本当のことなのだろう。というのも、半月ほど前にカルディナル王国のプリンクであるエリメレクと会見して以来　この蒼の魔導士の様子は、自分でも言っていたとおりかなりおかしかったからである。口の中で時々、呪文のような言葉をブツブツ呟いていたかと思えば、突然「よし、わかったぞ！」と胸の前で手を打ち合わせたり……また、シンクノアとミュシアが互いに何かを話している会話をまったく聞いておらず、上の空でぼんやりしているということも多かった。

ミュシアにしてみれば、何故セシルがそんな様子なのかということも、よくわかっていたに違いない。シンクノアにしても、あれから彼がエリメレクとどんなことを引き続き話しあい続けたのか、そのすべてについては聞いていないにせよ　絶対的な信頼感をもって、セシルがミュシアに不利になるような取引だけはしないということ、また彼が彼女のことを思えばこそ、こうして色々考えたり行動した

りしているのだということが、よくわかっていたのである。

（もし、自分の好きな相手が、恋愛感情からじゃなかったとしても、そこまで色んなことに気を配ってくれたとしたら……俺だったら、どんな気持ちになるもんかな？）

シンクノアは、ミュシアの腕の横から手綱を持ったままの姿勢で、彼女の頭の上にちょこんと顎をのせた。シンクはセルルほどではないにしても背が高く、小柄なミュシアとは頭一個分以上身長差があったからである。

「どうしたんですか、シンクノア。さつきも溜息を着いたりしていたし……」

セルルが湖のほとりに沿った道でなく、途中で枝分かれして森のほうへ続いている小径のほうへ入っていくのを見て、その分かれ道のところに標識があり、『言霊の森』・『王立魔術院』と書かれた札が立っていた。シンクノアはミュシアのハーブの香りのする頭から顎を外すと、小首を傾げた。

（王立図書館ってのは、王立魔術院に付属してるって言わなかったっけ？）

「ま、一見ノートンキそうに見える俺にも、時には色々考えることがあるってことさ。たとえば、俺がいつも背中に背負ってる剣のこととか」

「そういえば、シンクの持ってるのが、もしかしたら本当に聖竜の剣かもしれないって、セルルさんが……」

「そ。んで、セルルの自説によれば、物事ってのは実はとーってもシンプルで、一番大切なのは聖書に書かれていることをそのまま信じることもかもしれないってことなんだよな。つまり、前回の　と　いつても、今から千年以上も前になるわけだけど　＜聖竜の秘宝＞探索行では、聖杯を守る巫女と聖竜の剣の持ち主とが最初に出会っているわけだ。それで、それより前の二千年くらい前にも＜聖竜の秘宝＞は使われていて、この時には空から禍いの星っていうのが落ちてきて、後代に書物として残るような形では歴史がきちんと

書き記されなかった。前に行った場所に「滅びの谷レドム」っていうところがあったら？俺も隕石の遺跡なんかをあそこで見たりしたけど、あちこちの町や村が隕石でやられて、一旦人間の歴史っていうのはあそこで閉ざされたってわけだ」

「でも、それでもやっぱり人間は生き残って……人々にとって最後の希望である<聖竜の秘宝>を使うことにより、僅かながら生き残った人たちが再び土地に鍬や鋤を入れ、種を播き植物を育てていくことで、不毛の大地を復活させたのだと聞いています。それで、今現存している正訳聖書には、最初の創世神話から聖竜ルシアスと暗黒竜の戦い、それから光の神ルシアスの竜としての力が七つの秘宝に分化してのち、それが千年の時を経て、使われた時の過程が描かれていくんです。これは一種の<型>のようなもので、次にもし<聖竜の秘宝>が使われる時の参考になるようにとの、先人の教えでもあると言われています」

ミュシアは、聖書であるとか神のことを語る時、一種独特の神聖な顔つきをすることがあり、そういう時シンクノアは、彼女がやはり（姫巫女さまなんだなあ）とぼんやり感じたりする。だが、それ以外の時にはただの十六歳の女の子であり、ハーフェルフの魔導士の一挙手一投足に一喜一憂するのを見るたびに……なんとなく、胸が切なくなるものを感じてしまうのだ。

「んで、その時にもさ、聖竜の剣の持ち主ってというのが、探索行の過程で聖杯の持ち主である姫巫女さまに最初に出会ってるっていうわけだ。けど、今から千年前にあったといわれる探索行と、三千年以上昔にあった探索行を比べてみると、その後の過程っていうのは、全然違っちゃってるってことがわかる。姫巫女さまが聖竜の剣の持ち主に出会ったあと、千年前の伝説じゃあ盾の持ち主に会うってことになってるけど、三千年前バージョンでは、鎧の持ち主ってことになってるからな。しかも代々の秘宝の継承者っていうのが、王子のこともあれば、魔法使いであることもあり、ただの鍛冶屋の息子だったり……まあ、確かに「参考」にはなるにしても、まっ

たく同じ運命が繰り返されるっていうわけじゃない以上、なんとも言えんものがあるわなあ」

「でもわたし シンクノアの持つてる剣がもし、聖竜の剣だったとしたら、すごく嬉しいんです。そしたら、これからもずっと一緒に旅を続けていけると思うし…… センルさんも、聖杯の持ち主である巫女が剣の保持者と最初に出会うのは、彼がその剣によって姫巫女の身を守るためじゃないかって言ってるらしいし」

「んー、まあなあ……」

そう言っつて、シンクノアはぼりぼりと頭をかいた。何故といつて、どちらの探索行の過程にも、その剣の保持者がいつまでも鞘から剣を抜けなかったなどという間抜けな記述は出てこないからだ。

「俺もさ、ミュシアやセンルと、いつまでもずっとこうして旅をしていたいよ。いつまでもっていうのは、お互いの旅の目的を果たすまではつていう意味だけだよ。けど、俺は自分が聖竜の剣の継承者だなんていうふうには、あんまり思えないんだなあ。つーより、この世界のどっかにこの剣を扱うのに相応しい戦士さんがいて、そいつにこれを渡すためのただの運び屋なんじゃないかっていう気がする」

「そんなことはありません」ミュシアは妙にきっぱりとした態度で言った。「シンクは素晴らしい剣の使い手なんですから……えっと、その剣を渡してくれたっていうリキエルさんっていう方もおっしゃってたんでしょう？時が来れば必ず抜けるって。だったら、今はまだそのく時>ではないっていう、それだけのことなんだと思います」

「そうだといいいんだけどなあ」
シンクノアは今度はどこか嬉しげな溜息を着いて、再びミュシアの頭の上に顎をのせた。(この、可愛らしくしていじましいお嬢さんめ!)と、シンクノアはよくそんなふうに感じる。それでいて、自分もミュシアも互いに相手を異性として強く意識するようなことはほとんどない。前回の千年前の探索行でも、三千年以上昔の探索行でも 美しい姫巫女を巡って、聖竜の秘宝の継承者たちが揉め

る場面というのがあるのだが、もし仮に自分が聖竜の剣の正式な継承者だとしたら、その点はおそらく問題ないだろうと、シンクノアはそう思っていた。

(けどまあ、そのかわり問題になるのが……)

シンクノアは前方をゆくハーフェルフの魔導士のことを眺めやっていた。彼は昼間であるにも関わらず、樹木が深く枝々を差し交わしているがゆえに、薄暗い通り路となっている場所の前で、白馬のデアイトレドを一旦静止させていた。

「途中にある標識でも見たろうが、ここが<言霊の森>だ」

シンクとミュシアが追いつくのを待って、セシルはそう口を開いた。

「城下町カーデイルの住民であれば、この森の長い通り路の中で言葉は発さぬほうが賢明であると誰もが知っている。とはいえ、何故そうなのかというのは諸説あつてな、この場所で神や精霊を汚す言葉を吐いたものは永遠の闇に閉じこめられるとか、出口に辿り着いた時にそこは他の世界の別な場所であるとか、色々言われている。だがまあ、私が二百年ほど前にこのあたりを何十回となく通つてみた限りにおいては、この森はそう危険でないと言っていると思う。なんにしても一応、余計な言葉は発さぬようにしたほうがいいということだな」

「ふう〜ん。でも、<言霊の森>っていうからには、何かいわくがあるんだろ？」

そうすると、セシルが若干イライラするとわかっているので、シンクノアはミュシアの髪の毛の匂いをかくような仕種をしながら言った。「……そうだな。魔法使いにとっては多少関係のあることかもしれない。この森の中で魔法の呪文を唱えると、それはそのまま本人に向かって返ってくるという話だ。だが、本当かどうかはわかん。何しろ、魔術院創設以来ずっとそう言われ続けているにも関わらず、誰もそれを試したことなどないのだからな」

(ほ〜ら。今、眉のほろがピクッと動きませ、セシルの旦那)

と、シンクノアは少しだけ意地悪く思った。(本当はミュシアのことを、自分のものだけにしておきたいと思ってるくせに……あらためて聞くと「それはおまえの勘違いだ」とかなんとか言うんだからな。ミュシアはミュシアで、「自分のセルルさんに対する気持ちは恋っていうのとは違うんですっ!」とか大慌てで力説するし。それを焦れたい気持ちで見てなきゃなんない、俺の身にも少しはなれっつてんだ)

「でも、神さまや精霊を汚す以外の、ごく普通の日常会話なら、しやべっても何も問題ないんですよ?」

「そうだな。まあ、普通に歩いていけば何も問題はない。薄暗くて長い道だから、一体いつ終わるのかと思うかもしれないが……この<言霊の森>を抜けると、<緑樹園>という場所が左手に見えてくる。ここでは硝子張りの温室で、魔導院の生徒たちが果物や野菜を栽培していてな、色々な作物を魔法の力で年中収穫することが出来るというわけだ」

「ああ、それでか!」と、シンクノアは妙に合点がいったように手を鳴らした。「城下町のホテルとか料亭とかさ、今時期じゃあ普通取れない野菜や果物がよく出てくるな」って思ってたんだ。なーるほど、そういうことが」

腕組みをして、妙にうんうん頷いているシンクノアのことは無視し、セルルはディアトレドを道の先へ進めた。<言霊の森>のトンネルのような通り路は、今まで通ってきた小径よりも広く、馬が二頭並んで歩けるくらいの幅があった。

「そして、<緑樹園>の先に、魔術院に通う生徒たちの寮があるんだ。王立図書館があるのは、その手前ということになるな。寮と同じ灰色の石造りで出来ていて、魔術院と同じく見た目と中の広さがまったく違う」

「見た目と中の広さが違うって、ようするに魔法使いの使う幻術が何かによって違ってることか?」

ほとんど陽が差さないくらい、天井を枝々がアーチのように差し

かわしているのを見上げながら、どこか間抜け面をしてシンクが聞いた。

「そうとも言えるだろうし、そうでないとも言えるな。なんにしても、行けばわかるさ」

「……………」

ミュシアは、セシルやシンクの声が森のどこか高い場所に吸いとられるように消えるの聴いて、何故だか少し怖くなった。不意に、今朝見た夢のこと　ふと見上げた樹の枝の間に、巨大な眼が見えた光景を思いだし、ぞつと体が震えた。

「どうした、寒いのか？」

ミュシアはチュニックの上から、茶色い革のコートを着ていた。

以前、セシルがそろそろ寒くなるから毛皮のコートを買ってやろうと言った時、彼女はその値段の高さに驚き、それよりも安い革のコートを選んでいたのであった。

「いえ、寒いわけじゃなくて……ちよつと、今朝見た夢のことを思いだしてしまつて。気にしないでください。すみません」

「私やシンクノアにあやまる必要はないと思うが」セシルは何故かおかしそうに笑つて言った。「どんな夢だったのか、よければ話してみるといい。怖い夢は、誰か人に話してしまうとその効力が薄れるというからな」

「そうなんですけど……………」

ミュシアは突然、喉に何かが詰まつたように言葉を発するのが難しくなつた。＜言霊の森＞に宿る何かの精霊的な力が働いてそんなつたというのではなく　彼女はただ、なんとなく怖かつたのだ。あの巨大な眼のことを口に話したら、本当にそれが今日の前に現れるのではないかと感じられる、そのことが。

「あの、今この場所で話していいような夢じゃないんです。夢の中に魔物のような存在が現れて……その、だから……………」

「そうだなあ。まあ、確かに」ミュシアの後ろでシンクノアが言った。「言葉つてのは大切だ。いつ・どこで・誰に・何を話すか、そ

れで人生の大半が決まるといっても過言じゃないとかつて、俺の剣のお師匠さんも言ってたぜ」

「そういえば、その剣の師匠のリキエルという男が、おまえにく不殺の剣アスタリオン」とやらを授けてくれたのだったな。彼が一体何者で、今どこでどうしてるのかは、シンクノアにはまったくわからんのか？」

「わからんなあ。つーか、俺も旅先のどこかでリキエルに会えたらとはずっと思ってるんだ。どうもさ、俺がこும்不幸続きなのって何も赤い瞳のせいばかりじゃないって気がして仕方なくなってきた。どうもこの、抜けもしない剣のほうが悪いを呼んでるんじゃないかっていう気のすることが俺には時々あって……一度なんか、肥溜めにも捨て置いてやるうかとさえ思ったこともあったけど、やっぱりそれも出来なくてなあ」

「シンク、それですよ！」と、ミュシアが突然後ろのシンクのことを振り返った。「あの、わたしも自分の体の中にあるっていう聖杯を直接目で見たっていうわけじゃないんですけど……感覚としては同じなんです。何かこう、邪な思いというか、良くない思いに自分が傾きそうになると、それを見透かされているような、何か聖杯自体に試されているような気がするんですが、時々あるんです」

ここでセンルとシンクノアがほとんど同時に、「あっはっはっ！」「と笑いだすのを見て、ミュシアは一瞬唖然とした。

「聞いたか、センル。邪な思いだって」

「ああ、ミュシアのいう良くない思いなんていうのは、せいぜいが鳥が転んで怪我をしたのを助けなかったとか、その程度のことをいうんだらうよ」

「あるいは、飛び下り自殺したい鳥が、どうしても死ねないと悩んでいるのを助けなかったとかな」

「それとも、蟻が捻挫してるのに、包帯も当てなかったとか」

「そうそう。蜘蛛が腸捻転を起こしてるのに、自分は気づきもしなかったとか」

セルとシンクノアが他にも色々な事例を一通り引くと、ふたりはほとんど同時に、またも大笑いしていた。

「ひどいです、セルさんもシンクノアもっ!!」

ミュシアは珍しく、顔を真っ赤にして、怒ったように言った。

「わたしは真剣に悩んでるのに……あの、さっきの夢の話なんですけど、最近、よく夢の中でわたしがその名前を騙っている、ルークが出てくるものですから、最初は彼の名前を騙っている罪悪感が、そういう夢を見せるのかなって思ってたんです。でも、最近ではなんだか彼に、夢の中で呼ばれてるような気がして仕方なくて……もし彼がどこかで困っているのだとしたら、何を置いても助けなくちゃって、そう思ってますけど……」

長いトンネルのような、緑と灰色の世界が終わり、三人は再び、初冬の明るい陽射しの元へ出た。正確には、ヤースヤナ・ホテルを出た時には空は薄曇りで、雪でも降りそうに感じられていたのだが、今は雲間から明るい太陽が燦然と輝く顔を出している。

ミュシアは振り返って、不思議な森の暗がりの間違いなく後にしたことを確かめると、セルルに促されたとおり、夢の内容を語りだすことにした。

「えっと、その……ルークっていうのは、七歳になるまで一緒に育った仲のいい子なんです。七歳を過ぎると、女子と男子は寮が別々になってしまうので、そのあとはほんの時々どこかで姿を見かけるくらいで、言葉を交わしたこともありません。でも、彼が聖契学院をトップの成績で卒業したことは聞いていましたし、そのあと

わたしが巫女見習いになってから、ルークが<棒術演舞>で槍の腕前を披露する姿などは見ていました。だから、もし彼が生き延びているなら、今ごろ州境にある難民の天幕にでもいるんじゃないかなって思ってます。それに、彼に会えばもしかしたら……あの時聖都で何があったのかを、より詳しく知ることも出来るんじゃないかって思ってます……」

ミュシアは、自分が本当に話したいのはそういうことではないと、

内心で感じていた。そうではなくて、樹の枝の間から見えていたひとつの眼の化物について、彼女はセシルに聞いてほしくて仕方なかった。けれど、その前にルークと抱擁を交わしていたということが彼女の喉を詰まらせていた。

「確かに、おまえの言うことは一度よく考えてみる必要があるな。ルシアス王国の音に聞こえし聖都がルクシンドラへ移るのだとしたら……これから神殿制度はどう変わっていくのか。ユージェニー女王とレグナ大公の目的は十二大公のそれぞれから神殿税を怠りなく徴収することだろうから、それぞれの州より大公殿は今度はルクシンドラに向けて都上りをするということになるだろう。だが、彼らは姫巫女の御託宣あればこそ、今までずっと王家に忠誠を尽くしてきたのだから、姫巫女なき今、形式的にでも税を納めようとするものかどうか……」

まるで独り言を呟くようにセシルがそうした政治的な話をするのを、これまでミュシアとシンクノアは何度となく聞いていた。

ユージェニー女王と以前姫巫女であられたルルドさまは仲が悪いくらいというように、ミュシアは一度耳にしたことがある。それというのも、ルルドさまが誰も知らない女王陛下の隠された秘密を暴いたのが原因なのだという。もちろん、噂にすぎないことなので、事の真偽についてはミュシアもはっきりとはわからないのだが。

「そういえばミュシア」

セシルは自分がまた深い物思いの世界に入りかけているのに気づき、ハツとしたように彼女のほうを振り返った。

「おまえ、夢の中に魔物が出てきたとか言っていたらう。まさかとは思うが、おまえが名を騙っているルークが、突然魔物に変わって襲いかかってきたというわけではあるまい？」

（セシル先生……）シンクノアはここで、笑いたくなるのを必死に堪えねばならなかった。（それじゃあまるで、娘に恋人の存在を聞かされた父親とまったく同じ態度ですぜ）

「えっと、その魔物っていうのは、大きなひとつの眼の気味の悪いの

なんです。これまでも何度か似たような夢を見たことがある気がするんですけど、何故かそのたびに夢の内容を忘れてしまつてて……」

ここまで聞くと、セシルもシンクノアも流石に、表情から笑いを消し、互いに顔を見合わせるということになった。

「もしかしてそれって、セシルが言つてたヴァーリなんかかってやつか？」

「確かにミュシア、そいつのことは<言霊の森>では言わなくて正解だつたな」

道の左手には、まるで鏡を嵌めたような硝子の温室がずらりと並び、遠くの王立図書館の近くまで続いていた。右手には、魔術院の敷地とそこを囲む高い塀が聳え、そちらから鐘楼の音が響いてきた

第十一の刻ハザルを知らせる鐘の音である。

「ヴァリアントのことは、一応以前エリメレク殿に話しておいた。それらしきものに襲われたと思うが、次に奴と出会つた時にどうすればよいかとお聞きしたら、『何もせぬがよい』と言われたよ。奴と戦つて勝てる者はこの世に存在しないとされているそうだ。つまり、対峙して私が奴に何か魔法を唱えたとするな。そうすると、それと同等の力が常に跳ね返ってくるということになるらしい……ヴァリアントというのは、そういう存在なのだそうだ。もっとも、エリメレク殿も、彼の信頼する<円卓の魔導士>と呼ばれる方々も
これまで、ヴァリアントという存在と直接会つたことはないという。問題はまあ、何故そのようなものがミュシアのことをつけ狙っているのかということだが……」

「あの、わたし、セシルさんの言われていることがよく……」
シンクノアはあの時、狸寝入りをしていたのであつたが、相手から凄まじいまでの妖力を感じとつていた。だが、今のセシルの理屈でいうとしたら、その妖力というのは、セシルが同等の魔力を持っているということではないのかと理解した。それであればこそ、彼はおちおち眠れもせず、一晩中起きているというはめになったの

だろう。

「そっか、あの時ミュシアちゃんはぐっすり眠ってたもんな。けど、考えようによっちゃあ、その時もひとつ眼の大目玉さんは、もしかしたらこっさりミュシアの夢の中に現れていたのかもしれないぜ？こいつは俺の勝手な想像なんだが、奴は聖杯とは逆の、何か邪悪な力を持つ存在なんじゃないかな。千年前の探索行も、三千年以上昔の秘宝探索行も　　そうやって何かの闇の力、邪悪な力に妨害されたと聖書に書いてあるからな。たとえば、あいつらはそれぞれの秘宝の継承者たちが心を墮落するような隙を常に狙ってるっていうし、千年前の探索行じゃあ鎧の継承者が仲間を裏切って向こうに寝返っている。俺はこうした話を、ただの大昔にあつた物語的なもんだと思つて聞いてたんだが、案外本当にそのとおりなのかもしれないな……そのヴァーリなんとかつてのは、おそらくミュシアの心になんの汚れも落ち度も見出せないもんで、今はまだ手出しが出来ないのかもしれない。けど、じつと見張つて自分の出番がどこかにありはしないかと、隙を窺ってるんじゃないのか？」

「シンクノア、そんな怖いこというの、やめてくださいっ!!」
ミュシアが再びぞつと怖気立ったように、自分の体を抱くのを見て　　「悪い、悪い」とシンクノアは素直にあやまった。もしシンクノア自身がそのヴァリアントという存在と向きあつた場合、相手を斬つた剣のダメージはすべて自分に跳ね返ってくるのだろうか、シンクは一瞬想像してみた。そしてそれと同時に、一縷の望みを背中のアスタリオンという剣に感じてもいたのである。

（もしこれが本当に聖竜の剣で、俺にこの剣を鞘から抜くことさえ出来たら……ミュシアのことを守つてやれるのにな）

シンクノアはふと、隣の馬上の魔導士が近づいてくるのに気がついた。彼が時々見せる真剣な眼差しを見て、シンクはセルフが自分とまったく同じことを考えているのだと感じとつた。

「おまえのことは、必ず私が守つてやる。仮に世界中のすべてを敵にまわしたとしてもな。ヴァリアントというのは、神ではないにし

ても、神に似たような存在で、自分では直接手をださずにただく見ているだけの邪悪な生命体なのだと聞く。奴はおそらく、今回千年ぶりになる聖竜の秘宝探索行がはじまったのを知って、その行く末がどうなるのかを見てみたいというだけなのかもしれない。まあ、もしかたおかしな夢を見たら私に知らせる。それがもしかしたら何かの前触れを知らせる予知夢である可能性もあるからな」

「はい、センルさん……」

ミュシアがそう一言呟くように言ってから、顔を俯ける様子を見て、シンクノアは（やれやれ）と再び溜息を着きたくなった。

（『世界中のすべてを敵にまわしても、おまえのことは私が守ってやる』か。もしこれで俺にミュシアに対して仄かな恋心なんつーのがあつたら、この時点で確かに喧嘩になってるわなあ。残りの盾とか鎧なんかの継承者がどんな奴なのかはわからないにしても……：そいつがどっかの国の騎士さまで、姫巫女に我が身のすべてを捧げ奉る！！なんて言いだしたら、センル先生、顔が青紫どころか青黒くなるんじゃないの）

シンクノアは自分でも少し不謹慎だとは思ったが、ヴァリアントという存在が秘宝探索行の行程のすべてを見張っていたい気持ちがある。なんとなくわかるような気もしていた。何しろ、千年ぶりに人間世界の歴史が大きく変わろうとしているのだ。これほど面白い見物は、おそろしく長命であろう魔物にとつて、見逃すことの出来ない一種のショーのようなものではないだろうか？

（俺にしたところで、センルが最後ミュシアのことをどーすんのかとか、気になるもんなあ。三千年前の探索行の終わりじゃあ、竜使の冑の継承者が、姫巫女と愛しあっていたいながらも別れたってことになってるし……：彼は引き続きく地の崖で国を治め、姫巫女殿はルシア神殿へ戻って国を再興したというわけだ）

少し手前をゆくセンルの乗る白馬のあとを追いながら、シンクノアはミュシアが今何を思っているだろうと想像してみた。自分の好きな異性に『すべてを敵にまわしても、おまえのことを守ってやる』

だなんて言われたら、年頃の乙女としてこれ以上嬉しいことはないような気がする……けれど、シンクノアの位置からでは、ミュシアの顔の表情ははつきりと窺うことが出来なかった。ゆえに、彼にはミュシアの本心がわからぬまま終わってしまった。

王立図書館の前に二頭の馬が到着した時、ミュシアはもう顔を俯けてはおらず、ルークとして神官を演じている時と同じ、どこか凜とした真っ直ぐな表情が、そこには浮かんでいただけだったからである。

カーディル王立図書館は、セシルが先に言っていたとおり、見た目と中の広さがまるで違っていた。図書館も、その先にある魔導生たちの寄宿舎だという塔のついた城も、どっしりとした石造りで出来ているのだが、中に入るとがらりと印象が変わった。

図書館の内部は全十階層からなる吹き抜けで、オレンジとも茶色ともつかない、美しい木材によってそれぞれの階段や書架などが構成されている。にも関わらず、外から見ると限りにおいて、この図書館は二階建てのまったく不思議なところのない建物であるようにしか見えなかった。

セシルは、一階にある広いエントランスの脇、アカシヤ材で出来たカウンターのところにいる、魔導司書のひとりに声をかけた。彼女は第9級の位クラシルを持つ魔術院の卒業生である。

「蒼の魔導士のセシルさまですね。プリンクのエリメレクさまより、お話のほうは窺っております。お連れの方に館内を案内して差し上げればよろしかったでしょうか？」

「ああ、頼む」と、セシルは魔導司書のアリッサがどこか媚びた視線を送ってきて、まったく気づかなげに彼女に返事をした。「私はいはこれから公邸のほうで、エリメレク殿と少し話すことがあるので……その後、彼の許可を受けてから、二階から上へは私が直接案内したいと思う」

「そうですね。わたしはクワイル（黄緑）の魔導司書ですので、閲覧できる図書は当然、三階にある書物までですから。四階にはリディル（第8級・橙）の魔導司書が、五階にはナディーン（第7級・紫）の魔導司書がそれぞれいますけど、彼らというのは、なんといいますか、こつ……」

「いや、わかっている」

セシルは微笑を堪えきれずに笑った。

「昔も彼らは、非常に気難しい顔をしておったよ。もちろん今では司書も変わっていようが、図書館内は吹き抜けになっているから、一階に騒々しい市民でも現れようものなら、彼らは沈黙魔法をよく使っていたものだ。それに魔導司書というのは、魔法の心得のない者を一階に入れることさえ反対していたからな。本を開けることのできる魔石がなければ、閲覧は不可能であるにも関わらずそうだったのだ。そんな魔導士連中に一般市民を案内しろなどは、とても頼めたことではない」

「御理解、痛み入ります」

若い魔導司書の女性が、セシルの微笑みに顔を赤らめるのを見て、ミュシアは何故か胸の奥がちくりと痛むものを感じた。

（何かしら、これ……）

生まれてから一度も、色恋に関することで嫉妬を覚えたことのないミュシアは、その感情がどこからくるものなのかを知らなかった。ただ、それがあまり良くない負の感情であることはわかっていたので エントランスの縁を飾るようにして並ぶ、薬草や香草などを見てまわることにした。

「その白いのは、ユーニップの花だな。根を煎じると、熱冷ましによく効くんだ。んで、向こうのがアルミラ草。こいつにはよく世話になったぜ。俺の剣のお師匠さんってのがまあ、血も涙もない鬼でさあ。俺の目がなまじいいもんで、目隠しさせた上、気配だけを探って自分にかかってこいと無茶をいうわけ。当然こってんぱんにのされちまって、このアルミラ草で作った湿布薬をアイリによく貼

つてもらったもんだつたよ」

「それで、なんですね」ミュシアは微笑みながら、毒がありそうにさえ見える、赤紫のアルミラ草を見て言った。「わたしには武術の心得なんてありませんけど、シンクの剣の腕前が相当なものだというのはわかりますから……わたし、シンクやセルルさんに出会った翌日、自分の身は自分で守れるから、用心棒なんて必要ないみたいと言ったことがあったでしょう？もちろん、あれは嘘なんです。わたしは名前を騙ってるルークって、槍術の師範代だったものですから、つい彼になりきったつもりで、そんなことを言ってしまった……あの、シンクノア。もし良かったらこれから、時間のある時にも、わたしに剣術を教えてはくれませんか？」

「ええっ!？」

驚いたシンクノアの声が、あまりに大きかったためだろう、入口に近い書架にいた数名の平民と、階段の踊り場にいた魔導士などが、一瞬こちらを振り返った。三階のほうでも、階段近くの座席で本を読んでいた魔導士が、沈黙魔法の呪文を唱え、最後に印を切っている姿が見える……セルルは、シンクノアの驚きの声を合図とするようにこちらへ戻って来、彼らに「どうした？」と声をかけた。

「いやまあ、こっちの話」

セルルには気づかれぬよう、シンクノアはミュシアに左目でウィンクしてみせた。

「それより、知的美人司書との密談は終わったんすか、セルル先生？」

「……何やら、意味ありげな言い方だな。まあ、そんなくだらんこととはどうでもいいとして、おまえとミュシアは彼女に案内してもらって、図書館の一階で『ある魔法使いの偉大な一生』といった伝記でも読んでいる。あるいは、世界中の民話を集めた本とか、神話関係の本などだな。私はエリメレク殿との会見を終えたら、再びこちらへ戻ってくる。昼ごはんのほうは、図書館の二階に寮へ通じる通路があるから、そこにある食堂まで案内してもらって、何か食べて

くるといい」

「あの、セシルさんは……？」

ミュシアがいつものように気遣わしげな眼差しで見上げるのを見て、セシルは微かに笑った。

「魔法使いというのは、昼飯くらい抜いても、どうということもないものだ。まあ、私のことは気にせず、魔法寮の名物である孔雀料理でも食べてくるといい。魔術の触媒として、孔雀の羽根をよく使うんだが、そのせいもあって孔雀肉をうまく調理する方法を昔、とある魔導調理士が考え出したというわけだ。あと、孔雀の卵料理なんていうのもあるから、珍味と思つて御馳走になつてくるといい」

この時ミュシアが、セシルにはわからない不思議な影を顔の表情に走らせても 彼にはそれがなんなのかまでは掴めなかった。シクノアもまったく気づいてなかったが、セシルは特に気にするでもなく、そのまま中央にある階段を上つていく。

「あれ、セシル先生？エリメレクどの公邸つてというのは、魔術院の校舎のほうにあるんじゃないかなかつたっけ？」

「ああ。魔導教員たちの宿舎も、向こうにある。だが、やんちゃな魔導生たちを教師たちがそのまま放つておくはずもなからう？向こうとこつちはきちんと、空間転移魔法陣によつて結ばれているのさ。だから私はそれを使つてエリメレク殿の公邸 別名魔導邸へ行こうと思つている」

「なる。そーゆーこと。そんじゃ、一発がんばつてきてくださいや、セシル先生！」

そう言つてシクノアは、階段を上つていくセシルの背中を、手を振りながら見送った。

「さて、と。ミュシアちゃんつてばなんで急に、剣なんて振る位だと思つたわけ？まさかとは思うけど、俺やセシルのお荷物になりにたくないとか、そんなことを思つてるんじゃないよな？」

「それも、あります。実際わたしは、これといつてなんの取り柄もないですし……たとえば仮に、何かの形で人質にでも取られたらと

したら、シンクやセンルさんに迷惑をかけることになるかもわかりません。だからといって、聖杯の保持者である以上、自ら命を絶つということも出来ないんです」

「そっか。でも俺が思うには　センルってたぶん今は、ミュシアを守ることが生き甲斐みたいになってるところがあるからなあ。あいつは、「何かができる」ミュシアのことを守りたいんじゃないじゃなくて、ミュシアが蟻の足一本自分で引き抜けないから、それを自分がかわりにやりたいんだと思うよ。ま、なんともおかしいなとえただけだよ」

「蟻の足くらいなら、どうしてもそうしなくてはいけない場合、わたしにも引つ張ることくらいは出来ると思います」

ミュシアはあくまで真剣な顔つきだった。

「いや、だからそーじゃなくて、なんて言ったらいいのかな……：センルは剣なんか持つてるミュシアには興醒めしちゃうって奴なわけよ。ミュシアが自分で「何も出来ない」と思ってるから、逆になんでもしてやりたいっていうのかな。あゝあ、俺はこーいうの、センルみたいにくまく説明できねえな。あいつならミュシアに、『世界のすべてを敵にまわしても自分がおまえを守ってやる』みたいに、ビシツとした決め科白を言えるんだろーけど」

「でも、もし本当に……世界のすべてが敵にまわったとしたら、大変なことだもの。わたし、そんなんだったら、センルさんに守ってほしいだなんて思わない」

（ああ、そっか。この子はかなりの真面目ちゃんだから、センルの言葉をまんまそのとーりに受けとめて、そう思い詰めちまったってことか）

シンクノアがどう言ったもんかなと思いつ、腕組みをしていると、背後からクワイルの魔導士であるアリッサが、ふたりに向かって声をかけてきた。

「一階の閲覧室を御案内致しますわ。わたしは第9級の位を持つ魔導司書のアリッサです。一階の図書は大体、神話・神学・民話・伝記がおもな図書となっていて……あの、あなた、神学を勉強されて

いるとセシルさまよりお聞きしたのですけれど？」

ミュシア自身にはおそらくわからなかったろうが、シンクノアにはアリッサが何故微妙に不思議そうな顔をしたのかがわかった。神学を学んでいるような人間がマゴクと一緒にいるのも不思議なら、そんなふたりを蒼の魔導士セシルが連れてくるのも不思議だったに違いない。それに加えてミュシアは、男物のチュニツクを着ているとはいえ、顔がどこか中性的で女とも男とも判別しがたいようなところがある……そうした印象のすべてが、理知によって物事を分析するタイプの魔導士には、不可思議に見えたのかもしれない。

「はい。ぼくは神学関係のことにとても興味があつて」先ほどまでシンクノアに見せていた、不安げな表情を捨て去り、ミュシアは神官ルークの顔になっていた。「正訳聖書は自分でも持っていて、何度も繰り返し読んでいます。ですが、正訳聖書というのは、歴史的に間違いのない事実として五王国の聖書認定官が認定したものをだけ扱っているのです……ぼくは他の国の異本聖書についても調べてみたいと思つてゐるんです。御承知のとおり、五王国それぞれによって聖書は若干記述が異なるものですから。たとえば、聖竜の秘宝の探索行で、ミッテルレガント王国の騎士が盾の継承者であつた箇所など　ミッテルレガント王国では、彼がまるで物語の主人公であるかのような記述を聖書にそのまま載せています。他の国々についても事情は同じで、そのあたりのすべてを読み比べてみることで、何か新しい発見があるんじゃないかと、そんなふうに思ったものから」

「まあ、そうでしたの」

アリッサはシンクノアの存在はほぼ無視し、ミュシアことルークにそのままべつたりつききりとなつた。

(やれやれ。またこのパターンか)

シンクノアは赤毛の魔導司書に対して、心の中で肩を竦めた。三人で旅をしていると、人々がまず真っ先に目をやるのはセシルだった。そして次に関心を抱くのがルークに対してであり、シンクノア

のことは見なかったことにするか、あるいは存在を認めても奴隷に
対するかのように接することが多いのである。

さらにそれにプラスして、アリツサの態度が何故こうも急に変わ
ったのかも、シンクノアにはよくわかっていた。ルークが自分のこ
とを「わたし」でもなければ「あたし」でもなく、「ぼく」と言っ
たからなのだろう。

彼女はルークが頼みもしないのに、神学の文献的な書物が並んだ
書架から次々本を引き抜き、「それであればこれがいいですわ」と
か、「こちらが御参考になるかと思えます」と言っ、閲覧室の机
の上に書物をどんどん積み重ねていった。

「あの、あとは大体、自分で調べられますので……」

ルークがそう、やんわり断りの言葉を伝えると、魔導司書のアリ
ツサは、頬を赤く染めていた。そして「わたししたら、ついうつか
り」などと呟き、「また何か御用がありましたら、なんなりとお申
し付けくださいね」と言い残して、ようやくのことで去っていった。
(さーっと、そんじゃあまあ、俺も何か調べものをする振りでも
しておきますかね)

シンクノアは、はじめに箱舟民族といわれるゼロラの民のこと
や船上を己が領土とする航海の民、テガシエルパについて書かれた
本がないかと探しはじめた。ただし、視界の隅に神学の本に没頭
するミュシアの姿が入る範囲内で、である。カーディル王立魔術院
の領土には、強力な守護魔法が張り巡らされているとはいえ、それ
でもいつなんどき、姫巫女の御身に危険が迫らないとも限らない…
…というようにセンルに厳しく注意されていたし、シンク自身もミ
ュシアから夢の話聞いて以来、まったくそのとおりだと思っよう
になっていたからである。

それでもシンクノアが、テガシエルパの民の祖先は念動力を持っ
ていて、その力によって船を操ったり、また石造りの神殿に石を運
んだ。といったような記述に夢中になっていると、もう一度ミュ
シアのほうを振り返った時、彼はそこに神経の苛立つような光景を

見出していた。

この時シンクノアは、センルのイラっとする気持ちや眉毛がピクっと動く気持ち、初めてわかったような気さえたものである。（なんだ、あの野郎！？他にも席はたくさんあるのに、わざわざルークの隣に座りやがって……しかもあの、いかにも女慣れしてるような馴れ馴れしい態度。あつ、ルークの座席の背もたれに手まで回しやがった！もしかしてあつち系の男で、ルークのことを男だと思つて口説こうとしてんじゃないだろうな！？）

シンクノアはセンル並みにイライラするあまり、テガシエルパの民のことが書かれた本を手にしたまま、ミュシアの向かいに荒々しく腰を下ろした。さらにはオツホン、ウオツホンと、どこか白々しいような咳までつきはじめる。

「おや。どうやら君の、赤い瞳の用心棒殿が戻ってきたようだね。それでは、わたしはこれで失敬させていただきますが　先ほどの話、よく考えておいてくれたまえ」

「あの、わたしはそういうことは……」

だが、ミュシアが言葉のすべてを言い終える前に、金髪碧眼の若い男は、どこかへ去って行ってしまった。銀糸を施した白の高価なローブを身に纏いつかせているあたり、どこかの貴族の息子かとシンクノアは思ったが、彼の中でなんととっても神経の障る特徴は、今の男のもつたいぶつたような、人を見下した目つきと話し方だったかもしれない。

「おい、ルーク。一体なんだよ、あいつ！？」

シンクノアは小声ながらも、苛立つ感情を抑えきれずに言った。「赤い瞳の用心棒って、俺が用心棒みたいなもんだってわかってるってことは、おまえが女だったこともわかってるってことじゃないのか！？」

先ほどまで金髪の男が座っていた席まで移動しながら、シンクノアは「女」という言葉を特に小さめに発音して、ミュシアの隣に腰を下ろした。

「あの人、わたしが姫巫女だって、知って……」

ミュシアは震える声でそこまで言うと、ポタリ、と異本聖書の本の上に、涙をこぼした。シンクノアが彼女から目を離したのは、たったの五分かそこいらの話である。にも関わらず、ミュシアが両手で顔を覆って泣きはじめたのを見て、シンクノアはますます、先ほどの男に敵愾心と苛立つ気持ちを募らせるということになった。

第3章 円卓の魔導士

セシルが王立図書館の二階にある通路から、魔導院生の寮にまで歩いていくと、通りすがった何人も魔導生たちが蒼の魔導士である彼のことを振り返って見た。

それもそのはずで、魔導学院の最高府である大学院を卒業したあとも、授与される魔導士の階級というのは、大抵の場合せいぜいがリディルかナディーン止まりくらいなものである。国にひとりしかいないブリンクは別としても、王立図書館の最上階にある知識の殿堂 蒼の図書室の書架を自由に出入りできる魔導士は、実際数が少ないというだけでなく、彼らの姿を図書館内で見かけることさえ稀であった。

というのも、蒼の魔導士というのは、問者として他国に放たれるか、王府で役人として働くか、あるいは闇の魔導士を狩るといった職務に就いていることが多く、王立魔術院で教職に就く者はほとんどいないといっているのである。

セシルは魔導教員たちの宿直室まで来ると、そこにある空間転移魔法陣の上で両の手をひらを合わせ、ワープのための呪文を唱えた。途端、六芒星魔法陣が青く光り輝きはじめ、セシルは次の瞬間にはまったく別の場所にいた……すなわち、カルディナル王国のブリンク、エリメレクの公邸にある魔導会議室に、である。

このエリメレクが普段公務を行っていると思われる魔導邸もまた、王立図書館と同じく外の見た目と中とがまるで違う空間の広がりを持っている。というより、まさかこれが国の最高魔導機関府ではありえない……といったような、公邸はそのような蔦の絡まった木造の外観をしている。そして、とても小さくもあるのだが、一步玄関口から足を踏み入れるなりそこは床にも壁にも白い聖石のみが使われた、無限のようにも思われる広い空間が存在しているのだ。

エリメレクはセナルの到着を予期していたのか、空間転移魔法陣のある脇部屋前で彼のことを待っていた。そして挨拶もそこそこに「まあ、色々と言われなさるだろうが、その点はぐつと堪えて我慢してくださいよ」と、苦笑しながらセナルに微笑んだのであった。

「その点は、十分承知の上です」

セナルは軽く溜息を着きながら、エリメレクに短くそう答えた。<魔導会議室>では、セナルと同じロダールの位を持つ、円卓の魔導士と呼ばれる十人の魔導士たちが顔を揃えていた。この十人の蒼の魔導士のうち、マキラという名の四十代の女性以外、全員が男性だった。七十を過ぎているエリメレクに年齢の近い魔導士ふたりが、ゼファルとカドミエル、六十代くらいに見える魔導士ふたりがエレドとセヴァルダ、五十代半ばほどに見える魔導士ふたりがガリユーンとスクナ、四十代ほどに見える魔導士ふたりがナシールとオレグ、そして一番年が若く見える最後のひとりがセリユオンという名の男であった。

みな、それぞれ思い思いの顔をして入室してきたセナルのことをちらと眺めやっていた。だが、そこはやはりくだんの魔導士というべきか、彼らの顔の表情を順に追っていても、セナルには彼らが内心思い計っているであろうことが、さっぱり読めないままだった。

「これだけの顔ぶれを十分以上も待たせるとは、ロンディーガの宮廷魔導士殿はよほど礼儀をわきまえたお方と見える」

「そうよのう。流石、その昔破門にされただけのことはあるわ」

ゼファルとカドミエルが、まるで呼吸を合わせたようにそう言い、互いに笑いあった。そして年長者の彼らの笑いが伝達したように、他の象牙の丸いテーブルを囲っている面々も声にだして笑った。

けれども唯一、マキラという名の女魔導士だけが変わらずに厳しい顔の表情を保っていた。彼女は魔導士界というのは上にいけばいくほど嫉妬の情が強まる社会であるというのを、嫌というほど思い知っていたからである。

「なんにしても、すっぱかされなくて結構であつた」と、マキラは感情を窺わせない鉄のような冷たい声音で言った。どうでもいいことかもしれないが、彼女は陰で「鋼鉄の魔女」と仲間から渾名されていた。「ロンディーガの宮廷魔導士よ。例の禁術の件に関してだが、我らの間で討議した結果、そなたの思うつぼということになつたぞ。喜ぶがいい」

マキラは他の円卓の魔導士たちの機先を制するように、先にその結論部分を述べた。というのも、彼女には他の蒼の魔導士たちが焦らしに焦らしてから最後にその結論部分を述べるであろうことが、よくわかつていたからである。

これには、ゼファルとカドミエルだけでなく、セリユオン以外の円卓の魔導士たちも流石に面白くない顔をしたが、マキラはまったく素知らぬふうであつた。

唯一、エリメレクだけが内心（マキラが面倒な手間を省いてくれて助かつたわい）と思つていたような具合である。

「しかし、ですな」と、疑い深そうな緑の瞳に、茶色の薄い頭髪をしたエレドという男が言った。彼の役職は王府の魔導管理官である。「あなたの知恵とエリメレクさまの知識を合わせて「隕石落としの術」（メテオフォール）が完成したのは結構なことですが……やはりこの術は危険すぎるとわたしは思っています。大体、目標に必ず当たるかもわからず、一歩間違えば甚大な被害が市民に及ぶのですぞ」

「その点については、これまで何度も話しあつてきたではないか」再びマキラが声にだして意見した。セシルはこの時彼女の顔にうんざりとした表情が浮かぶのを見て、同じ問いが何十度となく繰り返されたのだろうと察していた。

「く地の産ての民」とかいうふざけた連中に、カルディナル王国を滅ぼされてしまったのでは、元も子もない。それよりは、一部に被害は出たとしても竜を撃退できるチャンスに賭けたほうがまだしも得策というものだ……というのが、我々が出した結論だつたではな

いか」

「ふん。マキラよ、随分ロンディーガの宮廷魔導士殿の肩をお持ちになるな。もしやエルフの色香に惑わされたのではないか？」

「なっ……貴様、何をいうか。今の侮辱的な言葉、すぐに取り消せ。わたしは母国の将来のことを思えばこそ、こうして呼び出しに応じ、わざわざイツファロ王国から戻ってきたのだぞ」

ナシールはマキラと同窓生であったが、その頃から常にライバル関係にあり、彼は彼女にすべての魔導教科において勝ったということとがなかった。つまり、いつも二番手だったのである。センルはそうした細かい事情のことなど、露ほども知りはしなかったが、このふたりがもともと馬の合わぬ仲であるらしいというのは見てとっていた。

「まあまあ、落ち着きなさい、ふたりとも」

睨みあうマキラとナシールの間にエリメレクが割って入った。

「<地の崖での民>とやらが次にもし攻め入るとしたら、どこの国かといえば……我らカルディナル王国よりは、ミッテルレガント王国かロンディーガ王国である可能性が高い。そうでしたな、センル殿？」

「ええ。そう思います」

センルは自分と同じ位の蒼の魔導士たち十人を見回して答えた。

二百年以上もの昔は、円卓の魔導士と呼ばれるこの十人のひとりに選ばれたと思っていたものだったが、今はそうならなかったことがまったく残念ではなかった。

「カルディナル王国は誰もが知つてのとおり、魔法の防備が非常に強い……また、それだけでなく魔法の力と竜たちの力、また奴らの操る飛空艇とがどういう連鎖反応を示すか、<地の崖での民>にもわかっていないというのが実情ではないでしょうか。私がエリメレク殿から得た情報を精査して思うに、彼らの間で魔法の力のようなものを使ったという痕跡はないように思われる。では、一体彼らはどんな力を使って飛空艇を空に浮かべて移動しているのか、とい

うことに当然なりますね。おそらく、竜を従わせているのは、魔法の力によってというのではなく、彼らしか知らない特殊な飼育法によってでしょう。また飛空艇には我々にはまだわからない、だが魔法の力に近い動力源があるのだと思われます。その力と魔法の力がどう引きあうかわからない、また竜たちが魔法の磁場の強いこの国で完全に彼らの制御下にいるものかどうか……100%絶対に近い安全ということを考えれば、私が奴らの国の軍師であったとしたら、カルディナル王国のことは少なくとも後回しにしたいと思いますね」「だが、奴らはそうした我々の思いの裏の裏をかいて聖都を滅ぼしたんですぞ」

闇のように黒い瞳をした、オレグという魔導士が言った。しゃちこばったような黒い髭を伸ばしているが、髪の毛が後退しているせいもあるのか、それはあまり彼に似合っていない。

「今度もまた裏の裏をかいて我がカルディナル王国の王都を攻め滅ぼさないなどと、一体誰に断言できるものですか？」

「そうとも」と、オレグの隣の席に座るガリユーンが言った。彼は顔に大きな傷痕があり、それは魔鳥ハルピユアと戦った時に出来たものだと言われている。瞳の色は灰色で、長い髪の毛は白髪だった。「国防といったものはくもしもくも万が一ということを考えてこそ、万全の姿勢が整うというもの。ロンディーガの宮廷魔導士よ。この取引はどう考えてもそなたの国のほうに利が大きいように思われてならぬな。何故なら、我らはく隕石落としの術くなどという危なっかしい術など使わずとも、十分魔導の力によって飛空艇を操る連中と渡りあうことが可能かもしれぬ。ロンディーガは国土の約三割が砂漠地帯……そこに隕石郡を降らせてそなたが自国を守りたいと考える策は理解できる。その際にカルディナル王国の有能な魔導士を貸し出してほしいという気持ちもな。だが、メテオフォールというのは実に危険な術だ。また何故この魔法が禁術といわれるのか、当然その理由についてはそなたも知っていないよう？」

「もちろんです、ガリユーン殿」

セシルは実際には彼のほうが二百数十歳年下でも、年長者を遇するかのようには恭しい態度で言った。

「我がロンディーガとミツテルレガント王国は、西境にある移動する砂漠のオアシスを巡って長く国境を争ってきました。このオアシスはある時にはミツテルレガント王国のものとなり、またある時にはロンディーガ王国のものとなり……まあ、歴史に弄ばれるような形で、数奇な運命を辿ってきたのですね。そこで私は、常々こう考え続けていたのですよ。オアシスの町々に防御魔法を張り、そうした上で、隕石落としの術を使つたとすれば　ミツテルレガント王国は二度とオアシスの町を自分たちのものにしようなどとは考えまい、と。ですが、やはりメテオフォールというのは禁術と呼ばれるだけあって危険な業です。私が砂漠の上に隕石を落とすつもりでいたとしても、途中でコントロールが怪しくなり、極端な話、ロンディーガの王都の真上にそれを直撃させてしまつかもしれないわけです。ですが、もしこの術を完璧に制御できたとすればと考え、魔導物理学に関して書かれた本などは、ほとんど片っぱしから読んだものでした。ここで、魔導物理学及び魔導力量学、魔導重力学及び魔導エネルギー学の権威として名高い、セリユオン殿にお聞きしたい。隕石の軌道計算については、どのくらいの正確性をもつて算出できるものでしょうか？」

セリユオンはじつと黙つてセシルや他の蒼の魔導士たちの話を聞いていたが、腕組みしていた手をとくと、自分の斜め向かいにいる先輩格の魔導士セヴァルダに、氣遣わしげな視線を送つた。何故と云つてセリユオンとセヴァルダは得意とする専攻魔法がほとんど同じだったからである。にも関わらず、自分のほうに先に話を振られたことに対して　彼は若干、戸惑いを覚えていた。

「セシル殿もご存知のとおり、魔術の論理と実践というのは、まったくの別物ですからね。たとえば、みなさんはわたしがこんなことを言つと、きつとお笑いになることだろうが……初等部の試験にこんな問題がありますね。『直径10センチの火球を作りだし、それ

をあなたは7メートル先の地面に直撃させました。その時に生じたエネルギー量と被害の規模を数式と図によって書き記しなさい』……まあ、この答えがわかったところで、それと同じ魔法が使えるかどうかというのは、まったくの別問題です。隕石の軌道計算にしてみたところで、月や星の運行を含め、すべてのことを考慮に入れた上、数値を算出したところで……せいぜいが92.4%程度の確実性しか得られません。しかもわたしは、これを少し高めの数値として今申し上げました。実際にはこの数値が絶対に100となることはないことから、<隕石落としの術>は危険な業とされ、使う魔導士は今も誰もいないですよ」

魔導物理学の教えを手ほどきしてくれた、セヴァルダのことを慮り、セリユオンはあえて彼のほうをじっと見つめ、「そうですね、先生？」といったように相手からの返事を待った。

「そうじゃ。メテオフォールは敵国を滅ぼすかわりに、また己が国をも滅びへ追いやりかねない危険な業じゃ」と、セヴァルダはしきりに黒いローブの前を流れる滝のような髭に触れながら言った。「それに、宇宙の均衡を人間の手で破ろうとする業でもある……ゆえに、わしはいくらカルディナル王国そのものを守るためとはいえ、この禁術に手を出すことには最後まで反対した。じゃがまあ、良い後継者もいることだし、わしはそろそろ引退しようかと考えておるのでな。多数決で決まったことに対し、今さらあれこれ言う気はない……が、宇宙の神を怒らせぬよう、おまえさんらはよくよく注意することじゃ」

「<隕石落としの術>に関しては」と、ここでエリメレクが座上の総責任者として、ようやく口を開いた。「わたしが最後まで責任をもつてよく監督しようと思うておる、セヴァルダよ。わたしはむしろおまえさんの反対を内心嬉しく思うておった。だが、我らの話しあいの席でも言つたとおり、メテオフォールは我々にとって最後の切り札のようなものだと考えておる。奴ら<地の崖での民>とやらがカルディナル王国へ竜とともに攻め入ってきた時に、隕石が降

つてくることで奴らの度肝を抜いたとするな。したらば、奴らはただそれだけで退却するだろうと思うのだ……また、ロンディーガ王国だけでなくイツファロ王国やミッテルレガント王国にも内々にそうした通知をだせるという点も大きい。今はどこの国でも飛空艇が次にどの国へ攻めこむかということで、怯えきつておるのでな。また、イツファロ王国には飢饉があり、ミッテルレガント王国では謎の奇病が流行つておるといふ話だ。これもまた、姫巫女さまがルシア神殿に不在であることの影響だと、民草はみな思うのである……騒ぐ人心を落ち着かせるためにも、最後に奴らを撃退できる手があると国の国防に関わる魔導士に通達するのは、それを使う・使わない以前に大切なことかもしれぬのだよ」

「確かにな」

セヴァルダは、実際の年齢よりも年のいった皺だらけの顔で微笑んだ。

「それにエリメレク殿、そなたも騒ぐ国王にとりあえず何かく地の崖で国>に対抗できる術策があるということを、なるべく早く奏上せねばならんのじゃろう？ わしは政治的なことにはまるで興味なくこの年までやって来たが、そなたのプリンクとしての苦労は多年に渡つて見てきたつもりじゃ。そのそなたが禁術と知った上で使用の許可を我ら円卓の魔導士に求めた以上は 禁術許可の書類に、わしも快くサインせねばなるまいて」

ここで、エリメレクが一番の年長者であるゼファルに禁術許可の書類を手渡した。彼はそこに書かれたことに特に目を通すでもなく、羽根ペンでさらさらと自分の名を書き、嵌めていた指輪で認証の印を押した。そして書類は連署となっているので、次にそれはカドミエルの手に渡り、彼もまたゼファルと同じようにしたあと、隣のガリユーンに書類を渡した……そして、十名全員の署名が集まると、エリメレクは「ご苦勞であった。それではみな、再びおのおのの職務へ戻られよ」と解散の言葉を述べたのである。

エリメレクはまた、円卓の魔導士たちが空間転移魔法陣の中へ消

える前に、ねぎらいの言葉をひとりひとりかけるのを、当然忘れはしなかった。

「一国のプリンクといったものは、まったく大変なものですね」

円卓の魔導士たち十人が全員いなくなったあと、<魔導会議室>に残されたセシルは、隣のエリメレクに向かって溜息を着いてみせた。

「セシル殿もご存知のとおり、円卓の魔導士たちも、そもその発祥の時にはこうではなかったのだよ。ほれ、最近何かとわたしとセシル殿との間で話題になる聖書の話によれば……三千年前の秘宝探索行の折には、円卓の魔導士たちは八面六臂の活躍を裏でしたものだ。その時の頭がのちのプリンクであり、彼の親友がロダール、また彼の腹心の部下がマキルやセリクであったというように、円卓の魔導士というのは本来は、堅い結束と絆で結ばれていたのだよ。

ところが一度魔導士制度なるものが整い、国に平穏な時代が続くとどうしてもそうしたものというのは、形骸化が進んでしまう。

わたしは思うのだがな、セシル殿。我が国の魔導士制度だけでなく、ルシアス王国の巫女・神官制度含め、中央世界は曲がり角に差しかかる次期に来ておつたのではなからうか。もちろん、<地の崖で国>などという国が本当に存在するかどうかも、我々にはまだはつきりとはわからん。だが、中央世界に再び竜が現れたということは、神からの大きな警告のように思えて、わたしにはならんのだよ」

「『おのおの悔い改めの道に入り、己が道を悟れ』ですか」と、セシルは聖書の一説を口にした。ルシアス王国の聖都にあるルシア神殿に巫巫女がいなくなると、方々に飢饉や病いが起きるといのは、昔からよく言われていることだった。だがセシルは、実際にそのようないことが世界に起きつつあるということのエリメレクから聞いてはじめて、聖竜の秘宝探索行の重要性に、初めて気づいたのである。

「聖竜の秘宝には世界のすべてを癒す力が秘められているそうですね。けれども、邪悪なる者たちはそれを使われると非常に都合が悪

い……ゆえに、あらゆる力を持つてしても探索行を妨害してくると聞いています。そこで、どう思いますか、エリメレク殿？<地の崖で国>の連中の目的は、おそらくこの秘宝集めなんですよ。そして以前にもお話したとおり、ルシアス神殿の地下の宝物倉に眠っていたであろう聖槍は、奴らの手に渡ってしまった可能性が高い。もし我々がこうしている間にも、向こうが残りの鎧や盾といったものを集めてしまった場合……どうされました、エリメレク殿？」

不意に、特にこれといった脈絡もなく、エリメレクがふおっふおつと笑いだしたのを見て、セシルは奇異な思いに包まれた。

「いやいや、お互いに持っている情報は小出しにしませんとな、セシル殿」

エリメレクはそう言つて、<魔導会議室>にある石造りの椅子に腰かけた。室内にある象牙の暖炉には魔法の炎が焚かれ、暖炉の上方にはずらりと、代々のカルディナル王国ブリンクの肖像画が並んでいる。

「もちろん、わたしにもわかつてはおるのですよ、セシル殿。賢いあなたは、円卓の魔導士の面々に直に会い、彼らのことを信頼しかねると判断された……ゆえに、わたしに話したことは彼らにも伝わってしまうかもしれないと危惧されたのでしょうか。ですが、わたしはセシル殿とは違い、これ以上遠慮はしませぬぞ。さあ、これを見てください」

エリメレクはそう言つと、首にかけた金鎖を引き抜き、そこにかかった金と銀の二連の指輪をセシルに見せた。

「エリメレク殿、一体それは……？」

見た目のほうは、特にどうということもない、なんの変哲もないただの指輪だった。だが、そこにエルフ特有の力にも似た、神聖な強い何かが宿っているのを、セシルは深く感じとっていた。

「これこそは、カルディナル王国代々のブリンクに伝わる、<聖竜の指輪>ですよ。まあ、聖竜ルシアスのちに妻となったルーシユに贈ったことから、ルーシユの指輪とも呼ばれておりますが……ど

うですか、セシル殿？ 姫巫女さまにこの品を献上される前に、あなたが一度これを指に嵌めてみなさるといふのは？」

「いえ、結構ですよ」

（エリメレク殿はもしかや自分をからかっているのだろうか？）と一瞬セシルは思ったが、彼が基本的に無駄なことや余計なことを言わぬ人物であるということは、短い付き合いながらもよくわかっていた。

つまり、エリメレクが首から金鎖を取り、またその鎖から二連の金銀の指輪を外そうとしているということは　嘘でも冗談でもなく、＜本当にこれが聖竜の指輪である＞ということに他ならないのだろう。

「いやいや、わかりますよ、今のセシル殿のお気持ちは」と、エリメレクはさも愉快そうに目を細めて笑った。「正直なところを言っていて、我々は出会ってすぐに意気投合したと同じ仲とわたしのほうでは思っております……ですから、セシル殿が二度目に来られる際には、おそらく他の旅のお仲間を連れて来られるだろうと思っておりますのです。ですがあなたは再びおひとりで来られ、＜隕石落としの術＞について、自分が解析したことのすべてをわたしに明かされたというわけですね。まあ、この問題が解決したからには、次の段階へ進むのがよろしかろうとわたしは思うのですよ。さあ、セシル殿。この指輪を嵌めてごらんなされ」

セシルはエリメレクに言われるがまま、金銀の二連の指輪を左手の薬指に嵌めた（というのも、そこにぴたりと収まりそうな気がしたからであるが、この魔法の指輪は、実はどんな指にもぴったり収まるように出来ている）。指輪を嵌めたからといって、セシルには何か特別な強い変化が現れたようにはまったく感じられなかった……そこで指輪を外すと、エリメレクにそれを返したのである。

「ふおっふおっふおっ。拍子抜けしましたでしょうな？」

エリメレクは歌うような心地好い響きで、大笑いした。

「これが、カルディナル王国のプリンクに代々伝わる秘宝というわ

けですよ。聖竜の秘宝の一部などというから、てつきり絶大な魔力でも宿っているのかと思いきや……この指輪に宿っておりますのは、人類すべての言語を理解する力、また動物や植物などと話す力なんですよ。指輪の持ち主は、聖五王国すべての言語を操る力と、辺境王国の様々な言語のすべてを理解し、かつ自分でも話すことが出来るようになるようになり、さらには動植物とも会話することが出来るようになるというわけです。ところでセシル殿、わたしは大学院時代は魔法言語学をおもに専攻しておりましてな、これでも各国の言葉にはかなり精通しておるつもりです。また、エルフ語も若い頃から堪能に話すことが出来ましたし、このことが意味すること、あなたにはおわかりになりますかな？」

「つまり、せつかくの指輪もエリメレク殿にとっては無用の長物だったと？」

「流石にそこまでは申しませんがな」

エリメレクは再びふおつふおつと小気味よく笑った。

「ですから、この指輪はあなたの旅のお仲間のひとりにお譲り致そうと思うのですよ。秘宝探索行が終わったあと、集められた秘法が一体どうなるのか、それは誰にもわかりません。聖書に書かれているのは、それが使われた時に世界が癒され救われたという<結果>についてだけです。出来ることならば、この指輪があなた方の旅に役立つよう、この老体にできることといえば、ただ神に祈ることくらいかもしれません。しかしながら……」

魔導邸内は、魔法の防御機能が強く働いているので、他人に秘密が洩れる心配はほとんどないのだが、ここでエリメレクは、ふと小声になると、セシルに耳を貸すよう合図した。そしてセシルは、エリメレクからある重大な事実を打ち明けられたのである。

「……それはつまり、秘宝の盾の継承者が今王都カーディルへやって来ているということですか！？」

「まあ、一応そういうことになりますかな」

若干顔の表情を曇らせて、エリメレクは言った。

「して、その彼がですな。わたしにこう言うのですよ。セシル殿、あなたが実に腹の黒い魔術師で、大人しい姫巫女をいのように扱い、全世界の覇権を握ろうとしているのではないか、と。ああ、もちろんわたしにはわかっております」

エリメレクはそこで、セシルが弁明の言葉を述べようとすると、両手で押し留めた。というより、セシルは自分が姫巫女と聖竜の剣の保持者かもしれない男を連れているなどは、まだ彼に話していなかったのである。にも関わらず、何故エリメレクにはそこまでのことがわかったのか、またく聖竜の盾の保持者にしても、何故カルディナル王国のプリンクにそんな忠告をしたのか、セシルはまるで見当もつかなかった。もしや自分は、長く間者に見張られていたにも関わらず、そのことにまったく気づかずにいたのだろうか？

「確かに、セシル殿にしてみれば不思議なことでしょうな。ですが聖書にもあるとおり、秘宝の保持者というのは、互いに運命に導かれるようにして出会うものなのです。千年前にあった秘法探索行にしても、三千年前にあったそれにしても……聖書の記述を読むとある箇所においてはあまりに話がうまくゆきすぎていて、本当にそうだったのかと疑いたくなるような箇所がいくつもある。ですがまあ、実際に探索行がはじまってみると、そんなものなのかもしれない。今回姫巫女殿は、自分を十分守ってくれる魔力を持ち合わせたハーフェルフのセシル殿と最初に出会い、それから次に聖竜の剣の保持者に出会われた……」

「あの、エリメレク殿は一体何故それを……」
不意にセシルは喉が渇き、象牙のテーブルの上のった水差しから、グラスに水を注いで飲むことにした。

「いえ、わたしのはただの簡単な推理のようなものです」
クリスタルの水差しから、自分もコップに水を注ぎ、エリメレクもゆつくりとそれを飲んだ。

「秘宝の保持者というのは、近くにそれを持つ者がいると自然とわかるのですよ。そこでわたしはこっさり、姿変えの術を使って若者

に化け、セシル殿が宿泊されているホテルのロビーで、あなた方のうちの誰かが姿を現すのを待っていたのです……そこで、確信したわけですね。ただ、わたしには魔導の心得があるからわかっただけのこと、剣に強い封印がかかっていることから見ても、姫巫女殿にそれが本当に聖竜の剣であると、わからなかったのも無理はありません。それに、彼らはその時、物陰から様子を窺う若い男のことも視界にも入ってなかったでしょうから、わたしは自分の推理の正しさを裏付ける証拠を得ると、そそくさとこの公邸まで戻ってきたといったような次第ですよ」

「エリメレク殿はまったくお人が悪い……」

いや、それとも流石一國を背負ってプリンクとして長く立っておられるだけのことはある、と賛辞の言葉を送ったほうが良かったのだろうか？セシルは降参するように溜息を着き、そして前髪をかき上げた。

「ですが、＜聖竜の盾＞の継承者殿は、何故私が大人しい姫巫女を自分のいいようにして覇権を握ろうとしている、などと思ったのでしょうか？」

「まあ、そこはそれ、偶然のなんとやらです」

エリメレクは考え深げな眼差しになると、鉄灰色の髭を何度も撫でながら言った。

「この場合のわたしの立場というのは、あくまで中立的なものだということ、セシル殿には何卒御理解いただきたい。また、わたしのほうであの方にセシル殿の秘密のようなものを洩らしたということは一切ないということは、堅くお約束致します。ですがあの方はすでに、セシル殿が姫巫女と行動をともにしていると知っているのですよ。ですからわたしに、＜ルーシユの指輪＞をむざむざ渡してしまうつもりなのかと、激しく詰問されました……して、そのことに対するわたしの答えというのはですな、この指輪はセシル殿が姫巫女が持つのがよろしかろうということでした。姫巫女がセシル殿に出会われたということは、セシル殿が本来の指輪の継承者であっ

たからに他ならないと、わたしはそう御説明したのですが、あの方はなんとしても取りあつてくださらず……」

「まあ、それはそうだろうな」

「センルは肩を竦め、溜息を着いた。」

「なんにしても、わたしもエリメレク殿と同じく、世界の各国語にはかなり精通しているほうだと思つし、エルフ語については言うに及ばずといったところ。アスラン殿がそれで満足なさらぬというのなら、<ルーシユの指輪>はエリメレク殿が直接姫巫女にお渡しになつてはいかがですか？しかし、私が姫巫女とともにいる限り、あの方は決して<聖竜の盾>をこちらに渡したりはなさるまい……まさか自分の過去の行状に、こんなところで復讐されようとは思つてもみませんでしたよ」

「そんなに落胆されることもありませんぞ」

エリメレクはどこか不敵な顔つきになると、再びふおつふおつと愉快そうに笑つた。

「こつした先々のことを見越しましてな、わたしはアスラン殿にこつ取引を申し出たのですよ。つまり、センル殿には再び飛空艇や竜が襲つてきた時に備えて、<秘策>と呼べる術がある。それと引き換えに<聖竜の盾>を一時的に姫巫女さまに貸して差し上げるのはいかがかと……するとあの方は、苦渋の選択をする時のように唸つておられましたな。何しろ、アスラン殿御自ら国を出てここまでやつて来られたのは、わたしに直接<地の崖>の連中をどう撃退したら良いかと聞かためだったのですから。長く国が仇としているセンル殿から秘策を乞うなど、誇り高いあの方には屈辱以外の何もでもなかつたかもしれませぬ。なんにしても、わたしがアスラン殿とその話をしたのがおとついのこと……まあ、返答が決まり次第、あの方はもう一度わたしのところへやつて来られるでしょうな」

「困りましたね」

センルはまたも溜息を着き、象牙のテーブルの上で両手を組むと、どうしたものかと思案しはじめた。千年前の秘宝探索行では、盾の

保持者と剣の保持者との間で、美しい姫巫女を巡り争いが起きたと聖書には書かれている……ふたりは結局最後まで和解はしなかったようだが、それでも姫巫女の御ために思い、旅に随行し続けたということらしい。

その家柄からいって、アスラン殿が探索行へ加わるとはセンルには想像できなかったが、それでも自分が最初の大きな躓きをミュシアに与えてしまった気がして、彼にはそのことが心に重くのしかかっていた。

「まあ、なんにしても」

エリメレクは隅の柱時計が第一の刻を刻むのを合図とするように、椅子から立ち上がった。

「一度我々は会見の場を持つ必要があります。わたしとアスラン殿と、センル殿の三人でか、あるいはそこに姫巫女殿や聖竜の剣の保持者も加えて……この指輪につきましては、わたしの姫巫女殿に対する忠誠の証しと考え、是非お受けとりください」

「いえ、今はまだその時ではないと思います」

センルは内心では、自分にそんなことを決める権限はないと思いつつも、やはりそう答えざるをえなかった。

「アスラン殿と話し合いの場を持った時に、すでにその指輪が姫巫女の指にあったりしたら、彼も面白くないものを感じるでしょう。指輪のほうを戴くのは、アスラン殿がよく納得されてから、あくまでエリメレク殿が姫巫女に直接渡されるのがよろしいかと思えます。おそらくは、それも彼の目の前で……」

「そうかもしれません」

エリメレクはセンルの意志を確認すると、今一度金鎖に二連の指輪を通し、それを再び首にかけた。

「ではセンル殿、これにてわたしは失礼致しますぞ。王府のほうに出向いて、片付けねばならない少々厄介な仕事がありますのでな」

「はい。何から何までお気遣いいただき、まことに痛み入ります」

センルが真心のこもった面差しでエリメレクのほうを見つめ、そ

れから頭を下げると、彼はセシルがよく理解できない種類の微笑みを浮かべて、空間転移魔法陣の光の輪の中へ消えた。

「さて、と。もう昼の一時過ぎ、か。あいつらは昼飯を食ったあとだろうから、私も魔導生の食堂で軽く何か食べることにするか。そのあとでミュシアとシンクノアを図書館の二階から上へ案内してやるわ」

だがこの日、セシルは妙に元気がないミュシアと、理由を聞いても答えないシンクノアとともに、すぐヤースヤナ・ホテルのほうへ引き上げてくるということになった。

シンクノア曰く、「孔雀肉を食べたらミュシアの具合が悪くなった」ということだったが、どうもそうではない気がして、帰り道ではセシルが彼女とともに馬へ乗ることにした。その時、セシルはあくまで遠回しにはあるが、ミュシアにそれとなく探りを入れてもみた……だが、やはり彼女は重い口を閉ざしたままだったのである。「それで、一体何があった？」

シンクノアが寝室の側の暖炉に火を入れ、ベッドに横になっているミュシアのことを確認すると、「寝ている」という合図を彼はセシルに送った。

「なんかさー、いつけ好かない男がミュシアにほんの五分くらいかな。話しかけてきたってわけ。そのあとなんでかわかんないけど、あの子ぼるぼる泣きだしちゃって……どう思うよ、セシル。たったの五分で初対面の女子を速攻泣かせちゃう男って」

「そいつは、どんな奴だった？」

セシルは、嫌な予感がした。何より、エリメレクが「大人しい姫巫女」と言った言葉が今さらながら気にかかっていた。とはいえ、アスラン殿についてはセシルも、噂に伝え聞いているというだけで容貌などについて詳しいことを知っているわけではない。

「たぶん歳は二十五くらいかな。んで、金髪に蒼い瞳のちよつと力ツコいいイケてる兄ちゃんみたいな？あと、着てるものから察して、すごく裕福な商人の息子が貴族のぼんぼんっていうような、そんな

感じ」

「そうか。確信は持てないが、そいつがたぶん<聖竜の盾>の継承者だ」

「いいっ!?じょーだんだろーッ!」と、シンクノアはミュシアが寝ているのも忘れ、大声で叫んだ。「俺、あんな高慢ちきな匂いをぶんぶんさせてる男と、うまくやっつく自信ないぜ。俺がセンルとうまくいってんのはさあ、単にあんたが金蔓っただけじゃなく、いい奴だからだもんな。けど、あいつはなんかちよつと違うんだよ。一目見た瞬間に絶対馬が合わねえって速攻思ったもん」

「まあ、貴族といったらいいのか、なんと言ったらいいのか……」

シンクノアにどこまで話したものと迷い、それと同時に彼は一体ミュシアに何を話したのだろうと、センルはそのことが気になっていた。あの蒼の魔導士のことを信頼するなと言われたのか、それとも君のような者が本当に姫巫女なのかどうかと、疑いの言葉でも投げかけられたのか……いや、その程度のことでもミュシアがあんなにも精神的に参るだろうかとセンルは思いもした。

(アスラン殿にはわからんだろうが)センルはシンクノアが淹れた紅茶を飲みながら考えた。(あの娘はああ見えて意外に強いからな下手にちよつかいを出せば、むしろ火傷をするのはあの方のほうだろう。だが、話をしていたのはたったの五分かそこらだという。確かあの方は魔導騎士として、かなり優秀な成績で国の魔導院を卒業されたと聞くが……)ということは、何か精神に暗示をかける魔法でも唱えられたのだろうか?)

「それで、センルのほうはどーだったわけ?」

センルはミュシアには、例の禁術について何も話していなかったが、シンクノアにはエリメレクと長くそのことを協議していると、詳しく話してあった。

「円卓の魔導士たちはみな、禁術許可の書類にサインしてくれたよ。まあそれというのも何もかも、エリメレク殿のお膳立てのお陰だったところだな。あの方はまた、<聖竜の指輪>の保持者でもあら

れて、それをミュシアに譲りたいと言っておられた。これでまあ、聖杯・剣・指輪・盾の消息まではわかったということになる。残りには聖槍と鎧と冑か。聖なる槍は敵方に奪われたものと思われるが、鎧と冑というのが一体どこにあるものなのか、私にはさっぱりわからん」

「……セシルってさ、時々すげえことを何気にさらっと言ってくれちゃうよな」

貸し馬車屋に馬を返した帰り道、町の大通りで買ったパンを、鉄串に差して軽く焼きながら、シンクノアは呆れたように言った。他に食糧雑貨店では、柘榴シロップのかかったケーキや、若鶏の蒸し焼きやチーズなども買ってきた。こうしたものは店のおかみに前もって注文がしてある品だった。

「そのかわり、私はとんでもないハマも同時にやらかしたぞ。先ほど言ったく聖なる盾の継承者であるアスラン殿な。彼はある理由から私を激しく憎んでいるはずだ。ゆえに、私がその背後についている姫巫女にむぎむぎく盾を渡してなるものかと頑強に拘っているらしい……だが、例の禁術と引き換えに、もしかしたら向こうが折れてくるかもしれん。ミッテルレガント王国でも、例の飛空艇と竜の襲来事件は、重大な国防問題だろうからな」

「ミッテルレガントのお貴族さまか。そんじゃあ無理ないかもしれないなあ。だってセシルがロンディーガの宮廷魔導士になって以来、ロクセリアっていう有名なオアシスは向こうの手に渡ってないんだろ？」

「ああ。砂漠のパラダイスだかなんだか知らんが、ああいうのが本当にロンディーガの国民は好きだからな。もつともこのオアシスの町の名は、ミッテルレガントではミグラレント、レガント語で麗しの都を意味する言葉で呼ばれているらしいが……私が死んだという噂でも聞かない限りは、ミッテルレガントは再びロンディーガの領土を侵犯することはないだろう」

この時、不意にキィとドアの開く音がし、蒼白な顔をしたミュシ

アが口許を押えながらよろめいて寝室から出てきた。

「おい、大丈夫か!？」

ミュシアは首を横に振り、セナルの手も振りほどくと、洗面器の置かれた台の前まで走っていった。そこでうえっと一度吐き、暫くのものちに吐き気がおさまると、水差しからコップに水を注いで、口の中をゆすいだ。

「少しは、楽になったか」

セナルがずっと背中をさすってくれていたのはわかっていたが、ミュシアはこの時、そうした彼の親切心を素直にありがたいとは思えなかった。というより、相手にみつともない姿を見られたことが恥かしく、このまま消え入りたようにさえ感じられて仕方なかった。

「これは、私が片付けておこう。だからおまえは向こうで休……」

「わたしに優しくしないでくださいっ!!」

自分でも思ってもみない大声でそう叫んでしまい、ミュシアは自分でも体温が一気に上がるのがわかった。まともに、セナルの顔を真っ直ぐに見ることさえ出来ない。涙が目の奥でじんと滲んだ。

「す、すみません……わたし、なんだか今、混乱してて………とにかくこれは、わたしが自分で片付けたいんです」

「そうか」

ミュシアは服の袖で口許をぬぐうと、洗面器の吐瀉物の上に洗面用のタオルをかけ、下の洗い場まで走っていった。そして彼女は次から次へと涙が溢れてくるのが止まるまで、ずっとその場所にいたのだった。

第4章 アスラン・ミツテルレガント

『君が姫巫女だということを、私は知っている』

『ち、違います。わたしは姫巫女なんかじゃありません』

ここで男は何故か、くすりとおかしそうに笑った。

『まあ、とりあえず一応そういうことにしておこうか。でもね、私は君のために一言忠告しておこうと思うんだ。君が私の妹の二の舞にならないためにも……』

ミュシアは黙ったままでいた。読んでいたのは、ミツテルレガント王国で使われている異本聖書だった。

『私の妹は、あのハーフェルフの君に恋をして、それから捨てられたんだよ。彼つてさ、ほら、優しいだろ？でもあの男は本当は残酷なんだよ。人をすつかりその気にさせておいて、最後に興味がなくなったら捨てちゃうんだ。たぶんそうやってずっと生きてきたんだろうね……ハーフェルフって千年くらい生きるらしいけど、その間にその時の気分次第で興味を持った人間に一時期引つついては離れるっていう、その繰り返しなんじゃないかな。そして今彼は姫巫女である君に夢中になっているのかもしれない。でも、それもまた彼の熱が冷めるまでの話なんだから……君も注意したほうがいいよ。私の妹のようにならないために』

『……』
ミュシアはやはり黙ったままでいた。男の言っていることのどこまでが本当で、どこまでが嘘なのかわからないと思った。それに、姫巫女と呼ばれたことで、ひどく動揺してもいた。

『今月は謝肉祭がある月だね。ルシア神殿の巫女たちは、第十三月の十三日には断食するんだろう？それから新年を迎えるまで、特に身を清めて過ごすって聞いているよ。でも君は今、それどころじゃないって感じかな？まあ、私はそう堅苦しい人間ではないから……君さえよかつたら、仮面をつけて一緒に町へ出かけないか？一度

仮面をつけさえすれば、君が姫巫女だなんて、誰も気づかないだろうしね。もつとも、そんなことは私を含めた極一部の人間しか知らない事実かな』

この時、前の座席の椅子が引かれ、シンクノアがオツホン、ウオツホンと白々しいくらい咳をつきながら、そこへ座った。

『おや。どうやら君の、赤い瞳の用心棒殿が戻ってきたようだね。それでは、わたしはこれで失敬させていただくが……先ほどの話、よく考えておいてくれたまえ』

そのあとミュシアは、シンクノアにあの男に何を言われたのかと聞かれたけれど、うまく答えることが出来なかった。それに自分が何故泣いているのかもうまく説明することが出来ない。

（あの、名前も知らない人に言われたことが、どうしてわたしはこんなに悲しいんだろう？ センルさんが、その時々で興味の持った人となつてあつるのは、むしろ当然のことだし、彼の自由でもある。それに、わたしはこれまでの旅の過程で、センルさんの優しさにずっと甘えっぱなしだった。にも関わらず、彼を責める権利なんて……）

そこまで考えて、ミュシアはハツとしたように顔を赤らめた。汚物はホテルの外にあるゴミ捨て場に捨て、あとは井戸から汲んだ水でそれを綺麗に洗った。けれど、この陶器の洗面器は三人が共同で使っているものなので、もう同じ用途のためには使えないだろうとミュシアは思った。

ズボンのポケットに手を差しこむと、そこにはクラウン金貨が数枚入っていることがわかる。雑貨店へ行って、これで新しい洗面器を買ってこなくちゃとミュシアは思った。

（このお金だって、元はセンルさんのものなのに……わたしはまるで最初から自分のものであるみたいに使ってしまった。彼が良くしてくれるのをいいことに、いつの間にか思い上がっていたんだわ）

ミュシアはその場に跪くと、両手を組み合わせ、神に対して懺悔の祈りをした。ホテルの勝手口のところに、白いローブを身にまと

った男がいることにも気づかず、彼女は五分以上もそうしていただろうか。

（神聖な空気を乱すようで、申し訳ないけど）と、アスランはそつと気配を消して、ミュシアの背後に近づいていった。（こっちはあまり時間がないのでね）

相手の意識を奪うための精神魔法の呪文を唱えると、アスランはミュシアの頭の後ろのほうで呪文の完了を示す印を切った。彼女の白い首筋にその印が吸いこまれるようにして消えると、ミュシアはそのまま、井戸の横にガクリと倒れてしまう。

「まあ、まだ完全に育っていない娘に手をだすのは、私の趣味ではないけれど……」

（この際仕方がない）と思い、ミュシアのことを抱きあげると、アスランは自分がここのか月ほど居室としている、ヤースヤナ・ホテルのくブリンクの間へ上がっていった。モザイク模様のタイルが嵌めこまれた階段を上る前に、彼は重力魔法を使ってミュシアの体を軽くしていたが、実際のところその必要もないくらい、彼女の体は軽いとアスランは感じていた。

「アスランさま、その女性は一体!？」

部屋に入るなり、侍従のマトヴェイがそう叫んだ。アスランはただ目線だけで化粧漆喰の施された白い扉を開け、また閉めた。彼はミッテルレガント王国の魔導院をトップで卒業しただけあって、騎士として剣術に通じているだけでなく、魔法のほうもかなり上級な呪文まで唱えることが出来たのである。

国民は彼が次代の王となることを待ち望んでおり、その期待のことを思えば、こうした他国への隠密行動というのは避けられてしかるべきであったに違いないが、彼は弟のルスランにこの任務を任せることだけはどうしてもしたくなかったのだ。何も、弟に何か手柄を立てさせるのが嫌だったとか、そういうことではない。というよりむしろ、自分の身に何かあっても弟がいるという安心感がアスランの行動を常に支えていたとさえいえるだろう。

だが、飛空艇の一団が西の方角からやって来て、自分たちミツテルレガント王国の領土を越え、ルシアス王国へ竜が飛んでいく姿を見た時にも……国が誇る魔導騎士の一団は、文字どおり何もすることが出来なかったのだ。

ロンディーガ王国には、蒼の魔導士のセシルという男が立って以来、攻め入ることが叶わず、ナーガ・ラージャ王国にはヴァルダという名の賢い女王が君臨して以来、別名血塗られ峠とさえ呼ばれるタハリール山脈での戦闘はびたりとやんだ。つまり、ここ数十年の間、平和な期間が長く続いたことで　ミツテルレガント王国は国防に関してよりも、享樂的な方面に随分無駄なお金を使うようになっていたのである。

たとえば、ミツテルレガントの王都だけでなく、ある程度大きな町には意味のない尖塔が随分たくさん聳えていた……これは貴族たちが競ってどちらがより高い塔を築けるかと遊び半分に作っている実用性のあまりない石造りの塔であった。途中で貴族たちが飽きて意味もなく放置されているそれらの塔があちこちの町で随分見かけることが出来ただろう。また、これもまた一種の王のご機嫌とりとして、数年前に魔導士連中がはじめたことなのだが、高く積み上げた塔の上から魔法の力で気球を飛ばすという遊びが流行しはじめた。だが、あの飛空艇の威力に比べたら、そんなものはただの子供だましのお遊戯みたいなものだ、アスランは痛切に感じていた。そして、自分たちはまったく今まで何をしてきたのかと、目を覚まされるような思いがしたのである。

歴史ある魔導騎士の一団の名にかけて、飛空艇が攻め入ってきたにも関わらず、何も出来ずにそのまま国が滅んだなど、アスランにとっては絶対あってはならないことだった。そこでカルディナル王国へ忍んでやって来、ブリンクのエリメレクに公邸で直接会見したいと申し出たというわけなのである。

「マトヴェイ、少し外へ出ていてくれないか？私はこの女性と、少し込みいった話があるのでね」

「わ、わかりました。ですが、この方は……」

アスラン王子の侍従であるマトヴェイは、魔導騎士としての将来が囑望される、才能豊かな若者であったが、性格が一本気で特に女性に対してはまったく奥手であった。もちろん、アスランはそうした彼の気質を愛していたが、マトヴェイが多分に女性というものに幻想を抱いていることに対しては、（あまり感心しないな）と感じてもいる。

「そうだよ。この方が他にもないく姫巫女>殿さ。彼女をミッテルレガントへ連れて帰れば、父上は狂喜して喜ぶだろうな。まあ、母上は面白くない顔をするに違いないが……なんにしても、私にはそのつもりはないよ。例のく蝕>と呼ばれる流行り病いを彼女に鎮めてほしいと思う気持ちはあるが、ミッテルレガントに姫巫女あり、などということになったとしたら　すぐにルシア王国のレグナ大公率いる軍と衝突することになるだろう。今は聖五王国間でもめている時ではないからな。なに、私は彼女に対して、少しばかり質問があるというそれだけだ。マトヴェイが心配するようなことは何もしない……仮にも相手はく姫巫女>さまだからな。流石の私にもそのくらいの分別はある」

それでもマトヴェイは、これまで何人も女性の女性が彼に夢中になる姿を間近で見ているだけに、見目麗しい自分の主人の言い分を、すぐには信じられなかった。そこでアスランは、深く嘆息した。

「マトヴェイ、おまえの気持ちはわかるが、いいから早く町の酒場にいったって、ビールでも一杯引っかけてくるといい。わかったね？」

やんわりとした口調の中に、若干の厳しい棘のようなものを感じ、マトヴェイは軽く頭を下げたから、くブリンクの間>より急いで退出していった。

アスランは続き部屋となっている寢室のベッドにミュシアのことを横たえると、暫くの間彼女の眠る姿をじっと観察していた。美しい娘だと思うが、特に食指を動かさそうと思わないのは、この娘がやはり姫巫女だからだろうか、アスランはふと考える。

とはいえ、千年前にあつた秘法探索行でも、三千年前にあつた探索行でも 秘宝の保持者たちが姫巫女を巡って争つたという記述があるくらいだから、何がしかの性的な魅力を感じさせるものは、おそらくあつたに違いないと、アスランはずっと以前より推測していた。

（亡くなられた先代の姫巫女リリア殿は、絶世の美女だったという噂だが……この娘には、そういうところはないな。というより、まだ顔立ちも幼く、成長段階であることが見てとれる。あと五年もすれば、さらに美しくなるやもしれぬが、どうだろうな。私は基本的に自分よりも年下の娘には興味を持ってない質だから）

ここでアスランは、水面下で縁談の進んでいる、ミッテルレガント屈指の名門貴族、レイテハスキル家の令嬢のことを思い浮かべた（あの娘は、確かに美しいことには美しいが、ただそれだけだな）というのが、自分の将来の結婚相手に対する、アスランの第一印象であつた。そして、自分は王家に生まれた者の務めとして、それなりの家の出の娘と結婚せねばならないし、まあまあ悪くなく国を治め、国民からも慕われた賢王としてその生涯を終えるであろうと、そのようにアスランはよく想像していたものだった。

ところが、例の飛空艇と竜の中央世界への襲撃があつて以来……アスランは眠られぬ日々が続いた。何故よりもよつて自分が王を継ぐという御代にこんなことが起きたのかと思つた。心の中で神を呪いさえした。だが、ルシアス王国の聖都が滅んで以来、随分長く敵からの攻撃が行われないのを見て むしろこれは神が与えた好機ではないかと、考え直すことにしたのである。

逆に考えたとすれば、ある意味ミッテルレガント王国の歴史にもつとも偉大な王として名を残すことになるかもわからないからだ。それに、姫巫女……アスランがミュシアのことを姫巫女かもしれぬと知つたのは、ほんの偶然のある出来事からだった。

アスランは侍従のマトヴェイに、暖炉の火をもつと燃すようにいつても命じるのだが（というのも、彼は寒がりだったので）、午前中

もある程度の時間がやってくると、部屋の中はむしる蒸し暑いくらいになっっている。そこでアスランは、ベランダに通じる窓を開けて、今度は少し涼むのであった。そしてその時、ひとつ下の階にあるくろダールの間へのベランダからは、人声の聞こえてくるがよくあったのである。

「セシルさん、今ベランダの柵の上に、セキレイが止まっていたんですよっ！」

可愛い女の声だと思つると同時に、（セシルだと……！？）という思いが、アスランの心に憎しみとともに燃え上がった。

「あ、でもすぐ飛んでいつちゃったんです。いつも雀ばかりだけれど、時々違う鳥がやってくると、嬉しいものですね」

「そうか。じゃあ少し、おまえのために変わった鳥を呼んでやろう」その後、どこからともなく数羽の鳥がやって来て、下のほう

からは盛んに数種類の鳥の囀る声が聞こえてきた。アスランは、セシルという名の蒼の魔導士が、おそらく自分の妹にも似たようなことをしていたのだろうと思ひ、ここでまたさらに腹立ちが抑えがたくなった。

アスランが王立図書館でミュシアに話したことは、一部分本当のことである……彼には年の離れた弟の他に、目に入れても痛くないほど可愛がっていたベスランという名の妹がおり、彼女はわずか十六歳で当時即位したばかりのシグムント王の元へ嫁いでいった。

彼女が実際の年齢以上に幼かったためだろうか、王は結婚してもすぐには可愛いベスに手をださず、彼女が精神的に大人になるのを待っていたようなところがあつたらしい。具体的なことは手紙に何も書かれていなかったが、アスランはなんとなくそうなのではないかと感じとっていた。そして敵国にも近い他国に嫁いでいった妹の手紙は、次第に狂乱の様相を呈するようになってきたのである……つまり、彼女が愛しの兄に送る手紙の内容の約八割が、宮廷で時折見かけるハーフェルフの君のことで占められるようになっていったのだ。

ベスランは、自分にはリエラ王妃の気持ちが痛いほどよくわかると繰り返し手紙に書いていたが、そのような妹の文章を読まねばならぬ兄としての自分のほうが、よほど痛いとは彼はよく感じていたものだ。

リエラ王妃といえは、二百年も昔に生きた女性ながら、音に聞こえし美姫として、ミッテルレガントの宮廷内に、肖像画の傑作を幾枚も残しているほどの女性であった。アスランは幼い頃より、その絵を見るたびに激しい憧れの気持ちをかき立てられたものである。そして彼女のような女性になら、たとえ世間に愚か者とそしられようと、自分のすべてを与えてしまっただろうと、そのように夢想することもしばしばであった。

アスランの妹のベスランのことに話を戻すとすれば、ハーフェルフの君はその後ふらりと旅へ出ていってしまい、いつ戻ってくるかわからず、そんな寂しいベスのことをシグムント王が慰めたということらしい……なんにしても今、ふたりの間には跡継ぎの子も誕生し、ベスランはハーフェルフの君からは卒業したようだ。アスランにはわかっていたが、それでも妹のベスから気の狂ったような手紙が送られてくる間、アスランは兄としてまったく気が気ではなかった。

蒼の魔導士のセンルとやらが、二百年も昔の愚行（かどつかはわからないが、ある世間的な尺度をもってすればそうであろう）をまた繰り返すつもりではないかと思ひ、シグムント王に直接、この由々しき事態をあなたはどうかお考えになつておられるのかと、問いただそうと思ったことさえあったほどである。

そうした複雑な事情とともに、アスランにはミュシアとモルークとも呼ばれる女性が、どうやら本当に姫巫女らしいと彼らのベランダでの会話を盗み聞くことにより、はつきり確信した瞬間があった。蒼の魔導士が何かとても怒った口調で、「仮にもおまえは姫巫女なのだから、もっと自分のことを大切にしろ！」といったようなことを言ったのである。そのあとに続いた会話で、アスランはセンル

という名の魔導士とミュシアという姫巫女らしき女性の力関係のよ
うなものが、はつきりわかった気がした。

それまでにも時々、彼らの話すことを聞いていて、それとなくわ
かっていたことが、はつきりとした確信に変わったと言ったほうが
いいだろうか。姫巫女はおそらく、自分の妹のベスランのように、
恋に恋する初心な乙女心をもつてハーフェルフの君のことが好きな
のだろうし、彼のほうでは姫巫女のことを妹か何かのように可愛い
と思っではいるが、それ以上の感情は持っていないのだろうと……。

三千年ほど前、為政者により国を追われた時も、千年前に国が滅
びかけた時も、姫巫女は国を再興するためにルシアス王国の聖都に
秘宝探索行が終わったあと、戻ってきているのだ。ということは、
ふたりの間でこれからどのような形で愛情のようなものが形成され
ようとも、彼らが結ばれる結末というのはないのだろうと、アスラ
ンは漠然とながら想像した。

アスランにしてみれば、自分の祖先が騎士道精神を掲げつつ、二
度とも姫巫女に振られるような形になっていることから、子孫の王
子である自分が今度こそは姫巫女の愛を勝ち得てみたいという強い
欲求があった。レイテハスキル家の令嬢と、今ベッドの上に横たわ
っている、幼な顔の姫巫女の五年後を天秤にかけるとしたら、ミュ
シアのほうが彼にとつては目方が重くもある……それに、二百年に
も渡ってミッテルレガント王国の領土を封じこめている、センルと
いう名の魔導士に横から姫巫女を奪うことで復讐してやりたいとい
う気持ちもあった。

（だが、どうも駄目だな）と、アスランは溜息を着いた。（私とし
たことが、どうしてもそういう気持ちになれない……この娘がもし
かしたら、少し神聖すぎるそのせいなのかもしれないが）

アスランは、ミュシアが井戸端で膝をついて祈っていた姿を思い
だし、なんとなく胸の痛むものを感じていた。千年前の秘宝探索行
の記述にも、三千年前の探索行の聖書の記録にも　姫巫女はただ、
姫巫女としか書かれておらず、特に名前すら後世に残ってはいない

のだ。歴史に名前すら残らぬことのために、彼女がこれからどれほど労し、長い旅を続けていかなければならないかを思うと……<聖竜の盾>などただでくれてやろうというのが、アスランの本心ではあった。

だが、アスランは仮にも一国の王子でもあったため、それは彼ひとりの独断によっては決定できないことでもあった。また、蒼の魔導士セルンに対する複雑な感情もあり、アスランは今、たったひとつの自分にとって「気の済むこと」を行うことにより、セルンに対する自分の意志決定をそれに委ねることにしたのである。

つまり、<ブリリンクの間>のドアに閉錠呪文をかけ（ただ普通に鍵をかけていただけでは、危機感をあおめることは難しいと思っただで）、アスランはミュシアの男物の服を、少しだけ脱がせておくことにした……その過程で、彼は少しだけ（惜しいな）と思いもしたが、蒼の魔導士セルンがこの部屋へ入ってくるなり血相を変えるところを想像し、アスランはその気持ちを抑えることにしたのである。

（精神魔法のひとつに、自分の言った言葉をひとつひとつ落としこんで、それをすっかり相手に信じこませるといふのがあるが）と、ミュシアが部屋から出ていってから、セルンはソファの上で考えていた。（もしかしたらミュシアは、アスラン王子に何か暗示をかけたのかもしれない。精神魔法に抗しようとする、熱がでたり吐き気を催したりするのが普通だからな。まあ、あの王子がおそらく私に関することでミュシアに何か言っただろうことは、間違いないと見ていい……リエラ王妃のことか？それとも……）

リエラ王妃のことに關していえば、ロンディーガ王国の歴史の中でもあまりに有名すぎることなので、セルンとしても特に隠す気持ちはなかった。というより、いまだに歌にも歌われているくらいなので、そのうちミュシアの耳に入ったとしてもまったく不思議のない話でもある。

ただ、ミュシアには人の内面を理想・美化して見たがる傾向が強いので、その分幻滅した時の反動も落下速度が速いのかもかもしれないとは、セシルも思っていた。

（まあ、あの娘の頭には、私が通常の恋愛くらいはしたことはあったとしても、まさか自分の主君の妃と長く不倫関係を続けるなどというシナリオは、思いつきもしないだろうからな）

その上、その相手のことをいつまでも忘れられず愛しているかといえば、二百年も経てばそのようなこともなく　かつて過去にそのようなこともあったと、割り切った目で見られる男の気持ちなどというものは、まだ十六歳の娘には、まるで想像も出来ないことだろうとセシルは思う。

（なんだろうな。果たして、汚らわしいとも思われたのかどうか……）

ミュシアに「優しくしないでくださいっ！」と言われた時、自分で思っていた以上に、深いショックを受けたことにセシルはショックを受けた。というか、そうした新鮮な感情を胸に覚えたこと自体ここ数十年絶えて久しいことだったのである。あれも経験すればこれも経験したし、自分にとって少しでも興味があると思われることは、どんなことでも徹底的に追求してきた。また魔導士として世界中のあの場所・この場所へ旅もしてきたし、これ以上自分が知りえることなど、もはやそう多くはないとさえ、セシルは思っていたものだった。

（だが、やはり人間の心というものは、何百年生きようとわかるものではないということか。まあ、若い娘の心理についてなど、今よりずっと若かった頃から研究しようなどと思ったことはないのだから、当然かもしれないが）

「ミュシアちゃん、なんかおっそくねえか？いつもいつもベタベタ張りついてるってわけにもいかないから、時にはひとりになる時間つてのも必要かなって思ってたけど……俺、ちょっと下の井戸のあたりとか見てくるわ」

そう言ってシンクノアがソファから腰を浮かせた時のことだった。コンコン、と部屋のドアがノックされたのである。

「あの、すみません」と、紺地に銀ボタンの制服を着た、ボーイの少年がそこには立っていた。「僕、ずっと何かにつけてチップをもらっていたのに、今ごろこんなことを言うのはどうかっていう気もしたんですけど……なんかやっぱり心苦しいっていうか、良心が痛んじまって」

セルルにとっては、彼にチップを多めに与え続けたことは、自分に対する保険のようなものであった。そうしておけば、彼は他の誰にも余計なことを話さずにおいてくれるだろうと計算していたのである。その彼が心苦しくなるということは（まさか！）とセルルは思った。

「今から一週間以上前のことになるんですけど、上のくブリンクの間>に宿泊中の方から、くロダールの間>には今どんな人間が宿泊しているのかと聞かれました……あんまりお金を弾まれたもんで、俺、ついすっかり喋っちまって」

セルルはそれ以上少年の話をすでに聞いていなかった。扉が壊れるのではないかというくらい、ボタンとそこを開き、廊下を通り抜けるとモザイク模様の階段を足早に上っていった。

くブリンクの間>の扉に閉錠呪文がかかっているとわかり、セルルの気持ちはさらに急いだ。かけられている魔法の効果よりも強い呪文を唱え、そこを押し開くと 暖かい毛織物の敷かれた床の上には、ミュシアが普段はいている靴が、少し離れたところに不自然な形で落ちていた。

当然、これをアスランの演出と知らないセルルは、続き部屋となつている寝室のドアを、ほとんど蹴破らんばかりにして押し開けていた。

「貴様……っ！！」

寝室の窓が開き、そこから風とともに雪が舞いこんできた。アスランは長く母国の仇と教えこまれてきた男の姿を前にして、思わず

たじろいでいた。

(こいつが、蒼の魔導士……!!)

この時アスランは、効果を上げるためにミュシアの服を少しばかりはだけさせておいたことを、すぐに後悔した。この魔導士にとっては、姫巫女が見知らぬ男の寝室で寝ているというだけでも、すでに十分だったのだ。

だが、物々しい音の響きに、ミュシアが目を覚ましてくれて助かったとアスランは思った。魔力の差からして、自分が到底叶う相手ではないと彼はすぐ悟っていたが、それでも無様に床へ打ち据えられるような場面だけは避けられたことに、感謝せずにはいられない。

「ミュシア、おまえ……」

それ以上のことはどうやら、蒼の魔導士の中で言葉にならないようだった。彼はどこか愛しそうな仕種で、姫巫女の髪を整えてやり、何気なく服のボタンを留めてやつたりしている。

姫巫女のほうはといえば、まだどこかぼんやりしており、意識が半分しか戻っていないような状態だった。おそらく、何かおかしな飲み薬でも含まされたと誤解したのだろう。セシルがアスランのほうをギロリと冷たい眼差しで睨んでくる。

「違う、違う！」

アスランは自分でも若干情けなく聞こえる声で弁明した。

「私は本当に何もしていない……というより、正確にはあんたを試したかったっていう、それだけなんだ。蒼の魔導士セシル、あんたがその子のことをどのくらい深く思っているのか、それがただの一次的なものかどうか、それを知りたかった」

「くだらんことを……」

セシルは唾を吐き捨てるようにそう言い、ミュシアの額に手をあてると、熱冷ましと吐き気止めの呪文を唱えていた。途端、姫巫女ははつきりと覚醒し、ベッドの上に体を起き上がらせると、なんのためらいもなくセシルの首に両手をまわして抱きついた。

アスランにしては珍しいことだが、この時のミュシアの様子があ

あまりに艶めかしいように感じられて　彼は一瞬ドキリとしたほどである。

「ごめんなさい、センルさんっ。わたし、さっきひどいことを言うてしまつて……」

「いや、そんなことはどうでもいい」

そう言つてセンルは、そのままミュシアのことを抱き上げると、アスランの前から去つていった。ふたりとも彼には一瞥もくれなかつたが、アスランは特にそのことを屈辱的とは感じない。というより、彼らは自分たちでは気づいていないのだから　お互いの間に絆という名の糸がしっかり結ばれており、それを他人が無理にほどこうとすればするほど、それは強く結びつく性質を持っているということに。

「やれやれ。ご先祖さまに引き続き、これで計三連敗ということになるな」

アスランは自分の完敗を認めつつ、それでいて妙に清々しい気持ちでもあつた。最初はただ「考えさせてください」とブリंकのエリメレクには答えていたが　＜聖竜の盾＞と引き換えに、例の飛空艇を追い散らす策というのをあの魔導士に伝授してもらつのも悪くないと、初めてそう思った。

（そのかわり、元はしっかり絞り取らせてもらわないとな）

アスランは寢室の窓を閉めると、そこから白い花びらのような牡丹雪が舞うのを眺め、マトヴェイが戻ってくるまでの間、どうやったら最大公約数の好条件を相手から引きだせるかと、何度も頭の中で組み立て直した……そう、ミッテルガント王国の次期国王は、実に外交手腕に優れた王として、これから諸国にその名を響き渡らせていくことになるのであつた。

第5章 魔導会議室での会見

「しっかし、そんな場所に俺っちみたいのが行って、本当にいいものかね？」

シンクノアはカーデイル王立図書館の二階で、テガシエルパの民について書かれた本を読みながら、隣のセシルにそう聞いた。

「アスラン・ミッテルレガント王子がそうおっしゃってるんだから、いいんじゃないのか」

ムスっとした顔の表情のまま、セシルはどこか平板な声で答えた。あの時、自分がただ「試されただけ」だというのは、あとになればなるほど、セシルの中では明確な記憶として甦ってきた。もう一度アスランと会った時、怒りのあまり彼を殴るかもしれないと思うほどだが、相手が「王子」という高貴な身分である以上、高ぶる感情をなんとか静めねばならない。

「セシルさん、図書館の二階から上は、どんな本も魔石がなければ絶対に読めないようになってるんですか？」

「魔導の心得・幻術に対する防衛策？」という本を手にし、ミュシアはそれを開いてくれるようセシルに手渡した。セシルがヒヤシンス石の嵌まった櫛の杖を本の上へかざすと、書物を閉じている縞瑪瑙の石と呼応し、その部分が静かに開く。

「そうだな。二階から上の本はすべて、こうして開けない限りは文字が紙の上に浮かび上がってこない。縞瑪瑙というのは、第十級エディナの魔導士が持つ杖の魔石だ。二階の本はすべて縞瑪瑙で閉じられているが、三階のクワイルの書架は、第九級の魔導士が持つ杖の魔石である、トパーズでしか開かないといった具合だな。もっとも、トパーズの嵌まった杖があれば、二階の図書もすべて閲覧が可能ということになるが」

「えっと、でもその理屈でいったとしたら、普通の平民たちもお店で買った宝石を持ちこめば、本を読めるっていうことにはならない

「んですか？」

「まあ、そこが魔法というものの、なんとも不思議なところだな」

最近、ミュシアがやたら魔導のことに興味を持って色々聞いてくるので、セシルはその度に当たり前のようなことを根気よく答えてやっていた。昔は、魔導教師だけは絶対自分に向いてないと信じて疑わなかったセシルだが、ミュシアのようになんでもしつかり「聞く」姿勢を持つタイプの生徒になら　どんな面倒な説明も、まるで苦にならないのが不思議だった。

「魔導生たちが学院を卒業する時にもらう杖は、すべて魔術院の地下に住む小人たちが作っているんだ。私の知る限り、その秘密についてはどうもホビットだけしか知らないらしく、とにかく彼らの作ってくれた杖に嵌まった魔石でしか、王立図書館の本は開かないように出来ている。ところでミュシアは、幻術の防衛策なんかに本当に興味があるのか？」

「えっと、前にシロンっていう町で……シンクノアが強い幻術に惑わされたってあとから聞いて、その時にすごく気になったんです。またそういうタイプの幻術使いと対面することになったら、どうしたらいいんだろうって」

「あ、俺もそれ、めっちゃ興味ある」

「船上の民、テガシエルパについての覚え書」という本を書架にしまつと、シンクノアもまたミュシアが手にしている本を横から覗きこんだ。

「え」と、なにになに。『相手の幻術から自分の身を守るためには、まず気構えというものが非常に重要です。第一に深呼吸をして、よく目を凝らしましょう。それでもまわりの風景に変化がなかったら、数を数えるなど、まったく別のことに思考を集中させましょう。しかしながら、相手がこちらを殺害しようと目論んでいるような場合、そんな悠長なことはしてられないとあなたは思うに違いありません。たとえば、幻術によって自分の身内の血潮が沸騰するように熱いと感じる時、わたしたちはどうしたら良いのでしょうか？この場合

には、冰山を脳裏にイメージすると良いのです。けれども、相手の惑わす力が圧倒的に強い場合には、幻術に引きずられて実際に体温が上昇し、あなたは倒れ、死に至る危険もあります。こうした時のために、幻術を跳ね返すための幻術返しの呪文が非常に有効となるのです……」

「なんだよ！それなら全然ダメじゃん！俺、魔法使えないから、そんな言葉唱えたって意味ない気がする」

「いや、そうでもないぞ」と、セシルは本から顔を上げたシンクノアに向かって言った。「魔法を使えない者が、ここに書かれている呪文を唱えただけでも、大分違うものなんだ。魔導というものには、それぞれ法則があつて、その法則性を完全に修めた者だけが術を駆使できるようになる。だが、呪文を唱えることは、その法則性を完全にではなくても、一部分は発動できるということだ……まあ、まじない程度の効果は、どんな人間の上にも現れるといったところかな」

「でも、相手の魔力のほうに圧倒的に上だったら、ほとんど焼け石に水なんじゃねーの？」

「そうかもしれない。だが、幻術というものはとにかく、一点突破だからな。たとえば、目の前に憎くて仕方ない奴が幻として現れ、そいつを百度斬つても相手が死ななかつたとするな。だが、その過程で幻術にかかっている本人自身が、そのことで気が済み、相手に対する憎しみを捨てるということはありうる……そうなれば、まるで何かの恨みの念が晴れたみたいに、その幻術はもはやなんの効果も及ぼさないことになるわけだ」

「なるほど。さつすが、セシル大先生……」
シンクノアが感心したように、何度もセシルの背中を叩いて寄こす。

「……おまえに褒められても嬉しくないどころか、むしろ馬鹿にされているように感じるのは、私の気のせいかな？」

「何をおっしゃいますやら！これでも俺、セシルのことはほんと、

大尊敬しまくってるんだぜ!」

ふたりのそんな会話のやりとりを聞いていて、ミュシアは思わずくすりと笑った。ミュシアにとってカーディル王立図書館へやって来て良かったと思うことのうちに、セシルがどんな場所で一番若かった頃を過ごしたのかを知れたということがある。

二階より上にある図書館内の本はどれも、魔法文字によって書かれているものが多いので、ミュシアにとって実用性があるように感じられる本は少なかったとはいえ……それでも、こうして読むことの出来るうちの何冊かを手にとってみるだけでも、大分違っていった。セシル自身はおそらく、自分で気づいていないに違いないが、彼は魔導に関することを話す時、ふと少年に戻ったような顔をするところがあるのだ。セシルの顔に浮かぶその表情を何度も見たくて、ミュシアが魔法について色々質問しているのだとは 彼は思いもしなかったに違いない。

「さて、と。そろそろマゼルの刻か。何しろ相手は一国の王子さまだからな。一分でも待たせたとしたら、死ぬまで嫌味たらしくネチネチそのことを覚えていられるだろうよ」

「まあなあ。アスラン王子にとっちゃあ、俺なんか平民以下のゴミそのものか、その上にたかる八工くらいの存在なんだろうからな。八工がライオンを待たせちゃ悪いもんな」

「そう卑屈になることもないさ」

魔導寮に続く渡り廊下のほうへ歩いていきながら、セシルは言った。

「私にとっては、おまえのほうがあの子などより、よほど魂に値打ちがあると思うからな。アスラン王子も、王の器としては良い方であろうとは思……だが、王冠がその頭上から落ちた時、どの程度人間として値打ちがあるのか、わたしが貴族や王族と呼ばれる連中と過ごす時に思うのは、そういうことだからな」

「ははっ。セシルって時々、真顔ですごいこと言うよな。俺、一瞬今あんたに、本気で惚れそうになったぜ」

「気持ちの悪いことを言うな」

軽くしなを作ってうふつと笑うシンクノアのことは無視し、一番後ろからついて来ていたミュシアのことを、セシルは振り返った。

「どうした。もしかしてアスラン王子に会うのが怖いのか？」

「えっ、えつと……」

ズバリそのとおりではあったのだが、そう言うことも出来ずに、ミュシアは渡り廊下の中央で立ち止まった。廊下の窓からは、本当はないはずの渓谷と、美しい川が流れている光景が見える……その上、時々絶壁の頂上付近から鷲や鷹といった猛禽類が飛んでくるということさえあるのだった。

「大丈夫だ。おまえのことは必ず私が守ってやる」

そう言ってセシルは、黒に近い蒼のマントをバサリと広げ、その中に小柄なミュシアのことを包み隠した。

（うっわ、気っ障！）と、いつもながらシンクは思うが、もちろん口には出さずに黙っておいた。

ミュシアはといえば、ぎゅっとセシルに抱きつき、そのままの姿勢で彼について歩いていった。前までの自分ならおそらく　せっかくの彼の好意を突き返していたかもしれない。というより、反射的に恥かしいと思う気持ちのほうに先に立ち、セシルの体から自分の身を離そうとしただろう。

けれど、アスラン王子の部屋から戻ってきた時、ベッドの傍らにいたセシルは、ミュシアに対してこんなことを言っていたのである。

『おまえは意外に、人を芯から信頼するということを知らないな』

最初、自分の目が覚めた場所が<ロダールの間>であると信じて疑っていなかったミュシアは、セシルに抱きかかえられ、階段を下りていくうちに怖くなった。知らない間に、自分はまた彼に迷惑をかけてしまったのだと、そう思ったから……。

『まあ、親しき仲にも礼儀ありとはいうがな。その点シンクノアは大した男だ。押すところは押し、引くところは引くというかな。あれで瞳の色が赤以外でさえあったなら、彼の元には始終人がやって

きて、家の炉辺にはいつも笑いがあるといったような人生だったかもしれない。それでおまえは、一体何がそんなに怖い？自分が何かをしたら、そのせいで私やシンクノアがおまえのことを嫌うとも思っているのか？』

ミュシアはしきりに首を振った。何故かはわからないけれど、涙が溢れて止まらなくなった。アスランに言われたことがきつかけで泣いたのとは違う、心の温かくなるような涙だった。

『ミュシア、おまえはどうもわかってないらしいが……おまえが何をしようとして、どんなことを言おうと、私やシンクノアがおまえを嫌うだなんて、ありえないことなんだともっと自覚しろ。見知らぬ男の寝室にいたからといって、そんなのはおまえのせいではないし、私はおかしなように誤解したりもしない。そのことはわかるな？』

真っ赤になりながら、ミュシアはこくりと頷いた。一度は引いたと思った熱が、再びぶり返してきたみたいに体が熱かった。

『よし。それで、一体あいつに何を言われた？彼は魔法の心得があるから、おまえに強い暗示をかけるような魔法を使ったのだろうと私は思っている。いわゆる精神魔法と呼ばれる類のものだ。それを使って何か言われると、普通であればありえない馬鹿みたいなことが、突然本当にそのとおりだと感じられてくるものなんだ。しかも、それを誰にも言わないよう二重に暗示をかけることも出来る……だが、たった五分の間に彼もそこまでのことはしなかつたらうと私は思っている。どうだ？それでも話したくないか？』

『えっと、あの人の妹さんが…… センルさんと仲が良くって、でもセンルさんに興味がなくなった途端捨てられちゃったって。だから君も気をつけたほうがいいって言われたんです。センルさんが、姫巫女であるわたしに今は興味を持っていても、そのうち妹さんみたいになるかもしれないから……』

ここでセンルは、天を仰ぐようにして前髪をかき上げた。

（あの野郎……！！）というのがセンルの本心ではあったが、これがミュシアに色々話しておく、ちょうどいい機会かもしれないと思

いもした。

『ベスラン王妃のことだな。誤解のないよう言っておくが、彼女は私が仕えるロンディーガ王国の現国王の妃だ。婚姻の宴に私は出席しなかったが、それでもその後宮廷内にいる時に、色々話しましたし、魔術を見せてほしいとせがまれて、ちょっとした幻術を見せたりもしたよ。だが、それだけだ』

『それだけって……』

思わずそう言ってしまったから、ミュシアは再び口を噤んだ。

『どうした？今心の中で思ったことを言ってみろ』

『セシルさんは、ご存知ないんです』

ミュシアは勇気をだして、振り絞るような声で言った。

『ベスランさんはセシルさんのことが好きだったんだと思います。』

セシルさんはただ、何気なく彼女に優しくしたのだとしても、彼女はそうは思わなかった。わたしも、セシルさんに優しくされると、それがとても嬉しいのに、何故か時々胸がすごく苦しくなるんです。わたし、そんなに色々良くしていただいても……セシルさんにお返し出来るようなものも、何も持っていないし』

『そんなにあまり、可愛いことをいうもんじゃない』

ミュシアが顔を上げた時、セシルは彼女が今まで見たこともないような顔の表情をしていた。彼が何故そんなふうに照れたような顔をしているのか、ミュシアはその夜、何度となく考えてみたけれど、やはりよくわからなかった。

それからセシルは、今から二百年くらい昔に、リエラ王妃という女性と自分の主君の目を欺いて、恋人関係にあったということをもミュシアに話した。彼には滅多にないことだったが、その話を彼女が聞いてどんなふうと思うのか……セシルが自分の反応を気にしているらしいことが、ミュシアには不思議だった。

そして、その時に彼女は初めて気づいたのだ。自分もたぶん、何か言ったりしたりする度ごとに、セシルやシンクノアの反応が気になるといった態度をしているのだらう、と。

ある意味不思議なことだったかもしれないが、ミュシアはセンルの口からリエラ王妃のことを聞かされても、それほど深いショックは受けなかった。それよりも、「こんなことは出来れば話したくないのだが」といったセンルの態度のほうに気がなった。そして彼もまた、自分を信頼していればこそ、話す必要のないことまで語ってくれたのだということが、ミュシアにはよくわかっていたのである。

『つまり、だ。私は時々おまえが、何か完璧な人間でも見るような目で私を見ていると知っている。だが、今まで生きてきた中で、私も時にはそういう失敗もしたし、おまえが尊敬の眼差しで見上げるほどの存在でもないということだな。アスラン王子の目的は、私とおまえの心を離すことだった。次に会った時、彼はまた似たようなことを言うてくるかもしれないが……彼が何をどう言おうと、おまえは私のほうを信頼しろ。秘宝探索行については、この先どうなるかわからないにしても、私はミュシア、おまえに出来ることはなんでもしてやりたいと思っている。まさかそのことを、一時的に面白がっているだけだとか、そんなふうにはおまえだって思わないだろう？』

『センルさん、わたし……………』

ここまでセンルが色々話してくれた過程で、ふたりの間には疑いや怖れの念といったものはまったく消えてなくなっていた。それでミュシアは自分が一番聞きたいと思うことを、ただストレートに聞いたのだった。

『あの、センルさんはリエラ王妃のことを、今も心から愛しているんですか？もし仮に二百年の時が過ぎてても、人はまったく同じ想いで同じ人を愛し続けるということが、出来るものなんでしょうか？』

『私はハーフェルフだからな。エルフというのは、とても情の深い生き物だから、彼らにはそれが出来る。というのも、そもそも彼らはそういう永遠性の世界で暮らしているからだ。私も、自分がもし今も向こうの世界へいたら、そんなふうには彼女のことを愛せたのかもしれない……だが、人間の世界では時の流れ方が違う。その時は

永遠の忠誠をもつてリエラのことを愛していて、その気持ちに偽りはなかったとしても、やはり時が過ぎるとそれは<過去>のことになってしまうんだ。だが、彼女がとても誇り高くて素晴らしい女性だったということは、私の中で消えない記憶として残り続けるだろう。他に何か質問はあるか？』

『いえ……ただわたし、巫女として時々思っていたことがあるんです。わたしは自分が一生ルシア神殿に仕えて、誰か男の人を好きになるとか、そういう人生についてはあまり考えてみたことがなくて……でも、そういう形で人を愛したことがないのに、神さまの愛を説くだなんて、少し矛盾してやしないかしらつて。けれど、神殿の外に出てみて思ったんです。本当は、どちらも同じくらい素晴らしいことなのかもしれないつて』

『確かに、おまえのような生き方は、誰にでも出来るものではないからな。私は、何故おまえが聖杯の継承者として姫巫女に選ばれたのか、よくわかる気がする。もっとも、おまえ自身にはそれがわからないかもしれないが……まあ、それがおまえの一番の美点でもあるのだろうよ』

ミュシアには、セシルの言っている言葉の意味がやはりよくわからなかったが、ふたりの間ではもう、それ以上の言葉による繋がりはさして重要ではなくなっていた。

ミュシアは、自分もまたリエラ王妃のように、セシルの中で<過去の人>になって終わるのではないかとか、そうした思いは一切持たなかった。セシルがリエラ王妃のことを愛したように、強く彼に求められてみたいとか、そうした発想も彼女にはない。ゆえに、リエラ王妃と自分の存在を秤にかけたとしたら、セシルの中で目方が重いのはどちらなのだろうとは　露ほども思うことはなかったのである。

この日の夜、眠る前にミュシアが思ったこと、それはセシルが時々見せた不可思議な顔の表情と、彼の優しさについてだけだった。そして神に対して深く感謝の祈りを捧げた。セシルのような人に巡

り会えたことと、また、彼が自分に対して好意を抱いてくれているということに……それから、リエラ王妃という女性が、今生きている女性でなくて良かったと、ミュシアはそうも思っていた。もしセールの想い人がロンディーガ王国の宮廷に今もいるのだとしたら、彼がどんなに優しくしてくれたとしても、自分は複雑な思いしか抱けなかったに違いない。

そしてそこまで考えて、何かの矛盾を流石にミュシアも感じたが、自分にとって深い愛情を持てる人物が、ふたりも隣の部屋にいることを神に感謝しているうちに　　彼女はそのまま深い眠りへ落ちてしまった。

「秘策が聞いて呆れますね。〈隕石落としの術〉（メテオフォール）などという危険極まりない魔術で、奴らのことを殲滅できるなどと、本当にそのようなことをブリンク殿はお考えなのですか!？」

時はマゼルの刻のこと、象牙の円卓を囲んで、そこにはアスラン王子と従者マトヴェイ、それからセシルにシンクノアにミュシア、カルディナル王国のブリンク、エリメレクの六名が顔を揃えていた。「一応、理論上ではそうだ、ということですよ。アスラン王子」

エリメレクはアスランがそう言うだろうことを見越していたのだらう、まったく冷静で、落ち着き払ったまま（というか、素人に説明するのはまったく疲れるといった面倒くさそうな顔の表情さえ見せて）、大儀そうに言った。

「隕石の命中率は、高く見積もって92.4%程度。それでは残りの7.6%をどうするのかと、アスラン王子はおっしゃるでしょうな。わたしの考えでは、五人一組の魔導隊を作って、ひとつの隕石群をコントロールするのがよかろうと思っています。当然位はセリク以上の……それでも御しきれなかった隕石については、わたしや蒼の魔導士たちがなんとかフォローするといったところですが、それでも一般市民には被害がでるかもしれませんが、他国の侵略

に甘んじる代償はそれ以上かもしれないのですぞ。なんにせよ、この案については円卓の魔導士十名もすでに承認済みのことです」

「さぞや議会は紛糾したことでしょうな」

ミュシアはアスランと目が合うのがなんとなく怖かったので、少し顔を俯けるようにして、彼のほうは見ないようにしながら話を聞いていた。だが、彼女がそうしているからこそ、アスランはどこか容赦のない眼差しをミュシアのほうに向けていたのだともいえる……ゆえに、セシルとシンクノアは「この野郎っ!!」という同じひとつの思いを隠し持っていたが、顔の表情は両者とも、不自然なほど冷静そのものであった。

「それで、そちらの方が姫巫女さまですか」

(白々しい奴めっ!!)と、ここでもまた、シンクノアとセシルはまったく同じ思いを持った。だが、シンクノアにとって何より心配だったのは、ここでもしセシルが切れたら、アスラン王子の思いつぼということになるかもしれないということだった。

しかしながら、そこは仮にも一国を代表する宮廷魔導士である。

セシルはおとといミュシアがアスランに拉致されてのち、自分の弱味となりそうなことは大体話してあったので、安心して彼に立ち向かっていくことが出来た。

「そんなに不躰にジロジロと眺められては、姫巫女に失礼というものでしょう。彼女があまりに美しいので、見とれる気持ちはわかりますが、もう少しお控えになってほしいものですな、アスラン王子？」

「それは、とんだ御無礼を致しました」

アスランは何かの科白を読み上げるように、棒読み口調で言った。とはいえ、隣のマトヴェイはミュシアのような少女が自分の好みに合っていたのだろう。彼はセシルの言葉に、ハツとしたように顔を赤らめていた。

「ところで、蒼の魔導士セシル殿。今あなたは姫巫女殿の後見人のようなお立場であるというのは本当ですか？あわよくばそのこと

を盾に、ロンディーガ王国が今後五王国の実権を握ったり、はたまたあなた御自身が覇権を掌中にするということもありえると、そのように思いますが、いかがかと?」

「ありえませんか」

セシルはまるで馬鹿を見るような目つきで、アスランのことを見返してやった。それも白々しいような溜息とともに。

「私と姫巫女殿の邂逅と、聖竜の剣の保持者のそれとは、ただの偶然によるものです。まあ、一般に聖竜の秘宝を手に入れた者はこの世を制すと言われていますが、歴史として書き記された秘宝探索行の中では、秘宝を使った時に世界が救われ癒されたということしかわかりません。私が姫巫女殿と行動をともしているのは、彼女が無私の精神によってそのようなことを目的としているからなのです。今我々の元にあるのは、聖杯、剣、そしてエリメレク殿がカルディナル王国のプリンクとして持つ指輪という、その三つです。ここにミッテルレガント王国の次期国王であるアスランさまが盾をお貸しくださると確約してくだされば、秘宝のうち四つが揃ったということになります。残りは鎧と冑と聖槍……このうち聖槍は、<地の崖での民>とやらに奪われてしまった可能性が高いと思われますが、彼らの目的がもし聖竜の秘宝をすべて揃えることであつたとすれば、もつとも危険なのはおそらく我がロンディーガでもなく、イツファロ王国でもなく、ミッテルレガント王国ということになるでしょうな。何故と云って聖書を読めば一目瞭然、聖竜の盾の継承者は二度とも、ミッテルレガント王国の王子と魔導騎士なのですから。そのことを思えば、カルディナル王国から魔導隊を派遣してもらつて国の危難を救う策を打つておくことは、非常に重要かと思われませんが、いかがかと?」

アスランが黙りこみ、何か真剣な物思いに耽りはじめたのを見て、シンクノアは（セシルってすげーっ!）と、あらためて感心した。シンクノアは彼が屁理屈を並べてもつとごねるのではないかと想像していたが、確かに、聖竜の盾があるとすればミッテルレガン

ト王国のどこかであろうというのは、誰もが想像するようなことなのである。

「確かにそれは、貴公の言ったとおりかもしれぬ。また私自身もそう考えて、飛空艇と竜の襲撃事件以来、眠られぬ夜を幾夜も過ごしたというのも事実……だが、ミツテルレガントに聖竜の盾があり、カルディナル王国にルーシュの指輪があつたのだ。ということは、貴公が宮廷魔導士を勤めるロンディーガにも、冑か鎧があるということではないのか？」

「それが、わからないのですよ」

センルは相手が若干胸襟を開いたように感じ、自らもまた同程度にアスランに対して心を開いた。

「王子もご存知のとおり、私がロンディーガ王国で宮廷魔導士となつてすでに二百年余り……ですが、聖竜の秘宝のひの字も聞いたことはありません。ということは、最低でも王都やその近辺にそれらしきものはないと考えるのが自然です。ですが、唯一気になるのが……」

センルはここで、いかにも気が進まなそうに、溜息を着いた。自分が内に持つ情報をアスランに渡すのが嫌だったわけではなく、闇魔法や邪教に関する口にするのは、ハーフエルフである彼にとって、実に気の重いことだったのである。

「ロンディーガの国土の南西に、ルシアス島と呼ばれる島があります。ここはみなさん御承知のとおり、聖竜ルシアスが暗黒竜との戦いで傷ついた時、その羽を休めた伝説の場所であるとされています。また、ルシアスが後に妻となるルーシュと出会った愛の島だとも言われるわけですが……現在は偶像崇拜のメッカとも言わざるをえない。ロディーガ民族は、一に音楽、二に踊り、三に語りといったような、享樂的な気質を持っていますからね。ようするに聖竜ルシアスとルーシュの名にあやかっているうちに、どんどん真のルシア信仰とはかけ離れた場所になっていってしまったんですよ。聖竜ルシア

スとルーシユが出会ったとされる場所などもあるのですが、私の知る限りその歴史的信憑性には限りなくあやしいものがある……なんにしても、今ではなんの神を祀っているのかもわからぬような、おかしな塔やピラミッドが建っていたりと、邪教の聖地という言い方はおかしいかもしれないが、そのような場所にルシアス島はなってしまうっている。もしいつか、聖竜の秘宝を探索する日が来るかもしれぬと私にわかっていれば　ルシアス島をもう少しどうにかすべきだと、私の口から王に進言することもできたかもしれない。だが、今となつては後の祭りといったところ……」

「つまり、セシル殿はもしロンディーガ国内のどこかに鎧か冑があったとすれば、現段階ではそこがもつともあやしいと思っておられるということですか？」

「まあ、そうですね」

セシルは再び溜息を着いて、アスランに答えた。

「消去法でいくとすれば、そこから探す他ないかもしれませんが……ただ、あの島には何かあるとは、大分以前より思っていました。といっても、私を感じていたのは邪教の影のようなものですがね。普通は、聖竜伝説の伝わる島にそのようなものはびこるなどありえないと思われるでしょうが、あそこは本土から離れていることもあって、私としても「嫌な感じがする」と思い続けていただけに、あまり関わりあいになりたくなかったのですよ」

「なるほど……」

相手が本音で話しているということが感触として伝わり、アスランは用意してきた辛辣な言葉のいくつかを、心の内に引っこめるということにした。本当はリエラ王妃のことを口にするだけで、姫巫女とセシルの動揺を誘いたいと思っていたが、ハーフェルフとして気質に合わない場所であれ、彼は犠牲と代償を支払ってもそこへ赴く覚悟があるのだと、そう感じたからである。

「では、聖竜の剣の持ち主殿に聞きたい。その剣の出どころは一体どこなのですか？」

「あゝ、俺はまあイツファロの出身で、この剣をくれたおっちゃんも、イツファロの人間っつーか……」

意外にもアスランが、丁寧な言葉遣いで自分より目上とまでは言わないにしても、対等な人間と接するように聞いてきたので、シンクは思わず普段の地が出てしまった。本当は、もし話を振られたら、セシルのようにきちんとした共通語で話したいと思っていたにも関わらず。

「俺は瞳の色がこれだからさ、まあ小さい頃からいわゆる村八分的境遇で暮らしてきたってわけなんだけど……そんな俺の元にある日、剣の達人のおっさんがやつて来て、何年か稽古をつけてくれたんだ。このおっさんが村を立ち去り際に聖竜の剣を何故か置いてったってことなんだけど……」

「その者の名は？」

シンクノアは一瞬ためらったが、彼がマリサと話していたことで、リキエルというのは剣士の称号だというのを思いだした。本名でないなら大丈夫だろうと思い、シンクはその名を出した。

「リキエルだと！？はっはっはっ！なるほど、いかにもありえそうなことだ」

シンクノアもセシルもミュシアも、またエリメレクも アスランが何故その名前に強く反応したのか、まるで見当もつかなかった。「リキエルというのは、もしかしてあのリキエルさまのことなのですか？」

マトヴェイもまた、石の椅子から身を乗り出し、アスラン王子に若干身を寄せるような形でそう聞いた。

「あの男は今、我ら魔導騎士の騎士団長のひとりをしておるよ。今からもう七年くらい前に、イツファロ王国から流れてきてな。おそろしく剣の腕が立つので、魔法は当時まったく使えなかったにも関わらず、父上が寵臣のひとりとして迎え入れたのだ。リキエルは元イツファロ王国のく北斗七聖将と呼ばれる剣の使い手だったのだが、まあ、あの国も色々あるからな。彼は自由を求めて祖国を逃

れてきたと言っていたが、実はそうではなく、王都イツファルにある聖竜の剣を奪って逃げたということなのだろう。リキエルというのはまったく愉快な男でな、その気質に免じて、私も父も特にイツファアの国情について深く詮索したりはしなかった……あれほどの男が貴公に剣の稽古をつけ、なおかつ自分の命をかけて王宮から奪った剣を渡したのだ。シンクノアとやら、貴公は実は相当の手だれであるに違いない」

そうアスランが言い終わるか終わらぬうちに　彼はローブの襟元に隠したナイフを取り出し、目にも止まらぬ速さでシンクに向けてそれを放った。シンクノアは反射的に剣の柄でそれを弾いたが、実際にはその必要もなかったと、すぐ気づいた。もし自分が微動だにしなかったとしても、ナイフは首と右肩の間をただ通り過ぎていったに違いない。

「魔導邸内での争いごとは御法度ですぞ」

シンクノアが剣の柄で弾いたナイフに、エリメレクは浮遊魔法をかけていた。そこでナイフは床へ落ちる寸前で空中静止し、エリメレクが手を伸ばして取ると、象牙のテーブルの上へのせられた。

「大丈夫ですか、シンクノア!？」

ミュシアが顔を青くしてシンクのほうを振り返ると、アスランは初めて彼女がいたことに気づいたように、ハツとした。自分はどうも、最初の出会いから今に至るまで、彼女に嫌われる言動ばかりとっている気がする……。

「ああ、心配はいらない。そもそも王子も当てるつもりなんかなかったんだ。まあ、リキエルの消息もわかったことだし、今のはなかったことにしてやるよ」

「すみません。アスラン王子はリキエルさまと剣で渡りあって、いまだに一本も取れないままなものですから、それでいい……」

「余計なことを言うな、マトヴェイ」

アスラン王子は気分を害したように両腕を組むと、暫くの間何かを考えこむように黙りこんでいた。イツファア王国に聖竜の剣があ

り、カルディナル王国にルーシユの指輪、ミッテルレガント王国には聖竜の盾がある……これでもし、ロンディーガに鎧か冑があったとして、残るひとつの秘宝は、一体どこに眠っていることになるのだろうか？

アスランは、おそらく蒼の魔導士セシルが、今自分とまったく同じことを考えているだろうとわかっていた。そして彼と目があうと、一国の王子である自分に遠慮して、先に意見するのを控えているに違いないと感じた。

「どうやら私は少々、話しすぎた上に手まで動かしすぎたようだ。これからは少し、大人しく黙っていることにしよう」

「といつてもまあ、私の考えていることと、アスラン王子の考えていることとは、おそらくまったく同じことでしょうな」

アスランがシンクノアにナイフを放つても、セシルにはまるで動じるところがなかった。アスランはそれを、セシルが自分の連れの腕を、それだけ信頼している証しとして受け止めていた。

「聖書に書かれたことについては……まあ、私などより姫巫女のほうがよほど詳しいに違いないが、三千年前の探索行でも、千年前にあつた探索行でも 冑が見つかるのは最後だったんですよ。この正訳聖書の記述には不思議な点がいくつもあつて、まず、探索行に関わつた人物の心の描写が事細かくでてくる……この聖書と呼ばれる書物を書いたのは神であるとされているが、それこそ神でなければそんな深いところまで人の心の内を読めはせぬだろうというくらい、そうした描写がとても多い。ゆえに、これは秘宝探索行に随行した人物のうちの一ひとり、あるいは探索行に何がしかの形で関わつた人物、あるいは、秘宝の保持者のひとりが自分の家来などに伝えて、物語ふうにとめさせたものであるうと言われています」

そこまでの自分の説明で、セシルはミュシアが不服そうな顔をしているのに気づき、隣の彼女に向かって微笑みかけた。

「どうした。私の今の説明では、まったく十分でないとも言いたげだな」

「はい。だって、聖都のルシア神殿の巫女もルシアス神殿の神官も正訳聖書の信憑性を露ほども疑ってはいないからです。セシルさんは魔導士だから、そんなふうに分析的にただの物語として聖書を読むのかもしれないけれど、わたしたちにとって聖書というのは、本当に神の指が書いたそのままの言葉なんです」

姫巫女が蒼の魔導士にそう意見するのを聞いて、（なるほど。この娘にはこういう側面もあるのか）と、アスランは少し感心した。てつきり、蒼の魔導士にいいようにされている、ねんねの人形か何かだとばかり思っていたのである。

そして、自分の早計な行動について、彼はあらためて後悔していた。

「そのことは別にしても……」

ミュシアはさらに言を継いだ。

「セシルさんが言いたいのはたぶん、次のようなことなんだと思います。正訳聖書には、秘宝探索行に関わった人物の、おそらく本人にしかわからない心の描写が多く出てくるのと同時に、明らかにこの部分が必要というか、重要と思われる点に、欠落箇所がとても多いんです。これは、聖書が人から人へ伝えられ、写しとられていく過程で、後世の人々が不適切と感じた部分が削除されたからではないかと推測する聖書学者もいますが、わたしはそうは思いません。いえ、仮にそうであったとしても、それもまた神の御旨であったのです。ゆえに、現存する聖書を頼りにすれば、秘宝探索行は必ず最後にうまくいくと思っています……たとえば、歴史として残っている二度の探索行では、ともに胃が見つかるのは一番最後です。ところが、三千年前の探索行でも千年前の探索行でも、どうやって胃が見つかったのか、その記述がともにまったくありません。秘宝が六つ集まった時点で、どこからともなくそれがやって来たようにしか……」

ここでミュシアは、魔導会議室に集った全員が、自分の話す言葉を傾聴していることに気づき、ハツとしたように顔を赤らめた。

「あ、あの、わたし　　なんだか場違いなことを言ってしまったみたいで……………」

「いやいや、そんなことはありませんとも。流石は姫巫女殿と思い、このブリンク、感動のあまり言葉もなかった次第ですよ」

エリメレクはそう言ってミュシアに対し、励ますように微笑みかけた。歴史に残っている過去の秘法探索行において、姫巫女は姫巫女としか書き記されず、彼女が言った言葉に関しては記述があるものの、他の随行者たちとは違い、姫巫女の心理描写といったものは一切出てこない。だが、それが一体何故なのか、エリメレクにはたつた今、わかつたような気がしていた。

「まあ、そういうことだな」

セシルは助けをせがむようにミュシアに見つめられ、仕方ないといった顔になると、再び座上手綱を握ることにした。

「なんにしても、次なる我らの任務は、秘宝のうちのひとつを探しだすということです。イツファロ王国に聖竜の剣が、カルディナル王国にルーシユの指輪が、ミッテルレガント王国に聖竜の盾があったわけですから　　よもや我がロンディーガには何も無いということだけは、ありえないように思われる。そこでエリメレク殿にひとつお聞きしたいが、前にも申し上げたとおり、私はロンディーガのブリンクであるアヒトフェルとはあまりうまくいっていません。まさかとは思いますが、エリメレク殿がルーシユの指輪を持っておられたように…………　　ロンディーガのブリンクだけに伝わるそうした秘密があるということはないでしょうか？」

「一応、あらためて書面にしてアヒトフェルには訊いてみましょう」と、エリメレクはセシルに約束した。「まあ、まずそうしたことはありえないと思いますがね。もしそうだとすれば、とくにカルディナル王国の歴代のブリンクのうち、誰かに伝えられているはずですから。そもそもカルディナル王国のブリンクには、聖都ルシアスに聖杯と聖槍が、イツファロ王国に聖なる剣が、ミッテルレガント王国に代々盾が伝わっているという情報は掴んでいた…………ですから、

運命に導かれて姫巫女殿が王立魔導院を訪ねてきたとすれば、まず秘宝のうち五つが揃うだけの手がかりは得られていたはずなのです。今姫巫女殿のお話にもあったとおり、聖竜の秘宝は六つ揃った時点で最後の胃がどこからともなく現れるのだとした場合、もつとも重要なのはおそらく、聖なる鎧ということになる。千年前の秘宝探索行では、ロンディーガ出身の鍛冶屋が邪教の軍勢に寝返ったとされていることから見ても、セシル殿のお話と合致するところがあられると思われる。まあ、あやつら闇の軍勢は、姫巫女に秘宝をすべて集めさせねば良いわけであるから、そのうちのどれかひとつを人の近寄れぬような場所に封じたのかもしれない。灯台もと暗しとはよく言ったものですな、セシル殿。聖竜の島とすら呼ばれる場所なんですから、真つ先にあやしむべきはずなのに、あの島にはどこか、そうした人の気を逸らせる力がずつと以前より張り巡らされているとしか思えない。なんにしても、あの場所は危険な地です。エルフが持つのはまったく逆の、邪な力が働いているとしか思えませんからな……あやつらの手に落ちたとすればセシル殿、御身はただでは済みますまいぞ。闇の軍勢どもはいつだって、人間の血よりもハーフェルフの血を邪教の神殿に捧げたいと思っているものだからな。それでも御身は行かれるか？」

「それがもし、神の御心であったとするなら」
珍しくもセシルは、神の名とともに誓いの言葉を口にした。というよりむしろ、そんな場所であるからこそ、ミュシアのことを近づかせたくないとは彼は考えていた。自分ひとり、もしくは自分とリンクノアがその危険な場所へ赴き、聖なる鎧を闇の軍勢より奪取するというのが理想ではあるが、これまでの道中で、ミュシアが持つ信仰の力がいかに邪教勢力に対し強い力を示したかを思い起こすと、彼女がただ「いる」というだけで大分違うことは明らかであった。

「わたし……わたしは嫌です！そんなの……！」
不意に強い口調でミュシアがそう叫んだのを聞き、象牙のテープ

ルを囲んでいた面々は、弾かれたように一斉に顔を上げた。

「わたしのせいでセンルさんがそんな場所へ行くだなんて、耐えられませんか。第一、聖なる鎧と呼ばれる秘宝を、どうやって邪教勢力が隠しておけるのかもわかりませんし……センルさんが無理をしてそんな場所へ行く必要はないと思います。それに、危険な場所へ足を踏み入れたにも関わらず、結局そこに聖なる鎧はなかったということだってありえるんですから。秘宝を探すことも大切かもしれませんが、わたしはその前になすべきことがあるとも思っています。ミッテルレガント王国では「蝕」という原因不明の病いが流行っていると聞きました。もしそれが姫巫女がルシア神殿に不在であることが原因なのだとしたら、わたし自身がその、神殿になりたくないと思っています」

「……姫巫女御自ら、流行り病いを鎮めに、我が国へ来てくださると？」

アスランは、ミュシアの妙に熱心な顔つきを見て驚いた。自分はミッテルレガント王国の王子である。そしてその前に、蒼の魔導士センルが彼女のことを何かの道具のように扱っているように感じ、同じく姫巫女を操ることは出来ないかと、邪な動機も持っていた……だが、それとこれとは別の問題として捉え、彼女はミッテルレガントへ来てくれるというのである。

（なんとという娘だ。というより、それであればこそ、この蒼の魔導士は……）

アスランが視線を転じた時、センルは彼には理解できない種類の表情を浮かべていた。ここは公の場なので、口にはだしては言えないが、あとでたっぷり押し置きしてやるとでもいうような……。

「姫巫女殿」

アスランはスツと立ち上がると、離れた席にいるミュシアの元まで近づいてゆき、それから彼女の足元に跪いた。

「数々の御無礼、何卒許されよ。このアスラン・ミッテルレガント、次期国王となりしその暁には、必ず生涯に渡って御身に忠誠を誓い

まずぞ。聖竜の秘宝のひとつである聖なる盾もまた、御身のもの……私には貴女の足の指に口接ける値打ちもありませぬが、もし許されるなら、今、その手に忠誠の誓いを立てることをお許しいただきたく……」

ミュシアはアスランに対し、左の手の甲を与えた。そして彼はそこに神聖な口接けをしたのだったが、アスランがそうしていた時間は妙に長く感じられた。

そして最後に彼が、一瞬悔悟の思いを眼差しに浮かべるのを見てミュシアは心の中で、アスラン王子のことを完全に許すということにしたのである。

「さて、話はまとまりましたな」

エリメレクはアスランが座席に戻るのを待つてから、ニコニコしてそう告げた。それが何故だったのかは、座上の誰にもわからなかったに違いない。だが今、カルディナル王国のプリンクは、この会議がはじまった時とはまるで別人のような晴れやかな顔つきをしていた。

彼は多忙な中、この魔導会議室での時間を無理にとっていたのだが、他のすべての公務を投げ捨てても、この会見の場を持って良かったと、この場にいる誰にも知りえぬ理由から、そのように感じていたのである。

「ミュシア、いや、姫巫女殿よ。おまえは一体いつミッテルレガント王国へ出発するつもりなんだ？」

「なるべく早く、それも近いうちに」

センルの問いにミュシアが即答すると、マトヴェイがやけに嬉しそうに反応した。

「あの、僕たちは……というか、アスラン王子と僕は、明日にでも王都カーディルを出る予定でいたんですが。どうしますか、王子？ せっかくですから……」

「いや、我々は予定通り明日、出立するでしょう」

アスランは、やけにきっぱりとした決意に満ちた口調で言った。

「姫巫女殿が来てくださるといふ、この嬉しき知らせを、なるべく速く我が国へと持ち帰りたいのだ。もちろん、姫巫女殿がミッテルレガントにあり、などという噂が立つたら、ルシアス王国のレグナ大公と対立することになるかもわからない。あの狐……いや、失礼。彼にはあまり良くない噂があるのですよ。なんにしても、今は聖五王国間で揉めているような場合ではない。国を揚げて姫巫女殿を盛大にお迎えしたいのは山々だが、極内輪だけでひっそりとそのような宴を持つべきなのではないか、おそらくは」

「はい。わたしは、ミッテルレガント王国で自分が姫巫女であると名のり出ようとは思っていません。出来れば、王子の御身内にさえ、このことは内密にしていたきたいのです。＜蝕＞という病いは、らい病によく似ていると聞きました。かかった者は肉が崩れ落ちていき、激しい苦痛の中で息を引きとるのだとか……秘宝探検行よりも先に、今苦しんで者のためにこそ、わたしは働きたいと思っています」

「では、私は治療院のほうがどうなっているのか、先によく調べておこうと思います」アスランはよどみなく言った。「この病気は一度罹ると根治がほぼ不可能であり、ただ無残に肉が腐り落ち、最後は灰のようになるのを待つしかないと言われています。そうやって腕や足を失った者が数多くおり、またその病いがうつるのではないかと恐れ、他の者はなかなか罹患者に近づきたがりません。恥かしい話、我が国でも治療者や介護者が不足しているのが現状……ですから、姫巫女をお迎えするのにそれなりの施設等を国を揚げて準備したいのですよ。そのために父上を説得するのに、姫巫女殿の名を使わせていただければと思うのですが、よろしいでしょうか？」

「そういうことなら、構いませんが……ですが、わたしは宴の席などに出席するつもりはありませんので、その際には父王にその点を強くお伝えくださるよう、よろしく願います」

「承知致しました」

アスランは最後に恭しくそう答え、蒼の魔導士が今度は実に満足

げな顔の表情をしていることに気づいた。彼の眼差しは深い愛情をもって隣の姫巫女に注がれており、アスランはそれだけでも、センルが実はどのくらいミュシアという少女に夢中なのが、よくわかったものである。

（だが、この男は三百歳にもなりながら、自分でそうと気づいていないのであろう）

その翌日、エシユタリオン街道へ向かうアスランと、彼の従者マトヴェイの足は、実に軽やかなものであった。外では寒風が吹きすさび、雪雲が母国の方角を覆っていても、彼らは三千エリオン以上もの道のりを馬でゆくことに、なんの辛さも感じはしなかった。

その胸には希望　　何故なのかはよくわからない、希望だけが強く燃えていた。

姫巫女はこの世の光である、というのは聖書に書かれている言葉でもあるし、事実そのとおりでもあるのだろうと、アスランはこれまで思ってきたが、彼にとって今その意味はまるで違うものになっていた。幼い頃から彼に神学を教えこんだ教師は、どこか教条主義的な四角ばったことばかり、アスランの脳に詰めこもうとしたが、彼が今持っているのは本物のく生きた信仰とも呼ぶべきものだった。

アスランは王子として、ルシア神殿やルシアス神殿を敬うべしと教えられてきたから、そのように生きてきたのだったが、今はミュシアという名の少女に、この世界の命運のすべてを賭けてもよい、という気にすらなっていた。

何故とって、これまではただ理屈だけが書き記された分厚い板がアスランの心に眠っているばかりだったのが、墓から死人が甦ったように、初めて彼の中でそれがく生きた教えとなりつつあったからである。

（蒼の魔導士センルよ、私はおそらく、おまえになりたかったのだ。おまえのようにあの美しい娘を庇護し、なおかつ彼女に尊敬と賞賛の眼差しで見上げられたかった。そして、姫巫女があの時、ベッド

の上でおまえの首に手をまわしたように　そのような関係を彼女と持たいと内心では切望していたのだろう)

「だが、まったく人生というのは皮肉というのか、うまく出来ているものだな、マトヴェイ」

「そのとおりでございますね、アスランさま」

マトヴェイは、アスラン王子が何を指してそう言ったのか、彼なりに理解したつもりになって答えた。

「アスラン王子と僕が宿泊しているのと同じホテルに、姫巫女さまがいらっしやっただなんて……僕は感動しました。あの人のためになら僕は、命を投げ捨てたとしても構わない」

「ほう、おまえもそう思うか」

アスランは冗談めかした口調で、隣の馬上の従者を眺めやった。王都カーデイルを出発し、約120エリオンを駆け、ヴァルダスという名の町を目前に控えた時のことだった。

「私はこれから、レイテハスキル家の御令嬢と数年内に婚姻せねばならぬ身であるというに　心の中では姫巫女に懸想する間抜けな男となるやもしれぬな。まこと、騎士道といったものはつらいものよ」

「王子、まさか本気でそうお思いになっておられるのではないでしょうね？」

マトヴェイはどこか心配げな眼差しで、自分の主君のほうを見返した。アスランは白馬の馬上で、深窓の令嬢でも想っているかの如き、深い溜息を着いている。

「おお、愛し麗しの姫巫女よ！貴女の心はすでに、あのハーフェルフの君のもの。そしてハーフェルフの君もまた、自分ではそうと気づかず、貴女に恋をしているのだ……まったく、あれほど賢い男が、己の恋心にはまるで気づかぬとは、愚かなことよ。もっとも、そうでなければ、秘宝探索行といったものは完遂されずに終わるのかもしれないがな。しかし、それにしても……」

アスランはここで、センルが血相を変えてくブリンクの間への寝

室へ飛びこんできた時のことを思いだした。そして彼は最初「くつくつ」と喉を鳴らして笑い、次の瞬間にはマトヴェイが驚くほどの大声で、大笑いしていた。

「いやはや、神というのはまったく、うまく事を仕組むものよ」

自分の主君が何を指してそう言ったのか、マトヴェイにはよくわからなかったが、彼はただ忠実な従僕らしく、アスラン王子に対し「そうでございますね、アスランさま」と、答えるに留めておいたのだった。

終章 リキエルとキリエル

「そろそろ白状したらどうだ、シンクノア。貴様、ナルム村にいた時、私に対して『もう隠しごとは何も無い』といった風を装っていたが……この期に及んでなお、さらに私に隠していることがあるだろうか?」

王立魔術院内にある、魔導師から引き上げてくる前に アスラ
ン王子とマトヴェイが辞去したあと、シンクノアはエリメレクに何故鞘から剣が抜けないのか、その相談をしていた。対する彼の答えというのは、「強い封印がかかっているからですよ」というもので、彼がその封印を調べてみたところ、「ある種の条件が満たされれば鞘から剣が抜けるといった種類のもの」であるということだった。

「では、私が以前透視魔法を使って、鍵のような形に見えたものは……」
「……」
セシルがそう言いかけると、エリメレクは呪文をひとつ唱え、セシルが見たのと同じ幻影を、誰の目にも見えるよう浮かび上がらせた。

「まあ、どこかいびつな形をした鍵のような剣に見えますが、これがこの剣の本当の姿ではない。いわば一種のフェイクのようなものですね。アスラン王子が言っていたとおり……本来この剣は、イツファロ王国の〈北斗七聖将〉と呼ばれる剣豪たちが守っているものなのです。彼らはこの剣のことを単に隠喩として「鍵」とか、あるいは「不殺の剣アスタリオン」と呼んだりしていますな。ですが、わたしがマキラから受けた報告の限りにおいて……この剣は、今も王宮内に安置されているということになってはいるはずですよ。この剣が何故、リキエル殿の手からシンクノア殿の手に渡されたのか、お心当たりがありますまいか?」

「特にこれとってないなあ」

そう言っただけでシンクは、無造作にぼりぼりと髪の毛をかいていたが、

この時、セシルは彼が嘘をついていると、はつきり見抜いていた。また、エリメレクもそれ以上深く追求してこなかったが、彼も心の中では目の前の赤い瞳の男が何者なのか、見抜いていたような節がある……さらに、エリメレクはミュシアに対しても、最後にどこか謎めいたことを言い残していた。

「今一度ご足労をおかけすることを、どうかこの老いぼれにお許ししてください、姫巫女殿。この老体も何かと忙しい身ゆえ……ミッテルレガント王国へ出発する前に、是非お渡ししたいものがありますのでな」

金と銀の二連の指輪である<ルーシユの指輪>であれば、すでにミュシアの首にかかっていた。エリメレクは最初、アスラン王子の同意を得た上で、それをセシルのほうに渡したほうが良いかもしれぬ、と考えていた。何故と云って、聖竜の秘宝が近くにあった場合、秘宝の所持者にはそのことがわかるからである。

だが、セシルはアスランの同意を得ても、やはりその指輪は姫巫女が持つべきであると主張して、指輪に口付けし、エルフとしての祝福を与えると、自らの手でそれをミュシアの左の薬指にはめていた。

アスランはその時の様子を見て、このふたりが仮に肉体関係をこれから先持たぬままであったとしても、彼らの間の絆は断ち切られることはないだろうと予感した。つまり、己の失恋をはつきりと悟ったのである。

<ルーシユの指輪>以外に一国のプリンクが姫巫女に渡したいものとはなんだろうとセシルは思いもしたが、ヤースヤナ・ホテルへ戻ってきて彼が真つ先にしたのは、シンクノアのことを問い詰めるということであった。

「そーんなこと言っただってさあ」

シンクノアは、すっかり冷えきっているホテルの室内を暖めるため、灰の始末をしてから、そこに薪を放りこんでいた。火のほうはセシルが魔法で一秒とかからず点けてくれたが、その炎の燃え上が

り方にはどこか、彼の怒りを感じさせるところがある。

「大体セルルだって、俺に隠していることなんかいつぱいあんでしょーが。なんで俺ばっかりがそんな、あれもこれもそれもケツの毛まで数えあげるみたいに、あんたに教えなきゃなんないんだよ。ま、あんたには宿の世話にもなれば食事の世話にもなってるし……そこんとこを盾にとられりゃ俺も、話さないってわけにはいかないけどさ」

「ほーう。ようやく自白したな。話さないわけにはいかないということとは、ようするにそういう種類のことがあるというわけだ。ここからは私の推測だが、リキエルというく北斗七聖将と呼ばれる剣豪が、わざわざ命懸けで奪った剣をおまえに託したということは、それだけの理由があったとしか思えん。ということは、つまり「やめてください、セルルさん！」

以前、ルシア神殿の巫女制度などについて、セルルに根掘り葉掘り聞かれた時、シンクノアが庇ってくれたことを思いだし、ミュシアは彼に詮索をやめさせようとした。

「セルルさんだって、人に聞かれないことのひとつやふたつ、あるでしょう？シンクノアだって、今まで自分が悪くもないことので、つらいことがたくさんあったんですから、彼が嫌だと思っことをしつこく聞いたりするのはどうかと思います。それに、シンクノアが自分で話したい時が来たら、自然と話してくれるのを待つべきだとも思いますし」

この時一瞬、セルルは胸を弾かれたような微かな痛みを胸に覚えた。彼はここ数十年以上、心が傷つくのであるとか、そうした経験をした記憶がない。だが、こんなほんの小さなことでも、自分が愛する者の拒絶に近い感情は、もともと繊細なセルルの心に掠り傷を作った。

そして彼はそのことに驚くあまり……暫しの間、らしくもなく言葉を失ったのである。

「さっすがミュシアはわかってくれてんな、俺の気持ちを……！」

「もちろんです、シンクノア。わたしたちは大切な仲間なんですから」

それから三人は、夕食をとりながら、まったく別のことに話題を移していった。ミッテルレガント王国へ出発する日どりのこと、聖竜の秘宝のこと、またエリメレクがミュシアに渡したいと言っていたものことなど。話はどこまでいっても、途切れるということがなかった。

「あの、でもこれはわたしが自分でそうしたいと思っただけのことであって……おふたりが一緒につきあう必要は、本当は全然ないんです。＜蝕＞という病いは、もしかしたら伝染性のものかもしれないと言いますし、仮にミッテルレガント王国まで来てくださったとしても、施療院のほうまで来るのは危険だと思うんです。だから……」

「私に関しては心配ない」

ポークチョップをつまみながら、セメルがそう言った。

「私は、普通の人間がかかるような病気には、一切かからないからな。それが仮にらい病であったとしても、うつる心配は一切ないということだ。だが、シンクノアはやはり、そうした施療院へは近づかないほうがいいだろう。べつにシンクノアの身を案じてこう言うのではなく、施療院を赤い瞳の男がうるちよろしていたら、奴が呪いを運んできたのなんだの、色々うるさく言う連中が出てくるだろうということだ」

「へいへーい」

シンクノアは白パンに蜂蜜をたっぷり塗ると、それをデザートがわりに食べながら答えた。

「ま、下手すりゃランチにあって生き埋めってことにもなりかねないって、身に沁みて知ってるからな。人間ってのは、それが飢饉であれ病気であれなんであれ、自分のまわりにある面白くないことを、＜何かのせい＞に出来る対象を常に求めてるってわけだ。俺はちょっとリキエルのが気になるから、今ミッテルレガントの宮廷で

魔導騎士になつてるとかいうおっさんのことを訪ねてみるよ。この剣のことも聞きたいことが色々あるし」

ここで再び、セシルはシンクノアに質問したいと思うことがいくつあったが、先ほどのミュシアの言葉を思いだし、彼は好奇心が頭をもたげてくるのを、ぐっと抑えつけねばならなかった。

（あーらら。セシルの旦那ってば、無理しちゃって）

ぶくく、とシンクノアは笑いだしたのを必死で堪えた。シンクノアはセシルが人前で指輪に口付けを与え、それをミュシアの左手の薬指にはめるのを見て、ここまで来ても彼は自分でまったく気づいていないのだと思っていた。

（つーより、俺でさえわかるくらいだから、あの勘の鋭いミツテルレガント王国の王子さまなんか、もっと丸わかりだったろうな。しかもミュシアはもっとわかかってなくて、巫女は装身具類は一切身に着けられないとか言いだす始末……まあ、ようするに普段はセシルのほうがミュシアのことを言うなりにさせてるように見えたとしても、結局、切り札を持つてるのはこの子のほうなんだ）

シンクノアはいつもどおり、セシルがミュシアに「もっと食べ」と言つて色々な皿の品をすすめるのを見て（おまえらは新婚の夫婦かつつーの）と突っ込んでやりたい衝動を堪えつつ、ミュシアが寢室のほうへ下がって眠る時が来るのを待った。

何もべつに、ミュシアに聞かれたくない話を、就寝後に男ふたりでしようというのではない。むしろ、自分が話したいと思う時が来るまで待つべきと言ってくれたミュシアにこそ、話すべきなのかもしれないと、シンクノアはそう思いもした。

だが、彼にとってこのことは本当に……人に話すのが心底、気のすすまない以外の何ものでもなかったのだ。

「よくぞ我慢なさいましたな、セシルさんよ」

シンクノアはミュシアが続き部屋の寢室へいってしまつと、寢床の用意をはじめたセシルに、笑うような声でそう言った。

「仕方あるまい。それに、確かに私にも、今さらあえて突ついてほ

しくない過去というのはあるからな。あの娘は本当によくわからん。この間は泣いていたかと思えば、今日は姫巫女らしく毅然と振るまったり……私の考えではな、聖竜の秘宝さえ集まれば、飢饉もいかなる病いも万事解決されるものとして、そちらの探索行を急ぐべきだと思っていた。だがあの娘は、<蝕>とかいう流行り病いのために自分に意地の悪いことをした王子が治める国へ、治療へ行きたいのだという。実際私は、ここでミュシアと一度別れて、ロンディーガの情勢を探っておこうかと思ったりもした。ルシアス島のどこに何があるか、細かいことの書き記された地図を再度調べておきたくもあるし……だが、あの娘が私の不在中にアスランに何かされるかもしれないと思うと……なんだ、シンクノア。貴様、一体何がそんなにおかしい」

「いや、あんたってほんとにいい奴なんだな」と思ってたさ」

ソファの上にあぐらをかきながら、シンクノアは微笑った。

「あのアスランって王子が登場してくれたお陰で、俺、そのことがほんとによくわかった気がする。まあ、簡単にいうとあの王子とセルンって若干キャラが被ってんだよな。知的でクールな策謀家ってところがさ。でも、あの王子はちょっと利己的で意地悪なところがあるのが玉に瑕ってとこかな。けど、セルン、あんたには本当の真んつてもんがあるよ。こんな小っ恥かしい科白を言うからには、俺はあんたのその真んつてもんのために、セルンの好奇心をちょっとばかり満たすような話をこれからしようかなって思うんだけど」

「べつに、無理しなくてもいいんだぞ」

シンクノアには、セルンが本当にそう言ってくれているのがわかったが、むしろそうであればこそ、話してしまうべきだろうという気がしていた。

「前にさ、俺のことを第十三月の十三日に森で拾って育ててくれたマリサっていうばあさんの話、セルンにしたことがあったよな。もうすぐその第十三月の十三日ってのが近づいてるわけだけど……セルン、その時こう言ってくれたよな。生まれてすぐ捨てられたって

わけじゃないんだから、おまえの生まれ月は本当は第十二月とか第十一月とか第十月なんじゃないかって。けど、俺の生まれは間違いない。確かに第十三月の十三日で、しかも生まれた時間も深夜の一時ときてる。マリサっていうのは、リキエルと同じく、元々北斗七聖将のひとりで、称号名はキリエルと言ったらいい。リキエルの本名については俺も本当に知らない。けど、マリサが普通のばーさんじゃないっていうことには、小さい頃から気づいてたよ。やたら物知りだったし、何よりもさ　　女なのに刀傷が体中にたくさんあるんだ。リキエルがうちの丸太小屋に住みはじめて、増築するまでの間、俺は小さい一間の部屋にマリサと寝起きてたんだ。湯浴みをする時なんか、冬は室内だからさ、まあ当たり前のようにお互いの裸なんかを見たりしてた。俺が物心ついたばかりくらいの頃……確かこんなことをマリサに聞いたことがあるのを覚えている。背中に深々と剣による傷が走っているのを見て、どうやってたらこんな傷がつくのかって聞いたんだ。けど、なんか曖昧に誤魔化されて、それで終わりだった。それからまた七つか八つか十くらいの頃にも、似たようなことを聞いたよ。そんなに深い傷を負ったら、一体どのくらい血が流れるんだろう、みたいなこと。そしたら彼女は、「いずれおまえにもわかるだろう」って、どこか悲しそうな瞳で言った。その後、リキエルがうちに住みつきはじめた時にも、「なんかおかしいな」とはずっと思ってた。リキエルは自分のことを「放浪の剣士」だなんて名のつてたけど、マリサのことをよく「キリエ」っていう名前で呼んでたんだ。そしてその度にマリサは、「シンクノアの前でその名を呼ぶのはやめておくれ」って言った。リキエルっていうのがまた、やったらなんでも知ってるおっさんでな。剣術の他にも俺に、自分の知ってることはなんでも教えたがったよ。聖五王国の共通語であるルーシス語はマリサにも教えてもらってたけど、リキエルは他にもカーディル語やロディーガ語やレガント語なんかも教えてくれた。俺がそういう勉強をさぼりたがるとき、耳にタコが出来てくくらい、繰り返し同じことを言ったよ。おまえには赤い瞳

というハンディがある。それを乗り越えるためには、今から人の十倍以上努力しておかないと、のちに人生で後悔することになるぞってね。ついでに、好きな女とも一生結婚できないだろうとも言われた。まあ、そんなこんなで俺は十四になり、ある時マリサがこれからはリキエルについて旅にでろって言ったんだ。けど、その頃彼女は病気だったから……俺はリキエルについていく道ではなく、マリサのことを看病することのほうを選んだんだ。人間、歳をとって病いを得ると弱くなるっていうだろ。マリサもそうだった。元は剣の達人と言われるくらいの気丈な人だったのに、体だけじゃなくすっかり心のほうが弱って……それで、死ぬ何日前に、言われたんだ。『自分がおまえにしたことを許しておくれ』って。もちろん俺には、なんのことを言われてんのかわからなかった。そして、俺はその時に自分の本名を知った。シンクノアっていうのは、彼女が幼い時に死んだ、弟の名前だったんだ。俺の本当の名前は、『ティアムール』ゼン『イツファロ』って……」

そこでシンクノアは思わず泣きだしてしまい、服の袖で目頭を覆った。自分を育ててくれた母親ともいべき人の死の悲しみを、その時と同じ強さで思いだしてしまったのだらうと、センルはそう思った。

センルは彼が話の続きを語りだすのを、静かに黙って待った。シンクノアの告白はある意味、彼の推測していたとおりではあったのだが、彼が本当は一国の王子の血筋を引いているとあらためてわかり、センルはアスラン王子に対してより、この赤い瞳のイツファロ国の王子にこそ、心からの敬服の念を感じてやまなかった。

シンクノアはイツファロ国を出てからの、七年にも及ぶ艱難辛苦の旅について、そのすべてをセンルに語ったというわけではない。だが、それでもその放浪の旅がどのくらい凄まじいものであったのかは、ある程度想像がついた。マザル『マゴク』の烙印を押された人間というのは、奴隷と同じで、人間として扱われないことが多いのだ。

瞳の色が赤でさえなかつたなら、彼は今ごろイツファアの王宮で、何不自由なくぬくぬくと暮らし、その天真爛漫な明るさと賢さとで、周囲の人間を喜ばせていたかもしれない……もちろん、彼が貧しい老女に育てられることになったから、今の性格が形成されたのだともいえたかもしれないが、センルはこのシンクノアという男は、王として生まれようと奴隷として生まれようと、いずれにしても似た気質を持っていたように思えてならなかつた。

「ははっ。笑つちまうよな。こんな、寝るところにも食べることに毎日事欠くような男が、本当は王家の血を引く男だなんてさ。イツファロじゃあ、というより、聖五王国のどこでもだけど、赤い瞳の子は王子にも王にもなれない。キリエルであつたマリサが命じられたのは、忌み子の殺害だつた。でも彼女は俺のことをどうしても殺すことが出来ず、連れて逃げたんだ。当然追つ手がかかつた。そしてマリサの背中にある、特に大きな刀傷は、その時七聖將のひとりに打たれて出来たものだつたんだ。リリエルっていうのは、その時ラキエルっていうマリサと俺を殺そうとした聖將のことを命に背いて殺害した恩人だつた。リリエルはその時、マリサにこう言ったんだつて。王宮内には揉めごとが多いから、次に誰が世継ぎになるかもわからん。だから、マリサはマリサでこの子を大切に育てることにしろつて。ろくな世継ぎが立たないようであれば、いつか自分がその子に帝王学を学ばせるために出向くことにしよう……アスラオン王子は、リリエルが聖竜の剣を命懸けで王宮内から持ち去つたんじゃないかと言つてた。でも俺、正直いつてこんなもの、欲しくもなかつたよ。マリサのことも愛してるけど、それでも彼女が自分を赤ん坊の頃に殺してくれたほうが良かったんじゃないかって、何度も思った。けど、センル、あんたとミュシアに出会つて俺、初めて思つたんだ……これまで生きてきて、ああ本当に良かったなあつてさ」

シンクノアはぐすつと鼻水をすすりあげると、ハンカチで鼻をかみ、それから黙つて話を聞いていたセンルに向かつて、照れたよう

に笑った。

「ま、頭のいいあなたのこつたから、この程度のことは予測がついてたかもな。でも、これで今度こそ本当に秘密みたいなもんはなくなつたぜ。俺のケツに何本毛が生えてるか、知りたいっていうんなら、教えてやつてもいいけどさ」

「馬鹿者。そんなことを知ってどうする」

「セシルがあくまで真顔のままそう言ったので、シンクノアは笑った。

「あゝあ。俺、自分の出生をそんな、一大事であるみたいには全然思っていないんだぜ？単にセシルにずっと話さなかつたのは、マリサのことを話そうとすると、ほら、今みたいにお目々から鼻水がでてるっていう、そのせいだかな。なんにしても、ミッテルレガントの王都にいたら、リキエルにこの聖竜の剣がどうやつたら抜けるのかとか、色々聞かないと」

「そうだな。それと、今の話についての感想を私が言うとするなら王冠はなくても、やはりおまえは王だよ、シンクノア。私はおまえが王になるような国でなら、ロンディーガの宮廷魔導士など即刻やめて、おまえの国でこそ永久顧問魔導士というやつになつてやる。そして、おまえの子孫を私の命の日は続く限り、陰日なたなく見守り続けてやるよ。もっとも、その過程のどこかで煙たがられて、国から追いだされる可能性もなくはないがな」

「ははっ。でもそんな俺も今では、姫巫女ミュシアさまの側近くに仕える案山子の王子つてところだ。あの子は、本当にいい子だよ…もし俺にアイリつて存在が心になくて、あの子に出会つてたら、俺とセシルの関係つていうのは、毎日がジ・エンドの繰り返しだつただろうよ。あの子はあるんたのことが好きなのに、俺は身分違いも甚だしく、恋焦がれて千年前の探索行の鎧の保持者みたいに 闇の側へ魂を売つちまつてたかもしれない。セシル、この鎧つてやつは、絶対あんたがひとり取りにいこうとするなよ。それから、あんと俺のふたりでつていうのも駄目だ。俺たち三人で取りにいっ

てこそ意味があるんだ。なんでかわかんないけど、そんな気がする」
「確かにな」

巫女であるミュシアの身を、危険にさらしたくはないとは思いつつも、シンクノアに対してセンルは同意した。

「何故かはわからんが、そんな予感私にもあった。おまえも知つてのとおり、私は極めて考え方が合理的だから……まずは自分ひとりでルシアス島の下調べをして、なんていうことは考えていたんだ。だが、直感に従うとすれば、三人でそれは探しだすべきだろうという気がしていた。これはミュシアには絶対言わないでほしいんだが、闇魔法や邪教といったものに属する力が、私は心底苦手だな。あいつらは私の魂の生き血をすするといふか、とにかくそばにその種のものがあると、そうした感触を私は味わうんだ。といってもこれは、あいつらよりも私の力のほうが劣っているとか、弱いということではない。魔力といった点では私のほうがあいつらより遙かに上だし、圧倒的に強くもあるだろう。だが、私も伊達に九年も闇魔導士狩りを行っていたわけではないからな、あいつらのずる賢さ、人の心を騙す巧みさには、つくづくうんざりさせられたものだ。私が心配しているのはとにかく、ミュシアのことだけだ。二千年前にあった秘宝探索行では、空から凶星が落ちてきたことにより、後世にその記録が残らなかつたとされているが、私はそのことを思うと……心配でならないんだ。もし秘宝探索行がうまくいかなかった場合、ジ・エンドの結末というのはそういうことなのではないかという気がしてな」

「センルってほんと、ミュシア命って感じだよな」

軽いからかいの意味をこめてそう言っても、やはりセンルは真面目な顔をしたままだった。

「阿呆。それを言ったらおまえだって同じだろうが」

（あんと俺のそれは、質っていう点で全然違うんだよ）と、シンクノアは心の中で微笑った。（鈍い誰かさんは、賢いくせに、そのことにてんで気づいちゃいねーんだから。ま、ある意味そこがセン

ルの輪をかけていいところだったりもするんだけどさ)

「なんにしても俺、ちょっとベランダで一瞬涼んでくるわ。人前で泣いたことなんかほとんどねーのに、柄にもなく、少しおセンチな気分になっちまったからな」

シンクノアはそう言い置いて、ベランダに通じる窓を開けると、室内の暖かい空気が逃げていかないよう、ぴったりそこを閉ざした。ベランダから見上げる夜空には、冬の三大星座である、セリオン(豎琴)座、ユニコーン(一角獣)座、ドラゴン(竜)座が見える。ルエルナとルエルガの双子月は半月で、どこかその輝きも鈍かったが、それでも満天の星空と王城や王立魔術院の不思議な煌めきを眺めていると、今が第十三月という、一般でいう忌み月であることなど、忘れてしまいそうになるほどだった。

シンクノアが夜気に吐く息は白かったが、彼は冬は零下三十度にもなることがある、厳しい寒村の生まれであったので、この程度の寒さはまだ序の口といったところではあった。

(アイリ、おまえは一体今、どこにいるんだろうな？俺はいつも夜に月や星を見上げるたびに……こう思っていたよ。おまえもこの世界のどこかで同じものを見ているだろうかって。そっぴやさ、おまえがよく言ってたうさぎみたいに赤いお目々の俺にも、友達って奴が出来たぜ。それもふたりとも、一等いい奴らなんだ。いつか、おまえに会えたら紹介できるといいな。アイリはさ、もしかしたら俺のことなんか、もう忘れちまってるかもしれないけど……)

それからシンクノアは、アイリ of 消息を聞くために彼女の家へ行った時、アイリの両親が気が狂ったように泣き叫びながら、「赤い瞳のあんたの呪いがうつったから、アイリはこんな目にあっただんだ！！」と、痛烈に責められた時のことを思いだし、今さらながら、胸の奥が痛んだ。

シンクノアの当初の計画というのは、なるべく早くアイリの居所をつかみ、彼女のことを故郷のイツァーク村へ連れ帰るということだった。いなくなった娘を無事、自分が連れ戻すことさえ出来たら

……両親も娘とマゴクとの結婚を許してくれるかもしれないと思ったのだ。

（けどもう、あれから七年以上にもなる。俺も、今月の十三日で二十四歳だ。俺は他に女の子っていうのを知らなかったから、アイリが滅法美人だったってことに、実はよく気づいてなかったんだよね。でもあんな、飛空艇だの竜だのを操る連中に連れ去られたんだから、あいつらのうちの誰かの嫁さんになってるって考えたほうが自然なんだろうけど……俺に七年以上もの間、諦めない気持ちを与え続けたのは、このセリオン座なんだ）

それからシンクは、アイリが子供の頃から好きだった、故郷の短い夏のことを歌った歌を、小さな声で口ずさんだ。そしてマリサとリキエルとアイリが同じひとつの部屋にいて、楽しかった時代のことを思いだし、それと似たような時が果たして、自分にもう一度訪れるだろうかと、胸の底を深い悲しみに似た感情が走っていった。（なんでかな。聖竜の槍がく地の崖での民とやらに奪われたっていうことは、なんか俺、秘宝探索行のどこかで、アイリに会えるような気がして仕方ないんだ。もっとも、俺の背中の剣が抜けたとして、もし聖竜の槍を持つ男と戦うことになったとしたら……秘宝の使い手のうち、どちらが勝つことになるのかは、カルディナル王国のプリンクである、エリメレクどんにもわからないらしいんだけどな）

そしてシンクノアは、（アイリ、おまえは一体今、どこでどうしてるんだろうな）と、彼女と別れて以来何度となく繰り返ししてきた心の問いを、もう一度繰り返し返した。

寒さのせいで、身が一瞬震えると、シンクノアは満点の星空に背を向けるような形で、室内へ戻ることにした。そのあと彼が背を向けた夜空には、蒼い流れ星がひとつ、涙のように流れていったが、彼がそのことに気づくということとはなかった。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3073ba/>

聖竜の姫巫女？

2012年1月14日02時46分発行